西暦	邦暦	災異	記事
684	天武12	地震	10.14(11.29※)［注］本県の記録は無いが地震及び津波被害のあったことは下記から判る　［理科年表］南海道沖地震※※　民家多く倒る　土佐の田苑12平方キロ海となる　津波あり（134 32.5※※）
698	文武1	飢	［続日本紀］阿波淡路さぬき等8国※※※飢える　閏12.7(1.25)これをにぎわしめぐむ又負税を免ず
702	大宝2	飢	［続日本紀］阿波（外七国）飢える　9.12(10.17)使を遣はしてめぐむ
704	慶雲1	長雨	［続日本紀］4.27（6.5）阿波等4国苗損ず　並びににぎわし救う ［注］当翌年干飢の国多し
706	3	飢	［続日本紀］7（8）月（西海道を除く）六道飢え使を遣はし並びにこれをにぎわし救う
731	天平3	豊作	［阿波志］8（9）月 今才登穀す朕甚だこれをよみす　思うに天下と共にこの慶を受けん宜しく京及び諸国今年の田租の半を免ずべし　但し淡路 阿波讃岐等の国の租並びに天平元年以往の連負凡てにこれを免除す
733	5	干	［続日本紀］閏3.2(4.20) 紀伊淡路阿波等国（前年）干にあい殊に甚しく五穀実らず宜しく今年の間大税を借し産業を続かしめよ
734	6	地震	［理科年表］4.7(5.18)死者山崩れ多し（伊賀地方か） ［注］［続日本紀］に百姓の家壊れ圧死者多く山崩れ河ふさぎ地往々裂けあげて救うべからずとあり［阿波志］にも同文をのせるが震央が遠く又非常に強くもなかったので本県えの影響は少いと思はれる
762	天平宝字6	飢	［類聚国史］8.23(9.15)使を遣はし阿波讃岐両国を取調べ飢民に給す
763	7	飢	［続日本紀］7.26(9.7) 備前阿波二国飢える　並びにこれをめぐみ又使を遣はしめぐむ ［注］［日本凶荒史考］5年五穀登らず6年霖雨今年また五穀 熟せずために諸国飢疫して死者多し
764	8	飢	［続日本紀］4.16(5.22)干阿波讃岐伊予三国飢え並びにこれをにぎわしめぐむ
765	天平神護1	飢	［続日本紀］3.16(4.10)左右京及び阿波等10国飢える　これをにぎわしめぐむ
781	天応1	飢	［類聚国史　阿波志］阿波飢える
790	延暦9	飢	［続日本紀］4.5(5.23)阿波等14国飢える　これをにぎわしめぐむ ［大日本史］阿波飢ゆ　［注］［続紀］5，6月干
798	17	飢	［日本後紀］3.10（4.19）伯耆阿波讃岐等国飢え使を遣はしてめぐむ ［類聚国史］6.5詔して去年の田 租を特に全 免す［日本紀畧］9.23阿波国 飢え使を遣はしてめぐむ
802	21	風雨	［類聚国史］紀伊淡路阿波讃岐等10国田を損し百姓の負税を免す
805	24	飢	［日本後紀］12月阿波等21国当年の税を免ぜんことを請う　これを許す
823	弘仁14	飢	［類聚国史］7.19(8.29)美濃阿波2国飢病を言上す　百姓をにぎわしめぐむ
830	天長7	景雲	［日本紀畧　類聚国史］1.2(1.29)阿波国景雲を奏す
833	10	飢	［続日本後紀］5（5）月京師五畿内七道諸国飢疫
837	承和4	干	［続日本後記］9（10）月 今月一日より干ばつ30日五畿内七道被害を申出るもの31国　［注］阿波の名はないが淡路伊予あり
866	真観8	風波	［三代実録］4.7(5.24) 尾張阿波両国風浪百姓飢饉 尾張国正税稲6万束　阿波国8万束を借し民を救う　六月天下大干飢餓多し
886	仁和2	水	［吉野川一元西林村古記録］8（9）月大洪水で河 道岩津の南に変る ［注］8．7（9．8）京都大風水の記事あり

※　本書では邦暦（西暦）で月日を表はす　両暦の対照は神田茂編年代対照便覧による
※※　東経　北緯を表はす　※※※原文には国名をあげるが本書では極く近国以外は省く

西暦	邦暦	災異	記事
887	仁和3	地震（津波）	［理科年表］7.30(8.26)庁舎転倒し津波あり死傷多し（南海道東海道沖）(135.3　33) ［注］本県の記録はないが次の記事でその規模が判る ［三代実録］申刻地大いに震動す数刻を経て尚止まず　東西京の家往々転ぶくし圧死する者多し或は失神頓死する者あり　亥刻又震うこと三回夜東 西に声あり雷の如きもの二回　是日五畿内七道諸国地大いに震い官舎多く損す且つ海潮陸に漲ぎり溺死する者記す可からず其中摂津最も 甚し
946	天慶9	甘露	［洞院家記］6.23(7.24)阿波国甘露降ると言上
1098	承徳2	水	［吉野川一元西林村古記録］大洪水　岩津の岩浜現れる
1150	久安6	風水	［日本凶荒史考］8(8〜9)月この年風水諸国飢荒す ［台記］阿波土佐讃岐等11国稔らず　［注］8.4及び8.20京都風水の記事あり
1153	仁平3	干	［台記］阿波土左等7国稔らず（翌5.23申す）
1181	養和1	干，飢	［注］本県記事はないが［日本凶荒史考］に　去年春夏炎 干甚しく加うるに諸源氏ぼつ興，各地騒乱するを以て農耕 時を失い道路また塞す，ために諸国大いに飢えこの 年よりは疫疾 並び発し地方 偏す うにあって活計 を失なうもの出て諸方を流浪す然るに帝 都は兵馬の中にあり救恤の事なく諸院蔵人或は僧綱有官の輩にして尚餓死する程 なれば一条より九条京極より朱雀に至る間に死するもの四万二千三 百と注せられ，市中人相食むの惨あり放火強盗大に行はれ翌寿永 元年秋に至るも尚止むところを知らずとあり
1185	文治1	風	2.18(3.21)［保歴間記］範頼義経渡部神崎に着く義経は阿波国に渡り範頼は山陽道を長門え向う　義経大風なりけれど 我舟5そうを出し渡られけり　残りの舟は梶原に恐れて出さず三日に渡る処を只三時に阿波国八間の浦にぞ吹付たる ［阿波志］九月田損う　8.28(10.6)紀伊　9.8(10.15)近畿関東風水あり
1230	寛喜2	風雨	［注］［日本凶荒史考］この年夏秋寒冷，諸国六月雪降り七月霜あり八月風水稼穀大いに損し草木枯れること冬の 如し　加うるに冬温暖にして筍生じ麦黄熟す　また蝗　ひぐらし等才末に至るも声を収めず時 候の戻和甚しきこと古今未曽有諸国大いに飢荒す　越えて翌3年春より疫 病並び行はれ飢疲して死するもの極めて多く京中餓死者道路にみち餓 民 或は禁中の饌を奪うありその惨状治承養和以来と称せらる
1259	天正1	飢	［注］本県の記事はないがその惨状は上記の1230年に劣らなかった様で［日本凶荒史考］に　これより先正嘉元年干ばつ甚しく同二年陰 冷六月寒風冬の如く秋風水の災ありて連年登らず　加うるに此年より飢 疲並び行はれ諸国死するもの極めて多く或は人相食むの惨あり餓死 者道にしき翌文応元年秋に至るも尚止むところを知らずと 尚　上記と同程度の大飢饉の記事を［日本震災凶饉攷］から拾うと大凡次の様になる1200年代5，1300—5，1400—16，1500—5，1600—3，1700—2，1800—0
1361	正平16	地震（津波）	6.24(8.3)［理科年表］摂津阿波に津波被害あり 流失家屋死者多し（南海道沖）(135.33)［大日本地震資料—参考太平記］中にも阿波の雪湊と云う浦には俄に大山の如き潮漲り来りて 在家千七百余宇悉く引汐に連れて海底に沈みしかば家

西暦	邦暦	災異	記事
			々に有る所の僧俗男女牛馬鶏犬一つも残らず底の藻屑と成りにけり ［阿波志］地大いに震い難波津の海溢れ鳴門の潮かる　雪池は東西 由岐村間にあり康安元年（正平16年のこと）地大いに震い海わき，全村蕩尽す　6.16より地震10月に至る　地裂けて池となる長さ220歩，径100歩，太平記 を見るに正徳中4分を以て西村となし6分を東村とす，風波起る毎に村民船をここに置く。 ［注］有名な東由岐の古碑康歴碑は此時の遭 難者を供養したもので阿波志に「康歴二庚申十一月十六日海翻震盡死亡甚大合葬于此」とあり，海部郡誌によれば碑面には60名の戒名を記載す（康歴2は地震後19年目）
1363	正平18	飢	［日本凶荒史考］阿波国飢える［知覚普明国師行業実録］二月 阿州に行く時に国中大飢途に餓死者多し師粥を貧人に施す，乞う者連日，大守以下の官吏喜んでこれにならい蘇生するもの少なからず
1420	応永27	干，飢	［注］本県の記事無いが大飢饉は翌28年及び31年にも 発生した。［日本凶荒史考］に　去年関東慶々風水の災ありこの年諸国干　畿内西 国特に甚しく淀川乾涸して渡船なし　ために農稼焦枯して大いに飢荒す。 超えて28年春より疫病行はれ天下飢疫して死する者多く京落死骸 を踏みて通行すと云う。
1460	寛正1	飢	［注］本県の記事なし，翌2年に続く大飢饉で［日本凶 荒史考］に　去年夏秋炎干のち屢々風水の災あって登らず，時兵乱の故を以て道路ふさがれ天下飢窮す　この年洪霖五六月陰冷冬服を着するの時 候の戻りあり蝗虫風水の災累りて大いに凶荒し飢疫並び行はれ諸国 死するもの多く就中備美伯三国大飢して人相食むの惨あり京落また甚しく寛 正二年夏に於ける路上餓死者八万二千と称す。
1483	文明15	洪水	［徳島県史料年表※］による　但し近国に記事が見当らない
1512	永正9	津波	8.4(9.13)　［注］　この日地震なし又風水害なし或は外国地震による津波か ［宍喰浦旧記—宍喰村の内久保村古城成立旧記］八月 洪浪入みち右所の分残らず流失いたし候　其節所の城山へにげ上がる者数十人なり，南の橋より向の町分も残らず流失，然れども此所 は山近故多くの人死もこれ無く候，橋より北分は町家多くいたみも之れ なく候へども死人多くこれあり候　凡そ其の節両町の人老若男女共三千七百 余人なり橋より向うの町一家も残らず流失其上屋敷土地尽く堀流れ一面 川になり，住居なりがたく助命の者皆々当浦へ相集り所の城主 藤原朝臣下野守元信公同宍喰村城主藤原朝臣孫六郎殿お取立てこれあり， （宝永4年1707の地震津波記事中宍喰浦旧記参照）
1578	天正6	長雨	［徳島年表］この年長雨
1579	7	水	［阿波志］8(9)月大水去らざること三日者多く死す　　近国に記事なし
1580	8	病	［阿波志］春大疫夏に至り止まず　［徳島年表］天正8年より10年まで盗賊多し
1582	10	水	［阿波志］9.5(9.21)　尚長曽我部元親の大軍細川真之を勝瑞城に攻めた時吉野川大洪水で土佐軍は経験なく意外の出来事に非常に混乱した伝説あり（金沢治）
1584	12	洪水	［徳島年表］月日不明 ［注］尚［阿波志］に記載のこの年11月29日の地震は飛弾の大地 震であるから徳島ではそれ程被害はなかったと考えられる

※　徳島県史編さん委員会が昭和37年1月発行
本書ではこれから引いたものが極めて多い　以下［徳島年表］と略記する。

西暦	邦暦	災異	記事
1594	文録3		お亀磯陥没の伝説 ［注］お亀磯は［徳島市津田町の沖合約4.5キロにあり最低潮時に水面に現れる程度である］かってお亀千軒のにぎやかな島であったが不敬の者があってある日にわかに電雷震動して山のような大波が打寄せ見る間にって全島陥没した。福島四所明神，八万潮見寺はこの島から移したものであるという，尚一説には大同2年(807)となっている（その年秋田で松峰陥没の伝説あり） これは日本各地にある千軒伝説の一つと思はれる　菊地寛も戯曲亡兆にこの話を書いている尚この日の地震記録はない．この2年後の1596年9.4に別府湾に津波あり爪生島沈下死者708を出した
1605	慶長9	地震（津波）	12.16(1.31)［理科年表］死5000 大津波あり土佐宍喰で溺死3800 房総半島4Km余り干潟となる（二元,一は南海道沖他は房総半島沖）(134.9 33)（140.4 34.3）［宍喰浦旧記］辰半刻（9時）より申上刻（16時）まで大地震にて酉の上刻（18時）月出の頃より大浪入来り海上凄じく惣浦中泉より水湧出る事 二丈余上り地裂け沼水湧出言語に絶えたる大変にて其頃皆々古城山に逃登る。人数 百七十余人，老小は道にて浪に打倒れ皆々流死町家寺院等流れ又倒れ悉く破失，諸道具混乱又は地に打埋れ所一尺或土地により二尺三尺砂に埋れ十七端帆十五端帆の廻船数艘日比原在より奥へ流込み，其外小船等正梶井関へ懸り有之也 山野にて飢を凌ぎ三日三夜ほうろくにて食を煮焼命繋ぎ霜雪に閉衆人困窮いう方なく溺死一千五百余人，翌十七日辰刻より山下り見るに城山より西北方一面人々の死骸目も当て難く，北往還道筋も同様にて其節久保在所内に二ケ所惣塚にて死骸埋め其後地蔵石仏建立す祇園山西山際也 ［鶴爽町大蓮華弁碑文］　南無阿弥陀仏　敬白右意趣者人王百十代御宇慶長九甲辰季十二月十六日未亥刻　於常月白風寒凝行歩時分　大海三度鳴人々巨警拱手処逆浪崛起其高十丈　来七度名大塩也　剰男女沈千尋底百余人　為後代言伝奉興之　各平等利益者必也　［寛文4(1664)建てる］
1615	元和1	風雨	4.27(5.24)蜂須賀至鎮大阪出陣の際景風雨にあい沼島に避難
1619	元和5	凶，病	［徳島年表］凶作疫病流行　［板野郡誌］痘瘡疫疾流行
1626	寛永3	干	［徳島年表］　［日本凶荒史考］この年干諸国飢荒す
1632	9	干	［蜂須賀家記］この年干　有司に命じて窮民をめぐみ救う　讃岐干
1642	19	飢	［徳島年表］四国九州東北飢える ［注］［日本凶荒史考］に　去年今年諸国長雨陰冷秋稼登らず殊に奥羽北陸の地十七年より連年飢荒してが死するもの多く或は人相食むの惨あり土民工商等一衣まとうなく赤裸のまま流離す幕府令して飢者を助けて郷里に帰らしめまた仮屋を設けて収容し郷村の酒造等に穀類の消耗するを停め屢々下令して農耕を督励せり　とあり［徳島県史科年表］によると当年の米価は平時の2，3倍に高騰し又翌年に亘り農食に雑穀を用い米多く食はぬよう申付けが数回出ている　この時不正官吏豪商等の米価つり上げがあり処断されている。
1648	慶安1	火	［徳島年表］11.14(12.17)沖洲浦類焼により八軒船屋やけお召船六そうを失う
1662	寛文2	風雨	［徳島年表］6.29(8.13)－7.2お国大風雨　さぬき土佐紀州とも大風雨水
1663	3	火	［徳島年表］1.23(3.7)那賀郡橘浦焼失
1667	7	〃	［阿波志］7.29(9.17)内坊火く紀伊国町に発し稲田氏に及ぶ町をあげて悉く焼く

西暦	邦暦	災異	記事
1673	延宝1	水	5.14(6.28)［野史—万天目録］中旬九州，中国，山陰，南海洪水
		水	［横瀬町史］9.13(10.22)勝浦川大水，坂本の長福寺前から南川内村まで川成
1674	2	風雨	［山鹿素行日記］8.17(9.16)四国，中国，九州各大風高汐，東海道又洪水
		飢	［徳島年表］那賀郡飢きん米一石75匁と約2倍の高値 ［注］［日本凶荒史考］に　この春干夏秋屢々風水あり諸国大いに飢荒が死者多し
1675	3	火	［阿波志］3.2(3.27)内坊火く新町に発し魚町に至る凡そ154戸
1678	6	風雨	8.5(9.20)［山鹿素行日記］4，5日大雨終日止まず　4～6日の間西国四国洪水大風　［徳島年表］四国，九州洪水
1680	8	飢	［徳島年表］不作飢民多し ［注］［日本凶荒史考］に去秋(1680)風水冬厳寒雪多く諸国荒飢す　この年また気候順ならず風水の災ありために穀価とうきして窮民飢死する者多し中にも京畿地方最も甚しく翌年に至りが死者道にあまねしという。
1681	天和1	凶	［高原村史］
1682～3	2～3	飢	［徳島年表］大ききん　3年4月干害水害について補助法出る
1685	貞享2	火	［阿波志］3.6(4.27)新町火く免許町に発し淡路町に至る凡そ467戸 ［注］　この頃の徳島の家数1558人口20590（徳島年表）
1687	4	水	9.9(10.4)［阿波志］九月大水禾を傷う［蜂須賀家記，井内谷村誌］風雨 ［注］中四国，近畿其他大風雨水
1688	5	火	［徳島年表］1.26(2.27)大工町より出火西船場悉く火き翌朝鎮火261戸
1689	元録2	水	［阿波志］8(9)月勝浦川大いに溢る　近国記事なし
1695	8	水	［神山町広野村川成引帖］8.26(10.3)鮎喰川洪水　近国記事なし
1698	11	火	［富岡町史—文珠院記録］1.21(3.2)町分皆々残りなく焼け尽す
1700	13	水	［川成引帖］4.11(5.29)鮎喰川洪水　近国記事なし
1701	14	水	［川成引帳］7.10(8.13)亥刻より大雨三昼夜　神山町下郡右左山全戸流失　田畑砂入　近国記事なし
1701	14	風雨	［徳島年表］8.17(9.19)御両国大雨洪水　［神領村誌］10日程雨降りつづき山崩れ川筋変はる　［吉野川］舞中島全戸流失　四国近畿以東の大風雨水
1703	16	風雨	［徳島年表　名東郡誌］大雨大洪水（月日不明）8.19(9.29)伊予に大風雨あり
1707	宝永4	地震（津波）	10.4(10.28)［理科年表］潰家死傷おびただし(潰家29000死4900) 九州南東岸より伊豆まで津波，土佐ではその高さ20m余り，土佐西南部処々陥没南東部隆起（東海道及び南海道沖）(135.9　33.2) ［阿波志］地震汐大いに溢れ瀕海並に溺す　十一月以て聞す。 ［宍喰浦旧記］　宝永四亥年十月四日巳下刻大地震にて弱家土蔵壁落ち鴨居離れ所により辻町裂け沼水湧出衆人周章て愛宕山へ逃上り候所午の下刻忽大潮入来り浦中家蔵流失溺死人男女十一人　浦中漁船漁具不残流失　土佐屋五郎兵衛と申者の船十一端帆願行寺南の畑へ流れ上り　尤寺地残り候へ共大に痛み座上へ汐二尺余りも上り久保村家多流失祇園山へ逃上り助命致す也　此時一時計大地震にて土地によりさけ水湧出，川井水など水大而，しばらく有て川泉不残水引乾　海底も遙に干潟となり夫より大汐箭を射る如くうち来る　其以前干続き十月最初甚暖気強諸人単物着用　其日は風もなく晴天にて雲なく静なる日の事なり。永正九年の大潮には愛宕山に城有戸井門に大手大門あり是閉ける故城内

西暦	邦暦	災異	記事
1707			山へ入事ならず死人多く有之由慶長潮は潮の入候事に諸人心不付立騒逃候事遅く溺死人多く有之由宝永潮には諸人心得速に逃候故流死人無数よし云伝ふ ［鞆奥町小連華弁］　宝永四年 丁亥 冬十月四日未時地大震后海潮湧出丈余蕩々穿陸反覆三次而止　然我浦無一人之死者可謂幸矣　後之遭大震者予慮浦潮之変而避焉則可［牟岐町八幡社奉納板書］宝永亥の年初冬四日未の刻大地震振て人皆肝を冷し魂消なんとす　かかる時は必ず津浪の災ありと云伝へ古き書にも見えしが果して刻を隔てず静なる海原忽騒て洪波忽が如く浦里を過て仏閑民家七百余宇流れ失せ老若男女百十余人溺れ死す（以下畧） ［野村家伝来記（那賀郡見能林村）］宝永四年亥十月四日昼四ツ時より大地震四ツ半時に収まる　大地一面に割れ家木乱崩れ高山より大石落重なりさながら天より雷落掛るに貴賤生たる心地なし　九ツ時誰かいうとなく大浪打来たる高き山に逃れよと云う　時しもあれ早や 川に自波 立ち大 波見えければ 我も～親は子を連れ子は老いたる親にかしづき右往左往に逃登るさま何にたとえん方なし，程なく一番津波峯麓は大荒神馬場先まで二番波馬場中程まで　夷山にて高さ一丈余り…一番波行くやいやなここを先途と津峯え逃る　然れ共三番波立にて後波無し，地震は折々少し冤ゆること数日なり，下福井，橘浦，答島村より流れ出でる家海上に満々たり ［注］上記の外撫養町旧記，三岐田町誌小坂元日堂記，橘浦森家文書，浅川稲観書，海部郡四方原村野村家文書等記事あり，尚隣国土佐の［谷陵記］に徳島　士屋敷230軒民屋400軒地震につぶる　潮入はなし　黒土浦郷共潮入亡所　富岡浦郷小破橋半亡所　泊浦小破　井佐より志和木までは亡所不知　由岐両浦共亡所溺死夥し浅川在家大形流失死人少し　海部堅浦事なし　鞆小破宍喰亡所死人少し　とあり
1709	宝永 6	風雨	［宍喰浦旧記］7.4(8.9)風雨高潮　　近畿大風
1710	7	風雨	7.26(8.20)［里浦村誌］17日出水　26,7日大風雨潮打年貢御免のことなり ［注］近国記事なし
		干，飢	［徳島年表］大干ききん　［注］高松藩記六月より七月干
1711	8	飢	［徳島年表］那賀郡飢きん
1716	正徳 6	火	［海部郡誌—池内氏系図書］4.8(5.28) 浅川浦大火　漁家商家二百余戸を火き浦中焦土となる
1717	享保 2	干	［徳島年表］那賀郡
1718	3	干	［徳島年表］大干　［注］高松藩記七月八月大干
1721	6	風雨	［蜂須賀家記］八月風雨敗禾［徳島年表］8.10～15(9.30～10.5) 御国風雨洪水につき御地方90055石余御損亡流家99軒流死男8女1馬30牛68 ［注］　同日近国記事なく閏7.15（9.6)中四国近畿中部関東に大風雨水あり或は誤りか
1722	7	水	［蜂須賀家記］六月より八月屢々大雨傷禾漂人家四百三十余［徳島年表］6.23(8.4) 御国風雨洪水につき御地高83375石余御損毛　潰家311戸 溺死男1流失牛馬6　　四国山陰東北に風雨洪水
		水	7.10(8.21)［徳島年表］御地高53610石余御損毛　潰家40流家5 溺死男2流死牛馬3　　伊予に洪水あり
		火	［阿波志］7.12(8.23)大倉所火く　延て会議所に及ぶただ外門火けず
		水	8.23(10.3)［徳島年表］御地高37567石余御損毛　潰家73溺死男2女1 ［注］伊予，さぬき京都に記事あり

西暦	邦暦	災異	記事
1724	9	火	4.16(5.8)［徳島年表］雨天寅刻過より 内町三丁目 浜 屋 孫三右ェ門より 出火左右火け片側一丁焼失
		干	［蜂須賀家記］夏大干傷禾［徳島年表］当夏御両国干ばつ御地高161170石余御損毛　［注］　阿波志には傷禾161770石，11月以て聞すとあり　又高松藩記には閏4月より7月まで大干とす　西日本一体の干ばつ
1725	10	火	［徳島年表］2.27(4.10) 風雨亥刻通町小横丁中程より出火左右え 焼け東の方一軒残し西の方壺尾家にて焼止り丑刻過鎮火
		干，虫	［蜂須賀家記］夏(7～9)大干傷禾［阿波志］二州大干且つ蝗　傷禾116130石 正月をもって聞す［神領村誌］干蝗害　飢人多 ［注］　この干ばつは西日本東北で発生，尚本県では翌年にも 大干蝗害 とあるも隣国の記事見当らず
1726	10	火	［徳島年表］12.10(1.2)日和佐村同浦共焼失
1726	11	干，虫	［阿波志］夏二州大干且蝗　傷禾96090石　12月以て聞す
1727	12	火	［徳島年表］10.7(11.19)内町焼失　新町より魚店まで
1728	13	風雨	［阿波志］秋二州大風雨　海溢れ傷禾94150石 ［注］　讃岐伊予には8.4(9.7)に風水あり
1729	14	火	［徳島年表］2.4(3.3)木岐浦焼く
		風雨	［徳島年表］8.19(9.11)　　さつま備前京都に記事あり
		風雨	［蜂須賀家記］9.14(10.6)大風雨傷禾［阿波志］秋大水傷禾23万石 閏9月以て聞すとあるが［徳島年表］には174370石余損毛となる　四国中国京都大風雨水
1730	15	風雨	［徳島年表］秋風雨御地高127050石余損毛 ［海部郡野村文書※］7.24(9.6) 晩より25朝まで大風　所々の家 過分に潰れ松原御林浜松34本余りも根かえり百年来にも覚え申す者無之，海よりりょう火と申す火吉野林前まで飛申す［那賀教育］ 秋洪水那賀郡飢きん ［注］土佐さぬき大風洪水北陸にも及ぶ
1731	16	風雨	［野村文書］7.11(8.13)大風水　　13日遠江大風あり
		風雨	［蜂須賀家記］8（9）月風雨傷禾［阿波志］秋二州大風且雨　傷禾125059石 9月以て聞す　　8.10(9.10)に諸国風水記事あり
1732	17	虫，飢	［阿波志］夏二州蝗傷禾63950石　12月以て聞す ［野村文書］秋うんか大発生下灘飢人7000四方原200追々飢死 ［麻植郡誌］50年来の大飢きん藩の財政窮乏［神領村誌］485人に麦を借す ［注］［日本凶荒史考］に去冬寒気薄く気候順ならず此年春より六月まで屢々降雨淫湿のち陰冷行はる　この頃より九州四国中国に蝗害起り漸次畿内に波及し公私領その災に罹るもの極めて多く収穫半に充たざるもの46藩を算し九州最も甚しく所により収穫皆無に終わり，幕府諸候及び家士に金銀を恩貸すること三十四万余両米穀を賑貸すること三十四万余石に及び一方にては金品の義捐を勤誘しまた時疫食毒の処方を頒ち以って救荒の万全を期したり，これより先，諸国連年豊熟穀価低落せるを以て士農困窮す，諸候またこれに同じければ米穀をさげすみ力めて外に出しついで凶才に遭う故を以て救荒の法良しきを得ず公領の餓死者を出さざりしに比し飢疫して死するもの極めて多し　という ［月堂見聞集］に　当年は風雨時を得，五穀豊年のところ西国表の国々稲虫にうんかという虫生じ次第次第に隣国え移り 五畿内近所まで参り候

※　海部郡四方原村野村家文書は庄屋野村七左ェ門の家記で1636～1774に及ぶ　以下野村文書と畧す

西暦	邦暦	災異	記事
1732			其虫後には形大になり候，こがね虫のように成り候，西国方言此虫を実盛と申候，甲冑を帯したる形にて羽あり一夜の間に数万石の 稲も喰候由これにより俄に米穀65匁に売買仕候，極月に至ては百二三十 匁位になり申候とあり［徳島年表］によれば米価一石平生 3.40匁のところ8.90匁に騰貴した。幸い本年北陸東北で豊年だったので 徳川幕府はこれを被害地え廻 送し救済に務めた　同年表翌年の記事に去年より西国四国中国飢人950790人と あるも［虫付損毛留書］によれば969946人（外に餓死人7448牛馬2353）とあり内訳は伊予，安芸，備後，出雲肥前，豊後，豊前，筑前，日向，石見，前中等で伊予最も 甚しく飢人24万，死5818人を出した尚［野村文書］によると翌年救 済米の陳情と 四方原 村餓死人14，5名の記事あり
1733	享保18	病	7(8) 月［徳島年表—阿淡年表］この頃世上一統風病流行煩はざる者なし，勤番の諸士漸くる，4人　4，5日にて快気　江戸中住来一両人に過ぎす ［注］この記事は［柳営年表秘鑑］と甚だ似ているのでこれから 取ったものであろう　尚［一言一話］にこの年六月より秋半に至り全国 疫病流行し摂津和泉河内は春より時疫行はれ大阪市中の患者 16046 死亡者 3623癈者9429，六月現在患者3994人とあり
1738	元文3	風雨	［徳島年表］6.26(8.11)御国風雨出水につき御地高 73475 石余 御損亡流死 1 ［注］この日紀州風雨
		風雨	［徳島年表］8.12及び17(9.25，30)御国風雨洪水御地高67119石余御損亡　流死男 1 牛 6　　12日讃岐　17日紀伊に風水あり
1739	4	風雨	［徳島年表］　8.5(9.7)お国風雨出水御地高97754石余 御損亡流死男 4 女 4 馬 1 ［注］九州四国山陰奥羽大風雨　　牛 1
1740	5	水	［徳島年表］7.1(7.24)大洪水損亡51430石 5 斗 4 升余　山崩圧死男 4 女 2 流死 ［注］1，［徳島年表］によれば閏7.1 (8.22) となっているが 同日は越前美濃に風雨あり，一方7.1は讃岐 風雨 なので此の日を取る。2，元文 2～5 年諸国に凶作風水あり，［木頭村誌］にむしろまで食うの記事あり
1741	寛保1	風水	［徳島年表］7.21(8.31) 御両国風雨出水につき御地高 90269石余御損毛 ［注］鹿児島四国近畿大風雨水
1742	2	火	［徳島年表］2.8(4.15)申刻海部郡 鞆浦出火家数278軒寺 2 軒社 1 ヶ所焼失　えびす段より出火東 分残らず焼失（鞆奥町史）
1746	延享3	風雨	［徳島年表］8.24(10.8)風雨洪水56318石 1 斗御損亡［野村文書］大風 ［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　　四国山陰の風雨
1748	寛延1	干	6～8(6～9)月［野村文書］干天17日に及ぶ　　讃岐筑前東北大干
		ひょう	［野村文書］6.27(7.22)八ツ時俄かに曇り雷鳴り 4 匁 5 匁程の霰降り申候
		風雨	［野村文書］7.22(8.15)夜半より北東～北風吹き雨も中水に候　北方は五十年来にもこれ無き大水山 潮と申し牛馬人等大分流れ此海沖へも流れ来り申候 ［注］さぬき大風洪水
1747	寛延1	火	11.23(1.11)［徳島年表］寅刻那賀郡中島浦より出火家数150軒同郡赤池村34軒焼失
1747	2	火	8.14(9.25)［徳島年表］海部郡西由岐浦民家より出火家数137軒焼失
1751	宝暦1	水	閏6.19(8.10)［徳島年表］御国洪水55001石 1 斗 5 升余損亡　伊予讃岐風水あり
1752	2	水	［神山町川成引帳］10(11)月鮎喰川洪水　　近国の記事なし
		火	11.14(12.19)［徳島年表］巳刻美馬郡脇町民家190軒寺 1 ヶ所焼失同日申中刻鎮

西暦	邦暦	災異	記事
1754	宝暦4	風水	［徳島年表］秋御国風雨洪水17579石 7 斗余御損毛 8.28(10.14)［野村文書］千年にも無之大水，善蔵寺の庭へ高瀬乗入申候，谷中の植田十ヶ村平均五分通り川に成り ［注］　［日本凶荒史考］翌宝暦 5 年(1755)は夏霖雨洪水で諸国損亡多く特に奥羽地方は六月尚冬服をまとうの陰冷行はれ秋に至ったので青立のところえ早霜至り大飢饉となる　その惨状は天正以来と称される
1756	6	風雨	［蜂須賀家記］9 (10)月暴風雨傷禾［大俣村誌］此頃連才凶荒上下困弊す ［徳島年表］9.5(9.28) 御国風雨洪水にて32007石9斗余御損毛流死人11（男 5 女 6）牛 5 馬 2 流家118軒倒家417軒［野村文書］9.16(10.9)夜戌刻より北風吹き同八ツ時まで雨降り申さず少しの時雨にて風強く家の棟木を痛め申候 ［注］9.16(10.9)中国近畿大風雨水あるも9.5隣国に記事なし
1757	7	風水	［板野郡誌］7.26(9.9) 大風雨潮打御蔵給知共年貢御免［川成引帳］大洪水 ［野村文書］八ツ時より大風丑寅の方より吹出で其夜八ツ時まで未午の方にて吹申候　［徳島年表］御国風雨洪水92140石損毛　　中四国　紀伊大風雨 ［注］　尚［板野郡誌］に7.17(8.31)出水田畑被害全村に及ぶの記事あるも隣国に見当らず或は月日の誤りか
1762	12	風水	［徳島年表］御国6.26(8.15)淡州8.8(9.25)～9風雨洪水 合計60597石余 御損毛 ［注］6.26伊予に風雨洪水　8.8九州山陰大風雨水
1763	13	火	［徳島年表］9.1(10.7) 酉中刻海部郡 鞆浦民家より出火家数235軒 社 1 ヶ所 焼失　寅刻鎮火
		風水	［徳島年表］9.3(10.9)御国風雨洪水に付20585石余損毛近畿北陸等風雨水あり
		火	［徳島年表］10.20 11.24)日和佐浦民家より出火家数389軒社2ヶ所焼失卯刻鎮火
1764	明和1	風雨	［山城谷村史］4（5）月風雨洪水麦枯れる ［山城谷村史］6（7）月暴風雨　　6.30(7.28)紀伊大風雨の記事あり
		風雨	［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　［山城谷村史］八月風雨長雨 ［徳島年表］8.2(8.28)御国風雨洪水63288石余御損毛 ［注］　8.3丹波に洪水，奥羽に大風あり
		火	11.29(12.21)［徳島年表］海部郡民家より出火家数116軒焼失　己刻鎮火
1765	2	火	2.17(4.6)［徳島年表］子刻美馬郡脇町出火家数150軒焼失　翌日辰刻鎮火
		水	［徳島年表］4.16(6.4)洪水57435石余損毛　［注］山城 中部，江戸に洪水あり ［蜂須賀家記］四月洪水麦枯　六月暴風傷禾　八月又霖雨洪水
		風水	6.26(8.12)［徳島年表］風雨洪水59651石余損毛　　近国記事なし
		風水	［徳島年表］8.2(9.16)洪水高潮119628石余 損 毛［板野郡誌，川成引帳］酉年の大水と云はれる　　四国，近畿，関東の大風雨洪水 ［注］　尚［徳島年表］に8.8風雨洪水の記事があるが近国になし
1766	夏3	干	［蜂須賀家記］6～8月大干禾枯る重喜公屢水干にありを以て国用支えず借金を幕府に請う，不充　［徳島年表］6～8(7～9)月御国干ばつ107636石9斗損毛 ［注］　この干ばつは九州，四国，近畿の範囲で関東は長雨あり
1767	明和4	干	［蜂須賀家記］夏秋大干傷禾 ［徳島年表］六月七月中御国干ばつ77000石余御損毛　　近国記事なし
1768	5	水	［神山町川成引帳］9(10)月鮎喰川洪水　　近国記事なし
1769	6	風水	［徳島年表］8.19(9.18)御国風雨洪水68434石余損毛　　讃岐に風水あり
1770	7	干	［蜂須賀家記］五月より降らず 7 月に至り禾枯る［徳島年表］五月，閏六月，

西暦	邦暦	災異	記事
1770			七月御国干ばつにつき御地高131900石余御損毛
			［注］全国的な干ばつ［板野郡誌］によると数年に亘りて不穀登らず百姓一同窮乏して拝借米歎願せし庄屋の指出書次の如し板野郡板東村，家数百十軒内98人極飢御役負人　内9人中飢御役負人　内313極飢御役外男女内39人中飢御役外　右は明和七年十月より同八年正月二十九日まで池田山城拝知の第二次飢扶持にして其他は同正月に引継ぎ第二次分追願は家数百七軒443人同九年辰二月には家数三十軒其人数126人
1771	8	水	［徳島年表］記事あるも月日不明
1772	安永1	水	5.27(7.9)［徳島年表］お国出水御地高17042石余損毛 潰家4 流家1　近国の記事なし
		風水	［蜂須賀家記］夏大水秋又風雨 藩士の俸録の半を3ヶ年停む［徳島年表］8.20(9.17) 御国風雨洪水御地高117981石余損毛流死家倒れ相果て候男女86人同牛馬31疋流失家70軒倒家壱並牛屋共9674軒　四国，中国，近畿，東海道に大風雨水
1774	3	風水	［蜂須賀家記］夏秋大水　是より天明寛政間水干の災有らざる年なし
			［徳島年表］6.23(7.31)御国風雨出水御地高39985石余損毛
			［注］近畿，佐渡，江戸風雨洪水記事あり
		風水	［徳島年表］9.1(10.5)2日御国風雨出水御地高23735石余損毛　［川成引帳］秋洪水　丹波但馬等風水記事あり
1775	4	水	［徳島年表］5.5(6.2)尚5.15　6.4洪水の記事あるも近国になし
		長雨	［徳島年表］当夏中長雨7.3風雨出水にて御地高30634石余損亡　尚 霖雨の記事は備中京都江戸にあり
			［注］この年那賀川大洪水の記事あり［木頭村岡田日記］
1778	7	火	［海部郡誌—池内氏系図書］3.4(4.1) 浅川浦大火　漁家商家150戸 焼く　火元孫右ヱ門　惨状藩庁に達し建家料及び米銭を与えらる。
		風水	［板野郡誌］8.8(9.28)より3日間風水害［徳島年表］出水　御地高43900石余損亡［注］この日筑前に風雨 近国になし 7.8(7.31)伊予に洪水あり或は誤りか
1779	8	雪	［続日本王代一覧］9.26(11.4)此頃大いに寒し紀州阿州の高山雪降る
			［注］この年4(5)月諸国余寒　7～8 (8～10)月　風雨記事あり
		干水	［阿波藩民政資料］干天水害　7.22(9.2)土佐風雨
1781	天明1	火	［徳島年表］4.9(5.2)丑刻牟岐浦東浦民家より出火家数273焼失 翌10日己刻鎮火
		風水	［勝浦郡誌］天明元年丑の年の洪水に丈六寺領の百 姓共が同寺の代官に向けて歎願した文書（中略）
			「去る七月二十七日 (9.1) 之大水に居内新物成之内少々の堤御座候処一円 堤切内間田地川成毛付ケ相調不申候，其上右堤下床堀れに罷 成難儀仕候並宮井川筋岸一円崩れ往来等も相調不申私扣之田地内往来に付き迷惑仕候（下略）
			［注］この時四国，近畿大風水害［徳島年表］に8月御国洪水御 地高80164石余損毛とあるも8月近国風水記事なく上記日付けと思はれる
1782	2	火	［徳島年表］1.7(2.18) 暁紙屋町より出火　稲田賀島頻焼内町大火，飛火にて富田浦中園焼失三十余街に及ぶ
		水	［勝浦郡誌］文珠院（今の富岡 第住町玉垣家）記録に 天明二壬寅五月五日(6.16)大水にて西のゆる抜け申し候　伊予さぬき風水
			［徳島年表］5月御国洪水にて御地方87757石余損亡，秋に物価 騰貴(米価一石5月60匁　11月75匁)

西暦	邦暦	災異	記事
1783	3	冷凶	［蜂須賀家記］三年九月命を下して痛く奢侈を禁ず．冬命じて勝浦，那賀，海部，美馬，三好諸郡の貧民にめぐみ貸すこと二万三百八十余人　八年凶作相続き封内飢餓公庫虚乏以て賑救するなし．
			［注］尚飢饉記録は勝浦郡誌高原村史にあり　この天明の飢 きんは下記の記録のように5年間に及んでいる。［日本凶荒史考］二年春夏陰冷長雨し諸国四歩の減収三年春より陰湿多雨，暑気至らず六月寒冷を 催し京畿に於て猶冬服を着するの異例ありまた大いに風水して諸川氾濫し農 稼を傷む七月浅間山有史以来の大噴火あり，灰砂と泥流は信上武三州の 田畴を害し，里落を漂 蕩す。諸国の陰冷 この後 已むことなく遂 に旱寒 の襲ふ所となりて諸国大いに飢荒す．わけても東北関東は春来北東の寒 冷風に終始し未曽有の大凶作となりしも余備なきを以て，流民道路に 堵をなし餓死者山野に相望む．弘前八戸盛岡の諸領最も凄惨を極め，餓 苦に耐へずして人相食むに至る．超へて四年，この歳 七八分の作，ところにより豊作の聞ありしも，麦収を待つ能はず餓死するもの多く，去 年九月よりこの六月まで津軽一郡のみにて八万千七百余と 数へられ流亡の民また少からず．このため耕耘人なく田園荒蕪するもの亦少しとせず．五年 夏東北霖雨，秋畿内東海諸国洪水　翌六年春夏陰霖し五畿内西国洪水あり，また六月寒冷或は冬の如く七月関東未曽有の大洪水ありて諸国大いに凶 荒す．超へて七年春亦淫霖し災変底止するところを知ら ざるものの如し．故を以て米価非常の昂騰を来し諸民大いに窮す幕府これよりさき 屢々令して米穀諸色の買占囤置等を禁じ需給の円滑を期せんとしたるも，前途を危むあり，奸計の行はるるありて米穀動かず，遂に細民 諸市に蜂起して米商富家を襲撃し，遂に打毀の暴動を起すに至れり．天明 二年より七年に亘る間，北は北海道より南琉球に至るまで諸国頻りに飢 荒し我が国土殆と完膚なかりしと云ふ。
			［徳島年表］9(10)月奢侈を厳禁す　1796年までに7年間倹約仰せ出さる
1784		火	［富岡町志］12.14(1.6)家数386焼失　亥中刻鎮
		干	［木頭村岡田日記］田植土用の二日になる
	4	病，飢	［徳島年表］秋凶作［徳島年表　大俣村誌］疫病流行　米価101～115匁
1785	5	飢	［勝浦郡誌］［那賀教育］
		火	2.6(3.16)［徳島年表］寅中刻新町橋筋より出火　東側よりかご屋町まで焼け戻り未中刻鎮
		風水	6.26(7.31)［徳島年表］　近国記事なし
		風水	7.11(8.15)［徳島年表］御地高100614石余御損毛
			［川内村史］昼夜大風雨なり翌十二日昼より奥野，貞方，黒田一円大水入り同日五ツ時頃に鈴江，榎瀬，北大堀，幸蔵前堤切れ中島兵之助前竹須 賀村平五郎十七間（今ヘイゴマヘ池と云い二反十四歩　灌漑八町 に及ぶ）庄の前八間　茂吉郎西へ廿二間余切大松平石各一円大水入，沖手立樋より長廿六間切れ　夷野にて堤長二間半切申し惣兵衛より兼子迄一円水打越候 鳥井より切れ牛飼原本長十二間切　和左ヱ門内庭へ一尺三寸入　土蔵，地盤，石垣七寸残り沖手 堤一尺より一尺五寸位なり　沖島寺西境一円惣越に御座候
			［注］この風水は讃岐，岡山，美作に記事あり
			尚本年12月米価55～61匁［徳島年表］

西暦	邦暦	災異	記事
1785	天明5	火	［徳島年表］10.1(11.2)亥刻牟岐浦並灘村民家より出火354軒焼失　夜丑刻鎮
1786	6	風水	［徳島年表］8.29(9.21)御国風雨洪水御地高137567石余損亡
			［注］四国，中国，近畿，北陸に風雨洪水あり
		風水	［板野郡誌］9.7(9.28) 板東方面は田島に砂入荒地を生じて鍬下及追鍬を受ける　この時は四国，中国，近畿，関東，東北に風雨洪水
		飢	［勝浦郡誌］年末米価95～101匁
1787	7	長雨	3～5(4～7)月　尚下記　飢の［注］物価の項参照
		水	［徳島年表］4.25(6.10)26日御国出水につき御地高148450石余損亡
			［川内村史］四月廿五日夜土佐大川の吉野川大松，榎瀬百間切，中島兵之助前三十間　夷野東石手三十間　百間場徳右衛門崎三十間切　深三間より五間余に御ざ候て内廻りの堤被仰付候竹須賀村には平五郎前切れ三十五間計砂入三町有平石用水埋り長百五十間余　上江三間敷二間尚二尺より一間迄砂入二百五十七坪余有　廿六日大水に吉野川筋麦流れ申事筆にも出し不申候　家も流れ人も流れ申事　和左ヱ門居宅へ水少し乗候，土蔵は石一杯村中二尺より六尺迄入申候沖手堤廿六日朝にては水一杯有以上一時に切落申候
			［注］　この日伊予大洲に洪水記事あり
			［徳島年表］に秋大水の記事あり隣国香川，愛媛では8.13(9.24)大水
		飢	［勝浦郡誌，那賀教育］
			［注］（物価）三月より雨降り五月廿二日迄長雨に麦国々くさり川内村反に付五斗三升一斗五升無御座候　極々悪年にて麦百目五月中旬に至り百十匁（古から八十匁）米百三十目迄上り五月に百五十三匁仕候　（平常70～100匁稗五十目～百目空豆八十目 国々米麦 積出御 法度方，大阪 に米〆申者十七軒家こぼし申候［川内村史］
			天明六年より九酉年まで日本国中五穀不熟にて米二百三十 文まで仕　麦は百八十文まで仕甚だ困窮此上なし　年号寛政と改元二月 に改歌には天明に食ふや食はずに八九年もうこれからはなが うくわんせ　という［三岐田町史—正方私記］
			（米価）六月上旬に米二百目麦百三十五匁成　中旬 に米百七八十目麦百二十匁成　国々高直，七月は米百五十匁麦百目相場二百十日比に仕候
			七月廿四日比古米百七十目麦百三十匁新米三百十目 屑米百十匁位成　江戸にては古米六月に三百目より七月に成二百目　米屋 江戸は不残つぶし面に取り押領仕由前代未聞の事に候［川内村史］
			（施米）春より秋に及び日本国中大飢饉で死者少からず浅川 浦の窮民も悲惨の極で池田氏の祖年寄円治兵衛其の他の富豪が毎戸に施 米施粥した［海部郡誌—池内氏系図書］
1788	8	長雨	［那賀教育］7.22(8.23)より25日まで大雨洪水
			［注］米価２月75～78　10月63～66匁 翌11月には55匁内外となる［徳島年表］
1789	寛政1	地震	4.16(5.10)［日本地震資料］土佐，阿波，備前地強く震い鳥取広島も震う
			［三岐田町史—正方私記［寛政元己酉歳四月十六日夜九ツ時大地震によ り当村の井利両方こける，御国中同断疹多くあり田地悉くわれる．石垣くずれ滝 悉くくずれ山われる．地震後四月十八日迄木岐由岐当村原田辺は一人も家に 居らず山林へ逃げ行居申候　然れ共潮入不申天気に成り一向雨降 り不申干り五月十一日に少し雨降り　［富岡町誌--文珠院文書］大地震夜の 九ツ時より八ツ時迄ゆり本堂壁など甚だそんじ秋葉山拝殿壁もそんじ並に町土 蔵などそんじ申候西のユルもさけ申候　山などもさけ申候処も有之，権現山の南三畳敷の岩飛 ぬけ出西いけ田野神の前にて止る［福井村誌　福原村旭黒松寺 過去帳］夜九ツ時大地震ゆり山々谷々崩れ川水三日の間濁り流れ多く川ぶちどて田地一円 に割れ一日が間土路水吹き出し又瓦葺家蔵とも多く乱るる事つぶる事数知れず　一時 半ゆり申し候　［鞆奥町史—橋本亀吉記録］夜八ツ時大地震所々いたみ 積りがたし海山川共に大ゆるぎ也，家蔵土手杯のいたみ夥しき事也 然れども夜分なれば諸国往来にて人に怪我は無之
1791	寛政3	水	［山川町史］8.20(9.17)拝殿流失
			［注］四国，近畿，中部，関東，奥羽大風洪水
			［徳島年表］秋洪水のため入田村鮎喰川荒廃（翌年改修完成の記事あり）
1792	4	風水	［板野郡誌］7.26(9.12)神社倒木田畑川成も多く何れの神社も祭礼 が出来んと書いた記録あり．［鯛浜村付近古老談］堤防数ケ所破損し大豆皆無同様　稲五分位損毛（寛政10年5月の洪水参照）　中四国，山陰，近畿に大風雨水あり
1793	5	風水	8(9)月　近国の風雨記事見当らず
1794	6	干，水	［川内村史］四月中旬頃南風雨強く麦作実入殊外違ひ其上日でりにて万 端仕付等相成遅まきながら大豆等晩物仕付申処大水にて晩物夫々水に枯 れ申候に付宮島小百姓之分殊外難儀仕り［阿波貨幣史］大干　中国近畿関東東北　干
1795	7	風水	［徳島年表］7.8(8.22)御国風雨出水御地高131600石余損毛
			［注］近国この日記 事なし但し8.29(10.11)中四国東海等出水あり
1797	8	火	［三岐田町史］12.12(1.9)西由岐浦残らず焼け5,6軒の納屋のみ残る　同24日木岐浦残らず焼　前者については寛政9.1.17の説あり（湯浅年表）
	9	雹	［三岐田町史—正方私記］6.13(7.7) 八ツ時夕立して大雹降り煙草の葉など悉く破れ稲いたむ　同日江戸雷電あり
1798	10	水	［三岐田町史—正方私記］5.16(6.29)より雨 降り夜九ツ時分より殊外大雨，十七日朝六ツ時分より大水 四ツ時分より 雨晴る去る丑（５年）八月の大水に同じ田地悉く疼あり去年まで作方はげみはたらき居申 候処此大水に田 地に疼　もはや運命つたなきと思ふ
			［注］この日隣国に記事なし
1799	11	風水	［徳島年表］9.7(10.5)御国風雨出水御地高46857石余損毛
			［注］この日近国記事なし
1801	享和1	水	［山川町史］喜来の大水　8.19(9.26)中四国奥羽風水あり
1802	2	水	［徳島年表　高原村史］大洪水の記事あるも月日不明　但し7.6(8.3)土佐死者多し 8.6(9.2)中四国，近畿洪水あり
1804	文化1	不作	［蜂須賀家記］今年封内登らず
		風雨	［徳島年表］7.26(8.31)御地高79000石余損毛　流死男4女3 多１馬11疋牛７疋
			［注］同日伊予に風水あり
		風雨	［徳島年表］8.29(10.2)御地高66082石余損毛　潰家即死男11女10人流死馬７牛２疋潰家流家1586軒　同日九州中国四国東海道大風水
1805	2	長雨，虫	8(8～9)月［徳島年表］７月末よりお国虫付連雨　御地高35700石余損毛
1806	3	干	［脇町史］阿北干害　［徳島年表］5～6(6～8)月干ばつ 御地高103500石余御損毛　西日本の干ばつ

西暦	邦暦	災異	記事
1807	文化4	風雨，虫	［徳島年表］お国風雨虫刺等にてお地高 87598石余損毛
			［注］8.5(9.6)筑後大水翌8.6紀伊暴風雨の記事あり
1808	5	病	［辻風土記］はしか流行
		風雨	［徳島年表］閏6.29(8.20)お国大風雨出水　高174石余御損毛
			［福井村誌］閏六月大風損家倒木　この日中四国伊勢武蔵に風水あり
1811	8	長雨 干，虫	［徳島年表］3～4(4～6)月雨降続き苗痛み夏干ばつ秋虫刺等 にてお地高 88900石余お損毛
1812	9	風水	［徳島年表］夏秋風雨出水等にて御地高37600石余損亡
1813	10	火	［阿淡年表］9.12(10.5)池田大西町より出火家数102軒焼失
		干，虫	［徳島年表］当夏干ばつ苗痛並秋虫害お地高51659石余損亡
1815	12	風雨	［徳島年表］7.6 (8.10) ～8日風雨出水お地高55940石損毛　流死男2馬2
			［大津村史］損毛相調　徳永 村高367.3石中146.8石 大幸村 834.7石中292.1石
			［注］土佐，播摩，東海に風雨あり
1816	13	風雨	［板野郡誌］閏8.3(9.24)荒潮打込み稲大半立枯　［石井町元木文書※］大水大風
			［徳島年表］ 当秋度々風雨出水にてお地高163212石余 お損亡　流死男9 淡州御地高25石余御損亡　上記の日に中四国 近き関東に風水其の外記録見当らず
1817	14	風水	［元木文書］9.9 (10.19) 日暮より大風雨　［徳島年表］ 夜御国風雨出水御地高27330石余御損亡　同日さぬき風水　「録なし
1818	文政1	風水	［徳島年表］7.14(8.15)—15日風雨出水御地高12216石お損亡　この日近国記
		豊作	［川内村史］ 諸国豊年殊に川内　笹木野　徳島　吉永は50年来の大豊作　当時平石村上田にて 2石2，3斗より3石，下 田にても1石 以上 2石の収 穫あり米価最高58匁より最低56匁
1819	2	風雨	［徳島年表］　御地高33600石余御損亡の旨12.16お届　近国見当らず
1820	3	長雨	［川内村史］2～3(3～5)月雨多く麦不作　［大俣村誌］夏干秋洪水
			［注］伊予夏干損の記事あり
		風雨	［徳島年表］夏秋御国風雨地高87070石余御損亡淡路145石10.19お届
			［大津村史］風雨につき諸立毛損　稲平均して一歩通りの痛
			［注］近国に記録見当らない
1821	4	風水	［徳島年表］8.8(9.4)御国風水害　高68664石余損亡　さぬき大風
		火	［徳島年表］12.2(12.25)宍喰浦出火　家数206軒焼失
1822	5	長雨	［元木文書］麦刈入時長雨，甚だ悪作
		火	［徳島年表］2.21(4.12)午刻牟岐中村民家より出火　牟岐浦に移り725戸焼失 未下刻消
		干	6～7(7～8)月［元木文書］6.11頃より極上天気　7.19まで 降り申さ ず
			〔注〕兵庫 鳥取に干ばつ記事あり
		干，虫	［徳島年表］当秋干損虫害風水害　御地高24745石余御損亡11.19お届
			［注］風水害記事近国に見当らず
1823	6	干，虫	［徳島年表］当夏御国干ばつ並秋毛虫害御地高75855石余損亡
			［元木文書］4.19(5.29)まで雨その後6.7(7.14)まで凡そ48日ぶりの夕立雨
			［注］5，6月関西諸国大干
		水	［山城谷村史］秋洪水（月日不明）
1824	7		［元木文書］悪天で藍作は昨年の5，6分作
		病	［元木文書］5月頃より痢病流行 高川原 矢野 山崎川田等の村々50～80人宛死

※名西郡高原村の元木家文書，1816—1854の記録あり以下元木文書と略

西暦	邦暦	災異	記事
			亡　8月下～9月上に至る
			［阿波藩民政資料—那賀木頭村］痢病流行につき8.6　御手当一巻
1825		火	［徳島年表］12.12(1.30) 卯刻前東新町より出火大西北風烈しく大火に相 成り富田町新魚町桶屋町藍屋町古物町大工町2西大工町西新町1南大工町まで焼失未刻鎮火総戸数932軒土蔵24但しお届1398町家の内13 取崩67納屋24土蔵
			［元木文書］藍刈前長雨にて大くさり
1825	8	風水	［元木文書］夜半より8.14(9.26)昼頃まで車軸を流す程の大雨夜に入り殊の外の洪水，風は中風で大いたみこれなし
			徳島山手などは山潮の様子に候　大工町寺町富田大谷辺は座敷に水上り候由相聞き候　沖繩，紀州，中部地方に大雨洪水
			［元木文書］麦刈前長雨取入れ時天気好きも実入り悪るく平年の7分作
1826	9	風水	［徳島年表］5.21(6.26)，22及び6.6(7.10) 風水害損亡67835石余流死男17女4
			［元木文書］21日未明より大雨になり風は八ツ時より大風にて近 年の大しけ大水，夜半頃風止む上浦村通源寺方丈3，4年あと建て候 瓦ぶき吹潰し申し候其他牛ノ島円通寺くり山路村寺方丈等同様　二回とも中四国近畿の大風雨洪水
		水	［高原村史］6.6(7.10)洪水　四国，中国風雨洪水
		水	8.20(9.21)［高原村史］，［川成引帖］下分安吉鮎喰川洪水のため 湖となり10戸流失　［神領村史］破堤山崩れ　近国の記事見当らず
1827	10		［元木文書］5月末より6月上旬まで日々大小の雨前代未聞の藍ころし日和
		風水	［徳島年表］当夏風水害御地高3700石余損亡10.25お届（但し12.24のお届は45779石余損亡となる）　7.2(8.23)伊予風水あり
		病	［元木文書］10(12)月　痢そう流行翌年にわたる
1828	11		［元木文書］長雨なく麦近年の出来，藍　雨で虫多くつきくさり強く，不出来
		風雨	［元木文書］1日風雨烈しく夜より7.2(8.12)に至り大水，土手5合程
			（関西，関東前代未聞の大水で三州矢はぎ橋落ちし由）
			［注］この日伊予，九州大風雨洪水又6.30中部，関東洪水
		風水	［徳島年表］8.10(9.18)及び23(10.1)風水害90233石余損亡10.26届出
			［蜂須賀家記］八月風雨傷禾　8.9九州中国加賀　8.24九州風水
		干	［神領，高原村史］夏降らぬこと85日文政の大干という　近国記事なし
		虫	［徳島年表］当秋毛虫害風水害18809/石余損亡
			［注］［甲子夜話続編］にこの時の全国被害は一般の大名所領 56364石公儀の御損亡はその倍とあり　阿波藩のものは17万石余となっている
		地震	［元木文書］11.22(12.28)夜九ツ時大震　近国記事なし局地地震か
1829	12		［元木文書］天候割に順調だが藍中出来
		水	［高川原村史—梅間池原由抄］　5.24(6.25)大水　伊予，安芸，伊勢等風水
		水	［徳島年表］7.16(8.15)16～18大洪水［元木文書］17日明方より大雨昼夜降り通し18日未明より丑寅の風吹出し追々相募り次第に北に廻り八ツ時西に変る水は八ツ半より土手際まで来る。　紀伊水道，山陰，京都等に風水
			［徳島年表］当秋両国風水害御地高87273石損亡　流失男3女2　11.5届出
			［注］秋の風水記事近国に見当らず
1830		火	［阿波志］12.30(1.24)脇町出火22戸侍屋100戸町家4戸蚕屋4棟厩焼失
			［元木文書］脇町北，中町残らず焼

西暦	邦暦	災異	記事
1830	天保1	豊作	[元木文書] 天気良く麦大出来（2.5～2.7石）近年珍らしき豊作，土用前より土用中快晴の日は3，4日位，暑さ一向これなし
1832	3	干	[元木文書] 5月下旬より雨6.17まで 18より天気46日目の8.4夕立（この間に雨乞い）（農作物皆枯れ）8.6七ツ時大夕立以後又天気 9.6まで80日干稲6，7分作 [木頭村誌] 金びらへ貰い水山で大火たき雨乞 讃岐紀伊摂津其他干
		火	[海部郡誌—池田氏系図書] 10.7(10.30) 浦川浦加子人弥三八宅より出火75戸焼
		風水	[徳島年表] 17404石余損毛11月届出 9.11(10.4)土佐福岡風雨あり
		病	[元木文書] 10(11)月風邪流行
		雪	[元木文書] 12.8(1.14)夜半より雪9日四ツ時も降り丈1尺 前代未聞
	4		[元木文書] 天候順で藍出来よし
		風水，虫	[徳] 風雨害虫害38663石損亡 [山城谷村史] 凶作
			[注] この年から天保の飢饉が始まる阿波の米価も5年に急昇した [徳島年表] による肥後米石当り 3年12月76.4匁 4年5月86匁 4年12月119匁 5年5月145匁 年12月71.5匁
			[日本凶荒史考] によれば 四年春より時候不順，．夏陰冷行はれ六月関東尚袷を用うるの異例あり，秋大風洪水，のち早冷を来し諸穀登らず，東海道の六分七厘作を最良とし，奥羽二州の平均三分五厘二毛と称へ，或は収穫皆無の惨あり，翌五年漸く平年作に近かりしも凶作のきず癒えざるに，六年春また和順を缺き，夏秋陰涼多く，蝗害の地ありて，津軽地方の四分作をはじめ諸国違作多し，超へて七年，この歳初夏より陰冷甚しく畿内に於て六月尚冬服を用いるの大異変行はれ，盛夏暑気を感ずること稀にして九月に入り，遂に早寒のおそうところとなり全国大いに飢荒す，即ち山陽南海の五分五厘作を最良とし，山陰関東は三分二厘作内外を称へ陸奥は二分八厘作にて無収穫に終れるあり，この時貨幣粗悪にしてその価値下落せるを以て諸物異常の暴騰を来し庶民の困窮甚しきに，米穀の需給の途極度につまり都邑大いに窮す，八年二月大塩中斉この凶歳にあひ，時弊を慨し救民を標榜して大阪に挙兵するあり，東北諸国は天保初年より頻りに飢荒し，この後尚やまず，ために餓死者流民極めて多く，四年より十年に至る七ケ年津軽一郡のみの死者三万五千六百余。他郷に流離するもの四万七千余人を数へたり
1834	5		[元木文書] 夏藍小出来 5～7月照り続き難儀
		風水	[元木文書] 8.6(9.8) 昼頃より余程降り出し風も次第に大風に相成り夜半頃に止み申し候 三抱程の榎土際より2尺計り上より中折，其他中木67本折れ申し候 奥野村は40軒程吹倒れ其他2，30軒も損し候村段々有之2，30年以来の大風と申すことにて候
			[徳島年表] 御地高69598石余損亡 この日讃岐，紀伊，中国大風
		火	[徳島年表] 海部郡木岐浦 158戸焼失
1835	6		[元木文書] 5月13,4(6.9) 大雨，21日朝より極大雨朝一番鳥の頃水枕に相成り川筋一円大いたみにて流れ物多，損田流失砂入 近代の大いたみの由，瑞巌寺山潮にて水2尺ばかり入る。
			[徳島年表] 5.15，21～22風水害 39280石余損亡
			[注] 5.14伊予 21伊予あなば丹波風水

西暦	邦暦	災異	記事
		風水	[徳島年表] 6.19(7.14) 尚7.23(8.17) 閏7.6—7(8.27—30) 21(9.13)風水害130818石余損亡死人男3
		風水	[元木文書] 7.23朝より降出し大野分と相成夜半頃大水土手五合，閏7.21朝より雨四ツ時分野分夜四ツ時収まる しめて7度
			[注] 上記のうち閏7.6～7中四国，中部，関東に風雨
			[徳島年表] 7(8)月下旬より阿淡御両国沖合高潮大風雨 此関連記事見当らず
		飢	[高原村史] ききん [板野郡誌] このころ8，9年にわたり飢饉
1836	天保7	冷凶	[徳島年表] 天下飢饉藩主めぐみ給す 全国平均4歩作 洪水飢饉（那賀教育）
			[名西郡誌] 天保六年夏秋の頃霖雨甚だしく秋禾登らず餓死者夥く，同七年また凶作にして天下大に困ばいす同十二年農家にローソク雪駄を用い家屋を美にすることを制し結髪店を禁ず [川内村史] 七年正月元日より三日迄晴天夫より月の内五分は雨二月三月も同様四月に入り，七分雨麦作にかかる六分作は取込夫より稲仕五月も五分は雨冷気勝六月土用中二日と晴天無之大冷気夕立気色日々にて雷鳴雨降通しカタビラを着たる日は夏中一日も無之七月盆迄同断稲生立す 五月十三日大出水 冬に至り他国米積込御免被仰付候得共他国も高値故酉（8年）正月中二三月迄漸高四五六月二百七十目大飢饉となり貧家の者は餓死甚だ多く非人乞食は過半冬の内に死す 人寄下々雇人等皆乞食となり米麦の糠を乞ひ魚の肉を生にて直ちに喰ふ者あり，西秋諸国豊作九月より下直金十両に蔵米十三貫十二月に十四貫 麦は却て処により米以上高し 酉春より秋九月迄大豆大高百五十匁米糠百文に一升五分大根干葉百文に一把五七分塩一俵八匁より十匁油十樽三十五両酒一升三匁二三分味噌一両に十二〆醤油一升五匁六分七年米一石三百目麦一石二百五十目にて誠に迷惑人多く大阪表杯には一日五十人七十人宛餓死奥州出羽杯は藁薤杯粉にして食べると云ふ，当御国杯もツワ杯諸草赤鳥瓜の根杯食べる人多く樫の実の餅杯我等買調候事も御座候…御国にも村々に餓死人多人数有之候此年豪雨あり酉別入水す，右年狂歌 凶年暮しのをり木の実迄むしり掻とる中のとし麦米拾う酉のとしか南
			[元木文書] 3月下旬より7.30まで降続き同様8月も度々大降り26日より天気になる6.70の老人共を未だ覚え申さぬ話に有之，国中の藍ききんにて候へ共家により大いに善悪御ざ候 米実入悪るく諸国共大凶年にてござ候
			[木頭村 岡田日記] 米1升で70日つなぐ
		水	[川内村史] 5.13(6.26)大出水 近国に風雨記事見当らず
		長雨	[大俣村史] 春～夏風雨続く飢饉
		虫	[勝浦郡誌] つまぐろよこばい大発生
		風水	[徳島年表] 7.7(8.18)，8日風水害御高53368石損毛 流死男女各1人
			(尚同時に夏以来度々の風雨虫害にて 42168石損亡11.21お届の記事がある)
			[元木文書] 6.29より7.6まで打続き雨天夜半過より中風追々吹降る8日夜分ことの外大雨 風は小吹に相成り夜半頃より未明まで水土手六合程
			[注] この日 伊予，筑後洪水あり
1837	天保7	飢	[元木文書] 12(1)月より有志より米を集めて寺町円徳寺にてかゆをたき飢人に施こす二三千人に及びし由
	8		[元木文書] 春打続く長雨後麦の出来頃 天気至極く良く上は2石中下も1石7，8斗の収かくあり一時値段下落
		長雨	[元木文書] 春3ケ月の雨続きに天下太平五穀成就の御祈とうの下命あり3.11

西暦	邦暦	災異	記事
1837			より寺で相つとめ， ［蜂須賀家記］四月令曰　去年以来穀価騰貴加うるに今年長雨傷稼郡下の困難知るべし　このため深く心労す　藩士務めて冗費をはぶき困窮に至るなかれ
		病	［元木文書］春より国中一統傷寒（チブス）流行死者おびただし ［注］［辻風土記］には天保７年とあり
		干	［川内村史］８年夏旱魃打続くこと甚しく田圃に灌ぐ水に窮し土瓶に井戸水を入れて稲の根元に給せりと為に作物尽く枯死し収穫皆無の状態となり，剰へ当時他国米輸入禁止の折柄とて食料の供給を受くるを得ず本村民の如きも其の多くはオボツコを食し鈴江渡付近の砂子に薄貝を漁り辛ふじて飢餓を免れたりという，当時狂歌あり 　　権現笊つくり中蜆掻き東菊菜の根をたふす これは古川村困憊の状を詠めるものにして権現とは　古川橋西部中とは同村寺付近東とは県道付近を云い菊菜とは野菊の謂なり　斯くて野菊を食い尽し次にオボツコを食せしが中毒症を発し面部に腫を生ぜしという，俗に三百目年と伝ふこは米価一石につき六十目位なりしが当時三百目に暴騰せしものなり或は云ふ三百目年は鳥が木から落ちると，時の藩主救恤のため鮎喰瀬にて粥を煮き給与せしため遠く堂浦地方より来る者ありしと伝ふ
		風水	［徳島年表］6.6(7.8)，7日風水害28203石損亡　流死男８女２　近国記事なし
		風水	［徳島年表］8.13，14(9.13)風水害53715石損亡　11.28届出 ［元木文書］稲作至極よろしきところ11日より小雨12，３大降り車軸を流し申し候　夜半過より東風しけと相成，14昼頃水枕土手七合にござ候　風は中風四ツ時まで吹きそれより戌亥に廻り収まり候 ［注］中部，関東大風水あり
		飢	［徳島年表］　飢きん　倹約令を出す［井内谷村史］穀価大とう貴 ［阿波藩民政資料］天保八酉秋8.28より10.27まで（日数60日）御国民を始め他国通りがかりの難渋の者まで名東郡南新 居村不動前並びに高 崎 村川原において左記の通り御小家かけ仰せつけられ窮民ども数日お救い仰つけなされ候 一，御小家２間45間宛南新居村　２ケ所 一，新小家２間15間宛　　〃 一，同　２間30間宛　高崎村　３ケ所 一，御用所，請払役所，釜家，米搗小家，番非人詰所　各１，便所10 人数合せて四千人余（賄人数合せて18620人）米155石521　稗136石079　塩46俵　お手当　黒米11石243　吏糧4石2　黒薬並びに丸薬 ［注］この飢きんは顕著で県下多くの郷土誌に記載あり
1838	天保９		［元木文書］天候よく麦の実入り甚だよろしく実取り２石より少し上，　昨春とは大ちがいにて万事かまびしき事一向これなく諸物 価追々下落」　土用中格別の暑さもなく諸国共米の実取り少なく追々高値に相成り
		飢	［山城谷村史］［那賀教育］那賀の米価300匁麦160匁 ［徳島年表］2.21来る子の年まで３ケ年の間倹約仰出さる ［注］　天保飢饉の末期で［徳島年表］によるこの頃の米価次の通り 　天保6年5月74匁　12月92.7匁　7年5月83.5匁　12月155.7匁　8年5月216匁　12月94.5匁　9年1月103匁　10月137匁　10年1月64匁　10月60匁

西暦	邦暦	災異	記事
		風水	［徳島年表］6.12(8.1)　13日
		風水	［徳島年表］7.21(9.9)～26日　今年の両風水で31989石損毛　流死男３女４ ［勝浦郡誌］大風雨収穫皆無［元木文書］水は土手３合程格別のいたみ無之 ［注］近国に風水記事のあるのは7.21
1839	天保10		［元木文書］麦の出来よきところ４月雨勝20日以後の長雨で刈穂を流すところ多し，29日より天気　６月以降始終天気　折ふし夕立有之順気この上なし．
		火	［徳島年表］4.6(5.18)海部郡奥河内村出火　日和佐浦類焼320戸焼失
		風水	［徳島年表］4.25(6.6)御高14105石 損 毛，25，6日の連雨により土佐の御用木桧材749本吉野川へ流失　［元木文書］24，5日夜余程の降26日昼頃より出水 ［注］26日越中風水記事あり
		風水	［徳島年表］8.9(9.16)25050石損毛　　この日讃岐風水 ［元木文書］8，9日昼夜大降り晩九ツ時より大風吹出し半時余りにて静まり申し候　10日朝より出水土手４合程
1840	11		［元木文書］麦上作夏長雨大虫藍不出来（上郡北山路筋虫なく大出来のところ多）
		風水	［徳島年表］6.9(7.7)10日　　九州，広島風水
		風水	［徳島年表］8.3,4(8.30)風水害今年合せて10,1252石損亡 ４日筑前大風高潮あり
1841	12		［元木文書］正月より始終雨降り続き麦不作，藍も雨始終にて不出来
		雪	［元木文書］3.17(5.5)四ツ時より雨夜中まで，極めて寒く候ところ18日朝上郡高山勝浦山の方一円大雪，藍植時に雪ふり申すこと先年より無之
		風水	［徳島年表］秋御高91250石損毛10.11お届　8.9(9.23)讃岐大風洪水あり
1842	13		［元木文書］麦よし，６月始め天気も大体で藍中出来，6.13土用に入り１日も上天気なく大方雨ふり格別暑き日なし ５月以来出水６度（5.23，6.4，6.25，7.20の記事ありいづれも小規模） ［木頭村誌］大水出原のすがず婆流さる。旧道筋端伝寺の石段まで水
1843	14		［元木文書］麦程よく取入れ，藍大出来虫つかずのところ刈最中の大水に難ぎのところあり
		水	［高原，神領村史］7.6(8.1)　七夕水という　　隣国記事なし ［元木文書］２，３日雨4，5日天気晩より雨６日未明より ごく大 降り7日夜五ツ時出水九ツ時まで土手三合まで，　御国水故前川大水，　翌８日水も少し引方に候ところ　又々奥水七ツ時分来たり前同様三合まで，然し風は一向無之候 徳島より南方取りわけ大痛に候名東聖童寺池堤切れ佐古筋山手の方大水大滝山寺町辺大いたみ寺方の塀倒る大工町座上籾町大道鷹匠町淡路町座上3，4尺富田5，6軒の外座上八幡村堤百二三十間切小松島富岡座上３尺ばかり ［勝浦郡誌］一日より六日まで連日降雨であったが其の夜より暴風大雨となって一大洪水を惹起し勝浦川の増水一丈五尺に達し西須賀村字敷地の堤防八十四間破綻すると同時に同村字松成の堤防二ケ処七十四間潰決して湛水数十日に亘って非常の被害であったと云ふ ［横瀬町史］生比奈村今山の慈林寺裏山崩れ同寺倒かい ［川内村史］七日朝より翌朝迄誠に大雨降て酒屋の内に相試し候処一日一夜に酒六尺コガに二杯位降り申候　此朝勝浦郡悪躰洪水にて流家何百軒数不知死人

西暦	邦暦	災異	記事
1843			田野浦村杯にも五十人程も御座候由承り候　徳島富田諸家中に至る迄五六尺座上死人富田内にも御座候由　勢見山鳥井前の石垣八歩迄の洪水にて俄降に付多く混雑迷惑人御座候　跡にて死人承り候処二百人程御座候へとも其節は何万人と考へ申候様沙汰諸国杯にても仕候由 ［板野郡誌］五六両日昼夜大雨降溜一丈三尺にて大洪水流家多く，其際五十年来の大水なりと云へり ［多家良村誌］丈六寺下手堤防切れ家流れ４人溺死．田浦一番切れ横大道130間２番切れ100間家15軒流れ人馬30人（元木文書に人28とあり）
		水	［勝浦郡誌］8.15(9.8)　9.25(10.18)大雨洪水　この両者近国の記事見当らず
1847	弘化４	長雨	［井内谷村史］４（５）月長雨穀価騰貴
		風雨	［蜂須賀家記］八月大風雨勝浦吉野諸川水溢傷禾 ［山川町史］吉野川洪水　［神領村誌］貧の水 ［注］８月中近国記事なし　7.13(8.23)伊予さぬき等に大風水
1848	嘉永１	長雨	［川内村史］春長雨大いたみ　［脇町誌］長雨不作 ［徳島年表］大雨（２—６月雨多し）
		火	［海部郡誌］9.12(10.8)夜浅川浦加子人嘉右エ門方より出火　38戸納屋18計58戸焼失
1849	2	風雨	7.10(8.27)　西の水又は阿房水　四国，広島大風雨 ［蜂須賀家記］七月八日大風雨十一日に至る水城下に溢れ人家漂没す 前代未聞という，藩士の録十分の三を収むるを免じ吉凶の礼を簡にし冗費を省かしむ。［三好郡誌］三好郡内で死者250人7.27までに死傷者980人 ［板野郡誌］酉の水は世人呼で　阿房水といひし位の大水にて　津慈なる畝の内　即ち阿部家の南方百間内外破堤し　同家は流れて　荻原の塩田まで至れりと　津慈の破堤ありしが為に　川崎以来は破堤を免れ　水量も亦割合に浅くして　川崎にては普通の民家座上三尺　最高の家なれば一尺内外　三俣にても大同小異なりきと 其他北方の高地に於て堤防の壊決田畝の荒廃等は　非常なりしも人畜の死傷はなかりき ［川内村史］七月九日朝より風烈しく雨も少々は添ひ候　翌十日暴風となり雨も前日の降りと異ならざりしも中稲に障り　十一日朝にても矢張り風吹き居たり　其節　大松中財家にある一抱半位もある大松一間半上より中折せり，其日中島，榎瀬川水余程強く　諸役人百姓の人夫召連大手堤に出て十一日昼頃迄は格別の水先にも見えざりしが同日七ツ時一時計に水量三尺増し　人夫等も堤手当せしが遂に榎瀬　中島両村浦処々五十間六十間と堤の上二尺計乗り越し見る間に破堤し家流れ出つるに付　諸役人始め人夫共一時に自宅に帰り家毎に入水の用意，馬を預け飲水を汲入れ諸物を二階に上げ又は座敷に上げ俄に大混雑となり水量追々増水一帯の家屋に浸水　所々悲鳴の聞へあり　之を聞けども船なき故如何ともなす能なず　犬の鳴声も此処彼処に聞えしが夜八ツ時には水次第に減退　翌十二日早朝より漸く屋内掃除をなすを得たり
		病	［徳島年表］ほうそう流行
1850	3	長雨	［名東郡誌］秋大雨洪水［蜂須賀家記］この年風雨壊稼 ［注］この秋近国の風雨は8.7(9.12)九州，中国，近畿　9.2(10.7)中四国，近

西暦	邦暦	災異	記事
			畿　土佐鰹節の廻船津田川口で難破の記事あり［阿波藩民政資料］
1852	5	干	［名西郡誌］夏大干数月に亘り野に緑色なく　草木枯死せんとす　郡民困苦雨乞いに奔走　伊予，紀伊，摂津，三河等に記事あり
		風水	［三好郡誌］7.20，21(9.4)風雨出水　四国，近畿，関東風雨
1853	6	干	［名東郡誌］5.22～7.2大干［大俣村誌］３ケ月雨なし［佐々木氏覚書］雲早山で大雨乞　西日本大干　５月末より８月始まで雨なしとす
		水	［名東郡誌］７月大水 ［注］　8.3(9.5)伊予，さぬき暴風雨ありこの外近国に見当らず
		天	［名東郡誌，山城谷，井内谷村誌］7.17(8.21)より23日まで北々西に彗星見ゆ ［大俣村誌］人心きようきよう　（クリンケルフース彗星）
1854	7	天	［山城谷，井内谷村誌］3.8(4.5)より10日まで北西に彗星見ゆ
		地震	［井内谷村誌，佐々木氏覚書］6.15(7.9)　伊賀上野付近の大震死者多し
		風雨	［井内谷村誌］7.28(8.21) 27日大風雨［八幡村史］園瀬川筋大坪一帯大洪水破堤未曽有の水害　但し近国に記事なし
		地震	11.4（12.23）県下全体有感［理科年表］東海道沖（137.8　34.1）９時発震大津波あり倒家流失家8300焼失300死1000
		地震	11.5(12.24)［理科年表］南海道沖（135.6　33.2）17時頃発　大津波は房総半島より九州東岸に及ぶ　住家全壊１万余焼失6千　土佐紀伊大阪にて津波のため流失1.5万半壊4万死3千県下の津波被害大きく死200焼失戸1000翌年９月まで度々余震を感ず ［蜂須賀家記］　南海の地，大震日を累ぬ　封内人家倒るるもの三千余　海南郡諸浦海溢れ家屋漂没し人畜多く死す。 ［阿波藩民政資料—板野郡中財家文書］ 朝辰の下刻俄に地震揺出し何れも外へ走り出火の要心第一に取片付居申内所々建家相痛み申由相聞え申候　彼是烟草四五服呑位の間震り申候…其夜後にて二三度少々宛震申候につき何れも要心の心持にて居り申処　翌五日申刻誠に天地覆る様相覚え其節夕飯の拵焚火を消し火鉢を外へ持出しコタツ我等内には前日より震候にも不仕候　日の入合迄一時程の大震り其節我等は　自性寺へ参り居合せ寺中一時に外庭へ走出候処方丈の内襖障子震り離れ仁王門キイキイと震鳴り凡一間半位も屋根にては震り申候様に相見え候　就夫釣鐘も棒に自然と震搗当り早鐘鳴る如くなり石塔もことこと震り動き中々庭に居る事不能　寺の西屋敷へ垣を潜りて出候処桶屋清蔵居宅　震潰れ夫より火揚に相出申に付其方へ参り火取消手伝仕り夫より我家へ罷帰り候処先我家建物無難にて御座候折柄申酉の方へ当り山の崩るる音其の中へ取交えて大筒の続鳴りし音相聞え候　此上は土地天倒仕儀哉と消入心誠に今は生死の境と胸を据え途方に暮れ　皆々顔色無しになり大人子供に至るまで　泣々も真言を唱へ居申候内　村内潰家出来の趣き承居申内徳島内町焼け　小松島焼け　西町焼け築地西の方は空辺処々焼け近村も古川，中喜来，沖島　善集寺出火其夜戌の刻に至り大震にて籔の中竹に取り付き居候　手放るる様に相覚え申候（下畧） 地震潰家大破有増仕候 大松村（潰家12軒，大破損８軒）中島浦（10と８）榎瀬村（９と12）加賀須野（７と６）竹須賀（３と３）平石（６と７）宮島浦（28と20）鶴島（４と８）鈴江（３と７）沖島（10と10）長原浦（０と50）

西暦	邦暦	災異	記事
1854	嘉永7		

［被害表］

村名	総家数	無難	潮入	大小破	浪家	流失	流死者
西由岐	40	10		3	27		
西由岐浦	205	3			3	199	16
阿部浦	160	97		63	4		
伊座利							
田井	40	17		16		7	
木岐浦	203	7		6		190	
日和佐	207	113	42	20	32		
南牟岐浦	175					175	2
東〃	357		2			354	26
牟岐中	129	8	71		14	36	1
川長	40	1			3	36	
灘	66	37				29	
内妻	36	21			2	13	
出羽島	68	3			25	31	
浅川浦	260		寺る潮入大破			260	1
鞆浦					少々		
宍喰	500			180	20	300	7
竹ケ島	48	10				38	

［相生村史］内山の吉田快蔵談　母に背おわれて病気見舞に行く途中地震あり道の上の木葉で頭をなでられる

［勝浦郡誌］5日夕刻大地震がゆり出すと同時に川口には山の様な津波が起り，民衆は大いに驚いて命からがら避難した。此時北町光善寺西隣りの小川屋が倒れ火元になった誰一人消防する者がない　それで光善寺に燃え移り更に東側一体を烏有に帰し北町も残らず燃えたので丈六寺の旧記にある通り神代橋筋と祇園，八幡両社及び地蔵寺だけが残った，こんな有様で徳島市街，小松島の大火と併称されている　併し高波は幸にしていささか上陸した計りであったという。

［吉野川］徳島は約1000戸が焼失約200人が死に小松島も大火また板野郡誌は岡崎（鳴門）で3割潰家，2割焼失，下板地方では200戸全半潰と記す

［元木文書］5日暮六ツ前より内町魚の棚そばやより出火通り町一丁目中程より同時の出火　四方へ広がり西風強く候へども西へ焼け通り横町より東へ3，4軒程宛残し南は塀裏大手筋残し　東は稲田　賀島御両家焼出北は紙屋町残らず焼失。

［宍喰浦旧記―円頓寺縁起］4日辰の下刻中揺りの地震　続いて両度海面戚かにアブキを生じあじ島を打越し川半まで込み入ること三ケ度諸人相驚き　四方へ逃け散り米麦諸物を山上へ持運び　今にも津波入来る心地にて　夜に入りしも同断の騒につき万一出火の程も計り難く役人一統火の手当に打廻り浜辺には篝を焚き潮狂等有候はば　火急に其場を立去町々へ立別れ触知らせ候様　手配を致置家々に相残る者共は小々宛手近きものを相携へ　愛宕山へ逃上る可申覚悟にて浜辺より　今も知らせ来るやと相待候処　夜四ツ頃中揺り地震一度有之候　暁に至り小々人心地に相成諸方へ逃去る人々追々立戻候　申の下刻大地震

西暦	邦暦	災異	記事
1854			

一ケ度にして忽ち地面裂け渡り泥水を吹上げ井水一尺位より二三尺計りも吹，処により候ては　地震半に早五六寸計りも水流れ渡り　木竹の搾地につくばかり揺り川水二間四方或は一間四方一かたまりとなり　処々に水吹上げ又川原等は小石ともに水を吹上げ　中洲辺は水吹上事四尺計りより五尺計りに至　其凄ましき事言語同断，又田畑不残水を吹上げ或は砂を吹き一面に裂け渡り　其の裂け目青色，家々の軒落又瓦の飛事投打か如く　沖よりは潮烟立　町中烟立五六間先は見分難く　皆々揺り倒され樹に取り付　垣にすがり等いたし候　内少々地震も相ゆるみ老人病人又幼き者を助け揺られながら手近き山へ逃登る　親子たりとも一処に居るものは相助ける隙なく一命を辛して逃散候処　忽逆浪来事三度最初の潮はありやはり渕迄，二度の潮は正田薬師森より一丁程下迄川筋は日比原村より半丁はかり下迄　北手は鈴ケ峰麓迄，又二度目の潮の引く事中磯の沖一丁程先迄　只一面の白海に相成，続いて三度目の潮来り候へ共小く一番潮位の事に相済夫より続いて来浪も無之　愛宕山へ逃登り五百七十二人，其余は祇園　八幡又日比原　尾崎　広岡辺迄家内別れ別れにて逃散　浜辺に居合す者は其儘船に乗候処　逆浪に打返され溺死に及，程能く川筋百目辺へ流入助命に及候者も在之候へ共　必右様の節は舟などに乗へからず　諸々にも船に乗り多く溺死に至り片時も早く近山へ逃登るにしくはなし，

暮方大揺一ケ度　中揺二ケ度　夜四ツ時頃極大揺り一ケ度　今も　山上揺り込むばかり家内手を取り合　神仏の加護に頼らん事を祈るのみ，夜中より暁に至迄中揺八ケ度小揺只間もなく凡て三十七度翌六日漸く無事の顔見合候（下畧）

［三好郡志］四日朝早々地震にて少々ゆり出し同五日七ツ時　大震り其夜五ツ半時分又大震り　前代未聞之義に御座候　御家中方之内稲田九郎兵衛様始め紙屋町，紀国屋町，内町助任，南方小松島　海部郡　撫養　津田御山下近き殊之外　大地震に而御焼失，御家中方御宅焼失，御屋敷夫々御焼失無御座候　而も御痛所数不知国中惣地震出水も有之事尤十二月大晦日まで始終四五日ぶりにて震り候

［注］1，この地震の印象は非常に強く県内の記録は上記以外にも多い，これらの中には安政元年11月5日の地震としているのもあるが，改元は地震後の27日に行はれているので嘉永の大地震というのが正しい。

2，参考のために古来の地震の年とその津波記念碑の所在地をあげると

1361（正平16）東由岐康歴碑

1605（慶長9）鞆奥大蓮華弁

1707（宝永4）〃　小蓮華弁，浅川稲観音

1854（嘉永7）松茂春日神社，徳島蛭子神社，赤石豊浦神社，東由岐修堤碑，志和岐天王神社，木岐王子神社，牟岐小学校前，出羽島観栄寺，浅川天神社及御崎神社　川東村熟田峠

1946（昭和21）浅川天神社

西暦	邦暦	災異	記事
1855	安政1	大雨	翌16日越前若狭に大風
		大雨	［井内谷村誌］11.15(1.3)
		地震	［井内谷村誌］12.14(1.31)　近国記事なし
		地震	［井内谷村誌］12.12(1.29)　前記の余震
			［井内谷村誌］12.30(2.16)　前記の余震（大）

［注］［井内谷村誌］に安政2年1月14～5日かなりの地震4，5度，2月毎日少々づつ3～5月は10度位づつ6月4，5度7月少々8，9月4，5度にて止むとあり

西暦	邦暦	災異	記事
1855	安政2	地震	[徳島年表] 1.14(3.2)　前年11.5大地震の余震
		干	[徳島年表] 7.7(8.19)　近国に記事なし
		大水	[徳島年表] 8.20(9.30)　この時四国近畿東海道大風雨洪水
1856	3	大水	[勝浦郡誌] 8.1(8.30)大洪水　勝浦川沼岸の被害は多大であったという
			[板野郡誌] 洪水のため板野郡川内村小松新田破堤直ちに復旧
			[注] この日さぬき洪水
1857	4	病	[徳島年表] 1～2月(1～2月)風邪大流行
		風雨	[板野郡誌—中財家文書] 六月晦大暴風夜九ツ時雨降出し候　翌7.1(8.20)日朝雨降止候処に昼晴間出来仕別而雨天とも相見え不申所 朝五ツ時より追々風募り雨も頻りと降り朝四ツ時過大いに吹出し我建物瓦大損し居宅の萱吹取れ困入申候　夫より追々吹よはり居申候，此節暴風荒増左に相記　御国中にて凡四万軒余潰家之由平石南頭庄屋橋本米蔵殿組十七ケ村にて六百軒余潰家御座候 居宅納家共潰家大松村45　榎瀬35　竹須賀10　沖島36　宮島25　中島浦38 加々須野34　平石58　鈴江10　鶴島浦20 右此川之内尺相置候新田処は尚又大潰に御座候 [川内村史] 朔日朝六ツ時頃より風雨相催し候処　別て大なる事にも無之候さしたるしけに相成様にも相見へ不申所　四ツ時頃より追々風烈しく相成り四ツ半時より八ツ時頃迄は　誠に古今未曽有の大風にて家の中にては命の程無覚束相覚何れも風雨最中に　木影杯に立寄り或は堀建納屋等に立寄り相凌申候当時　平石村にても居宅納屋棟数合四十六軒潰家に罷成候　誠に前代未聞不代之事に候 当時本村内難渋の者取調上申候処江戸表に於て薩公御憐愍に被覚召格別の御仁慈を以て相救恤銀を賜はり（普通四貫匁より三貫五百匁位）組頭庄屋より分配せり。 去る七月朔日風雨出水に付私組左書村々御損亡相占め奉指上覚 早渕　府中　和田　矢野　延命 地高二千六百三石八斗六升三勺八才　内七百八斗一升一合四勺御損亡 潰家居宅　九十四軒　半潰居宅　二十八軒 潰納家　三十九軒　半潰納家　二軒 氏神　一ケ所　倒木　五本 怪我人　男一人　非人小屋　三軒 [三好郡志—足代村教法寺過去帳]　朔日朝より九ツ時迄大風に而当寺先年より有之候センダン木吹倒れ本堂東吹倒れ鐘堂たおれ誠に前代未聞之事に候，此日当村にて数家たをれ候 [三好郡志—池田町安宅嘉市談]　以前堀立であったのを石垣建に変じた三間に六間の藁屋に瓦の庇を附けてあったが風が吹き出すとぎいぎいと鳴り出すかと思ふ間に庇は取れて雨戸は飛び屋根は半分ひっくりかえり又家の西にあった三尺廻の桐の木は引抜けて空中に飛び上った当時池田に倒れた家が十軒以上もあったといふ。　この時四国近畿大風雨洪水
		風雨	[徳島年表] 7.29(9.17)八朔水という [辻風土記] 四ツ時から吹出し翌朝五ツ時まで大風雨 [川内村史] 晦日諸方新田堤大荒鈴江村地盤切処繕ひしが丸切となり鈴江鶴島宮島沖島各四ケ村田地入水し大松村は中堤にて一向入水せざりしなり右風雨又

西暦	邦暦	災異	記事
			々潰家橋本米蔵殿組十七ケ村にて居宅其後潰家二百三十軒あり候 [三好郡志] 七月廿九日四ツ時分八月朔日朝五ツ時分迄殊之外大雨並雨に風余程相添吉野川杯五拾年以来之大水と一統評判仕且当村名見（妙見？）大還（往還）水二尺程乗り申候に付下郡辺は出水にて余程難義仕助船御手当之趣に相聞申候　尤谷にては水聊にて（以下数文字不明）十一州予州大雨之様相見申候当処様より上中下に被成御助銀弐百壱貫七百目被下候（慶応2　8.6の同郡誌参照） [注] 四国近畿大風雨洪水
		天	[徳島年表] 8.10 (9.27)彗星により市郷二日　瀬戸村7日漁猟停止 [辻風土記] 五ツ時より出かけ四ツ時西へ入る　五十間位長く尾を引く
1858	安政5	干	[徳島年表] 苗床が出来ぬ位　近国に記事なし
		病	[徳島年表] 夏コレラ大流行 [注] [虎列刺病流行記] 6月コレラ病始めて長崎に発しその勢の猛烈なる僅に一月を経て江戸に伝播せり　8月上旬より中旬に至る際毎日の死亡千を以て数え京都大阪は8月に発し北海道は7月より始まる気候秋冷におもむき一時は屏そくせしも翌年に至り再発して各所に熾盛の勢をなせり万延元年には稍衰たいの状を現し文久元年に至りて全く消滅せり
		天	[徳島年表] 7(9)月末から彗星見ゆ　(ドナチ彗星)
1860	万延1	水	[川内村史] 5.11(6.29)より16日迄七日間大雨洪水国中大半入水 [板野郡誌] 春降雨麦不作平石にて上一石二斗下六斗米価百五十五匁（五月相場） [徳島年表] 5.15大水につき御注進　この時中部，関東，奥羽に風水あり
		風雨	[板野郡誌] 7.11(8.27)大風雨高潮津浪により青毛立秋　徳島より撫養に至る海辺被害二万二千石余　徳島より南方海辺に至る被害五万石余年貢御免となる [板野郡誌—中財家文書] 聊之間暴風に候得共夜七時より大潮にて津浪出来仕小松新田長原浦米津新田富吉富久下別宮宮島大潮打にて稲毛大疼に相成撫養塩浜大荒岡崎十人衆家潮に被引南方答島橘浦小松島松原海辺総て大荒迷惑仕候米作大疼麦作は夏大疼申　八月末之比米相場極々高値新米百五十匁九月中旬に至り米八十匁麦他国極上百六十匁他国麦御国へ積込御免被仰仕候
			[川内村史] 八月早稲米一石百五十五匁の高値　四国近畿大風雨
		長雨	[徳島年表] 秋麦蒔が出来ぬ　近国の記事見当らず
1861	文久1	洪水	[徳島年表] 月日不明　近国にも見当らず
1862	2	病	コレラ　はしか　大流行 [注] [虎列刺病流行記] この年夏より痳疹大いに各地に流行して漸く消滅に至らんとする際コレラ病発し殊に痳疹の流行したる地に甚しく，その上痳疹を患いたる人に多しと [和歌山市要] 痳疹は6月中旬から大流行し30才未満の者で犯されぬ者は殆んどなく特に7月中旬病勢更に猛けつで一家の7，8は必らず犯され……8月に入り漸次終そくした
1863	3	水	[板野郡誌] 8.12(9.24)夜水，この出水には板東の谷川非常の増水なりと見えて堤防の決潰破損は三十余ケ所に及び延長殆んど六百余間百姓共は非常の困難なりとて勧農普請を出願したる庄屋よりの歎願書下記の如し（以下略）
1865	慶応1	水	[徳島年表] 6(7)月洪水　近国に記事なし
1866	2	干飢	[山川町史] 夏80日干

西暦	邦暦	災異	記事
1866	慶応2		［注］［日本凶考史考］この夏陰冷，秋風水の災ありて諸国登らず これより先安政6年わが五国通商以降国内の需給円滑ならず加うるに維新の変革を前にして天下擾乱，ために穀路は閉ぢ，商路通ぜず去秋より諸物の価騰貴す幕府即ち酒造の量を減じ或は外米の輸入を許可し以ってその調整を計りたるも昂騰この秋に至って始んど底止するところを知らず庶民大いに飢窮す ［徳島県史料年表］よりこの頃の米価（肥後米石当り匁）を摘記すると 元治1正月　10　慶応1正　10　2正　10　3正　10　平年 164.5　325.5　207.5　513　473　1300　147　590 150～160匁
1866		風水	8.6(9.14)［徳島年表］寅の水という　四国近畿中部関東奥羽荒れる ［板野町史］七月の末より八月の初に至って霖雨瀧々として降り続き所謂危日の八朔に篠突くばかりの大雨と変じ二日，三日はウの毛を散らす細雨と化して遂に前代未聞の大水となれり　桧，板東，萩原は谷川溢れて怒濤を起し谷除堤は押破られ田圃は大に荒されて損害誠に莫大なりしも人畜に傷害なかりき津慈，川崎三俣の方面に至れば堰る悲惨の状況を呈せり　殊に夜中の出来ごとなれば周章狼狽は一方ならず津慈にては破堤三十有余間高きも座上三尺以上，低きは軒を浸せり　三俣にては上流破堤の狂瀾を蒙り西の水より二割以上の浸水なりしも人畜等に故障なく田圃の砂入泥位置に止まれり　然るに中間に位せる川崎にては惨状を極めたり　渡場上りの大井利付近二十間余の破堤と共に怒濤の衝に当たる家屋の流失倒壊による圧死者数人を出せり　尚東西方廻五十間新道地三十間の破堤あり ［応神村史］七日夕には古来稀な大水となった　殊に暗夜の事とて防禦の途なく西貞方では助次郎の堤防が崩壊して一丈有余の水嵩となり倒家多く圧死するもの十人東貞方では圧溺死七人中原では別宮八幡前の堤防の上を越すこと五六尺の水量で八人の死者を出した ［川内村史］五日より三日間連日豪雨沛然として降り吉野川水量膨脹して沼川の堤防総越となり各所決潰して濁水猛然として奔入し本村一円低きも床上二三尺高きは天井に達する浸水を見たり　避難民は舟に乗り移るも四方海の如く生死の程を知れず，処々に救助を求むる声哀れにて之が救助に従事するものあり中財家は舟にて近傍四十人程を収容救助せり宅地生垣の上に給水船の往来せし如き　榎瀬土佐渡の付近堤防決潰して三百石の大船元天神社の付近に横はりしが如き奇観を呈せりと伝ふ 前野乙八郎助下男二十二人流死，川ノ内十三人流死　飼牛馬十七疋空筋より段々流れ来りしと　御国中千人余も病死せり　秋作皆無空筋の大豆も皆無処々より稲一石五斗位ある処もあり遅稲皆無なりしなり　沖島南部　渡辺家南池は当時の堤防破壊のため生ぜしなり ［大津村史］材木及建家併せて流物山の如し　大水とも洪水ともたとえ様なき有様，直ちに南山より北山へ一円，土地より各村とも一丈以上，木津金比らより徳島勢見山金刀比ら神社まで海の如し ［名東郡誌］7日夜大風雨洪水に相成り翌8日まで郷中分大荒御損毛地高12万8860石9流死人2140流 牛馬1700 堤川除石腹崩れ犬走共12万390間山崩54066ヶ所船破704流280

西暦	邦暦	災異	記事
			［八幡村史］園瀬大洪水　園瀬橋付近の北岸堤欠かいし50間破堤人家8死者20余名 ［富岡町史］豊益新田の伊勢家から高知県郡村誌資料の報告書中 慶応二年寅八月七日前代未聞の洪水の砌新田堤北西角崩れ新田内間一円水入に相成り居屋敷床地より水高八尺五寸其筋座上三尺八寸水入に相成り立毛相痛其節夜中の事故御用物並建具畳諸道具に至迄得取明不申悉皆水潰りに相成（中略）堤切口百十間堤長百間上ただれ石垣崩れ其修繕石土，砂土，赤土並石工賃手伝人賃共諸費惣高十二貫六百八十一匁五分入目を以繕ひ申 ［富岡町史—領家の森虎蔵談］富岡の土手が切れた為水が大層押かけて座上三尺になった皆々天羽友三郎方へ逃げたが，留って外の模様を見ていると富岡から道具がだんだん流れて来た，供し大正元年の大水に領家が二度に三百四十間も切れ西路見にも死人もあったに比べたら此近辺は結構であったと思う ［勝浦郡誌］1日から微雨降り始めて漸吹大風雨となり同八日の夜から暴風豪雨となり勝浦川沿岸五十余ヶ所の堤防大破壊し家屋数十戸流失し人畜の死傷は最も夥しかった ［三好郡誌］嘉永二年七月十日，十一日両日の大風雨には酉の水を呼起して皆々前代未聞の事と驚いて阿房水の名を附けたが安政四年には七月二十九日四ツ時から吹き出し又降り出して八月朔日朝五ツ時分まで意外の大風雨が打続いたので復もや前代未聞と驚いて五十年以来の大洪水じゃといふ処から是には八朔水の名を付けたが慶応二年寅の八月朔からの大風雨で復々前代未聞の寅の水一名七夕水を惹起して谷々はいふに及ばず吉野川の増水は一入にして里人の胆を冷したといふ　処で昼間字土居の浜井原茂三郎の話を聞くに同人の現住処は水面三丈余尺の高地にあるが当時は無かったが今同家の前にある前川与三郎持家の裏で其の庭より七八尺上った岸の上に井原茂三郎所有の梨の木があった夫に船頭弥十郎が船を繋いだのを見受けたが大正元年の出水は大きかったといっても前記前川与三郎の庭を走ったまでゞ済んだ　併し七夕水にも死人は勿論倒家もなかったといふ ［多家良村史］8日［7日の誤］の夜から暴風雨　福原村より下流一体大被害（飯谷）長柱名西分の山岳崩かい 其のま下の幸野家では土石のため川中に押出されして人が死んだ
		風水	［徳島年表—名東東郡誌］8.16(9.24)　京都兵庫其他に風雨
1870	明治2	火	［神山町佐々木文書］12.30(1.31)徳島市籠屋町大火300戸
	3	火	［神山町佐々木文書］3.11(4.11)徳島市古物町100戸焼
		水	［大俣　高川原村誌］9.9(10.3)吉野川大洪水　7日に四国近畿の大風雨あり
1871	4	水	5.17(7.4)［板野郡誌］6月洪水のため川内村小松新田破堤同年復旧 ［注］1.　6月は5月の誤り　2.　5.17（7.4）～18中四国近畿に大雨あり
		干	［山川町史］干76日
1873	6	水	8.30［板野郡誌］8月（及び9年9月）大洪水田野は大概砂漠の如く人家は戸々浸水し所々流家あり堤塘は数ヶ所の破壊，其の害実に少しとせず（牛屋島附近） ［注］8.30四国中国大風雨洪水あり　尚本年より太陽歴を採用
		風雨	［板野郡誌］10.2大風雨洪水にて去る慶応二寅年より凡そ一尺位低しという

西暦	邦暦	災異	記事
			［注］愛媛其の他に風水あり
1876	明治9	風雨	9.13　明治6年8月の項参照　愛媛其他に風水あり
1877	10	火	10.28［徳島年表］第三徳島丸火災（淡路　佐野海中に沈没73名死亡）
1880	13	風雨	8.25　四国近畿関東大風雨
			［日本気象資料］徳島県　24日午後8時より降雨10時頃巽の暴風起り雨最も強く翌25日午前8時頃より風位艮に変り同11時過風雨共にやむ（摘要類函抄）
1882	15	雹	［福岡県災異誌］5月福岡徳島栃木群馬埼玉新潟福井秋田茨城三重静岡十一県大雹降り耕作物を害する多し　5月及び8月降雹記事あり
		風雨	［日本気象資料］8.5四国中部東海道 暴風雨洪水　徳島にて往来の水嵩八尺なりと（摘要類函抄）
1883	16	干	［辻風土記］10月20日麦一粒も食はず西井川の人々万じゅ沙華の根を堀る
			［大俣村誌］村民雨乞のため神社に祈る　わらの餅を食う　全国処々大干
		風雨	［日本気象資料］9.11～12風雨強く中晩稲は少々害を被りたれども他の農産物は概して害を被らず　美馬郡よりの報に依れば稲作は十分の二分雑穀類は一分甘藷芋塊は二分蕎麦は一分通　潤雨の為に蘇生せり（徳島県報告官報第七十四号九月二十五日）　九州四国近畿大風雨
1884	17	水	6.28［吉野川］工師ヨハネスデレーケ吉野川調査中洪水を見る（下記羽浦町史参照）
		台風	8.10　九州四国近畿奥羽暴風雨　［日本気予資料］台風は11日14時九州中部に来襲東進して四国を過ぎ12日21時紀州南部を掠めて東に去る九州四国及び紀州は暴風雨烈　中心七四〇耗以下
		台風	8.26［日本気象資料］九州中国四国近畿北陸暴風雨　25日14時中心天草灘に来り夜中九州中国を斜に26日午前6時には佐渡付近に達し本州北部を横ぎり太平洋に出づ関東一般に電信不通となる中心730耗以下（台風 調査 報告）
			県統計書による本年水災2回　死16牛馬3家145田72町畑32
			［井内谷村誌］堤防決潰　流失79戸倒家20戸
			［羽浦町史—小笠原梅夢日記］天保七年より49年目の大飢饉なり　早くも6．27暴風那賀川筋破堤あり吉野川も大洪水にて家屋の流失溺死者多し，8月25日早晩より沖鳴り喧しく南方より黒雲吹き，2時より雨となり6時より暴風雨夜2時まで外見不能夜明けて田面を見れば権八（早稲）中稲類は白穂となり晩稲も損害甚しく村中平均ワセ5分中稲8分晩 稲5分 郡内150ヶ村中41ヶの里分は大痛みにて地租諸税上納不能
		凶作	風水害冷害で全国的な凶作となり本県も亦困窮する　水稲反収89升
			［八木沢善次］那賀郡で飢餓に頻せるもの1226人
			［新野村誌］8.25大風雨　稲作大被害で村方大いに窮迫，糊口に苦しむ
			19年3月までに救助を受けるもの130戸420名
1885	18	水	5月［井内谷村誌］雨続き大洪水［山川町史］破堤　近国に記事見当らず
		水	6月［山川町史］さぎの首切れ　6.7愛媛大雨又6.17暴風雨あり
		台風	［日本気象資料］　7.1近畿中部関東　大風雨洪水
			中心735ミリ以下の台風1日午後2時紀州南端に接近し同夜その東側を北上し2日午前6時に佐渡付近に至り東進して本州北部を斜断して太平洋に去る（台風調査報告）

西暦	邦暦	災異	記事
			徳島県　1日は朝来雨勢一戸烈しく加うるに暴風（摘要類函抄）
			阿波にては吉野川の洪水にて頗る損害を与へたりと云へば勝浦那賀の二川も亦満水なりけるか（新聞集成）　県統計書による本年水災人3家63
		病	［井内谷村史］8月赤痢流行　［土成村誌］はしか流行
			［大俣村誌］伝染病院を建てる
		雷	［日本気象資料］9.1名東郡へ落雷納屋を焼く（摘要類函抄）
		旋風	［日本気象資料］9.6午前10時頃 徳島県那賀郡中林村沖合に旋風起り漁舟三艘を捲上げて十間余の高処の松原へ落し才見　日開野　西路見　芥原　中島浦諸村を通り那賀川の高瀬船を二間余の所に捲上げた，その途中民家を破壊すること十数戸大樹を倒したものも少くない　（摘要類函抄）
1886	19	干	7月［井内谷村史］7.27より3日間総雨乞い　7．8月和歌山に記事あり
		台風	9.11［井内谷村史］暴風雨倒家4戸　九州中四国風雨
			県統計書による本年水災（吉野川の被害）人6
1887	20	豊作	反収171升当時の標準値に対し142%程度の顕著な豊作
		水	7－9月［徳島年表］この間の洪水により吉野川改修工事中止
			尚［吉野川］に8月洪水とあるも近国に風雨記事見当らず
		台風	10.7台四国沖通過［井内谷村誌］山林6町歩崩かい
1888	21	水	［大津村史］　7.22吉野川洪水　流失物多し　和歌山風雨
		水	［大津村史］7.31
		台風	［日本気象災害年表］8.30台風本県を通って日本を縦断四国近畿東海に被害
			徳島死51全潰2862半989
			［徳島年表］橘に高潮高さ8—10尺，椿泊村役場の書類，漁具の流失多［大津村史］長江新田潮入
			和歌山の最低気圧717.7ミリ
1889	22	病	［井内谷村史］赤痢流行死20
		台風	［井内谷村史］8.18暴風雨大水
			［紀州災異誌］台風四国中部を北上，和歌山の水害甚大（死者1221）
1890	23	台風	9.11九州南東部から香川県に抜けた台風［徳島佐古—美馬豊太郎記録］名東（国府地上6.5～8尺坐上浸水70戸潰家78戸）那賀（流家34倒家47）
			［吉野川］善入寺島浸水
		風	［美馬豊太郎記録］12.8　14時頃より暴風雨　東風烈しく徳島港では50年来の強風という　［紀州災異誌］朝より雨，午後陣風雷
1890	23	病	［徳島年表］橘にコレラ発生　死55
1891	24	雨	弱い台風が8.2～3朝鮮海峡を日本海え抜ける
			徳島では早朝に雷雨あり午前中大降り日雨量471.5ミリの記録を作る
		台風	8.16台風四国中部を北上輪島沖へ
			徳島の最低気圧733.6ミリ　雨量76　最大風速SF20.1米
		台風	9.14［井内谷村史］暴風雨
			強い台風が14日長崎市がら日本海に抜ける　徳島の総雨量65ミリ
		地震	10.28濃尾大地震（06時39分発）［理科年表］仙台以南全国有感　死7273全潰8万　大断層生す余震10年余り（本県被害なし）

1892　明治25　7　23　台風（洪水高潮）

この朝高知市付近に上陸して山陰に抜けた台風　この時本県は暴風雨洪水高潮の大災害に見舞はれその上山岳の崩壊も数知れずで近代に於ける災害のレコードを作った　然し台風としてはそれ程 強いものでなく高知で733ミリ徳島738ミリ※（7時）最大風速SSE23.3米　然し雨は22日3.9　23日211.2　24日245.8　25日50.1 計512.4ミリを計り7月の一日雨量としては第2，3位※※の記録を残す程の大雨であったために大被害となった

被害（8.2現在）	人 死	人 傷	家 全	家 流	家 半	家 潮入	船	堤防 決	堤防 破	道	橋	山岳崩	浸水反別 海水	浸水反別 雨水
	311人	87	2635戸	644	2559	36242	478	57キロ	136	574	6	367万坪	6779町	19653町

吉野川水位　名西郡23日12時14尺　24日10時16尺　25日18時26尺以後漸次引く阿波郡八幡村では座上4尺以上となる高潮　4時40分より測候所（現在徳島東警察）前の路上に溢れ始め7時半には最高19cmに達し9時には終ったがこれは平水に比し9尺（2.7m）の高さである　市内8割は浸水した

県内における満潮面よりの潮位

宍喰	鞆浦	川東	浅川	日和佐	木岐	志和岐	由岐	阿部	伊座利	椿	椿地	橘	富岡	平島
15尺	24	10	4	9	18	10	12	20	24	8	5	8	7	20
今津	和田	小松島	斉津	松茂	里浦	撫養	鳴門	明神	堂浦	北島	小島田	魚佐	大島田	室
12	13	10	10	12	10	11	6	6	6	4	6	6	3	3

この塩水は停滞7，8日に及び水稲，蔬菜を全滅させた，川内村では小松新田の堤防切れ翌26年復旧した。

山崩　海部郡のみで150ヶ所と云はれるがその内保瀬の大崩壊は25日10時頃に起り死者47名を出す　これにもまして大規模なのは木頭村高磯山の崩壊である　25日11時大戸の高磯山は頂上より半身崩壊し岩石は対岸久米鍛治春森部落を埋め新しい小丘を作ったが同時に人家15戸65名を埋没した。この小丘は高さ150尺（45m）のダムとって濁水を3日に亘りせき止め　又流失に際し150戸に被害を及ぼし住民は家なく食なく 惨憺たる 光景を呈した。往時の下，中両木頭村の村界つづら峠に下記の記念碑が建てられた

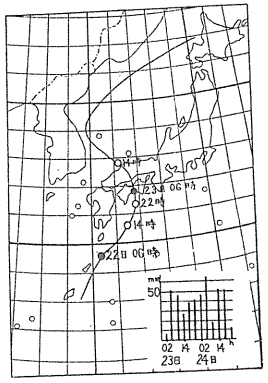
明治25年7月25日　大戸村高磯山岳崩壊し土砂那賀川流を堰止め 逆流 滿濟2里余に至る　当つづら峠は其の渦中にありて救助船を通渡す　　明治37年12月　下内伯三建之

［注］1，本年の水稲反収は94升で標準値の85%程度

2，7月23日三岐田で遭難中の North American 号乗組（外人15，日本人7）を助け同村は紅綬褒章を授けられた

3，市郡別被害（川内村史）

	浸水戸	浸水反別	荒地	道堤破損(Km)	橋(m)	船
徳島	10736	763	280	19.5	15	15
名東	6434	4602	1607	62.3	85	166
勝浦	495	2048	658	38.2	796	31
那賀	5085	5177	2497	127.9	385	267
海部	1594	1052	703	60.4	393	66
板野	8596	8792	3346	128.2	358	50
名西	1577	2173	146	24.2	—	1
阿波	1055	1224	176	14.9	765	2
麻植	1229	1195	92	9.1	184	1
美馬	336	1100	502	28.4	124	16
三好	122	588	108	26.4	45	5
計	37286	28714	10115	541.5	2651	620



台風径路と徳島4時間雨量

1892　明治25夏　赤痢流行［大俣村誌］

1893　明治26，2.27　大雪　南方海上を東進した低気圧のため太平洋岸一帯に降雪したが徳島でも当日朝から雪となり19時に終り33cm積った　これは明治40の42cmにつぐ第2位記録である　徳島の日平均気温は0.1度だった。

※ 最低気圧　※※ 1872～1961の70年間に出た極値についての順位　以下の文章では同じ意味に使う

1893　明治26　夏　大干　疫病

6月末より8月中旬まで雨少く被害近国一帯に及ぶ　干ばつ　飢きん（山城谷村史）尚赤痢流行した（井内谷村誌）　徳島では6月24日より8月15日までの53日間に雨量は10ミリのみ

［注］1，徳島7月雨量9.6は少雨の第1位　2，本年反収118升　大体並　3，この干ばつは群馬，静岡と近畿以西

1893　明治26　8　17　台風

735ミリ以下のものが九州南方から紀伊水道に入り18日 早朝に和歌山に上陸して 同地に大被害を与えたが徳島ではNW17.4m　74ミリの降雨を見た。（日和佐145，和食193ミリ）

［注］県の統計書によると本年土木被害は勝浦川3回吉野川1回

道52ヶ所　堤34　橋342　波止場438　船27　建物5183軒　耕地流荒11333町　復旧費631.4千円

1893　明治26　10　14　台風

728ミリ以下の台風が14日 九州南部から四国南端通過　徳島E15m14日は各地100ミリを越え12～15の4日間 雨量 徳島257鳴島340穴吹275富岡238池田182ミリ

1894　明治27　1～2　少雨

前年10月下旬よりの少雨は2月まで続いた

徳島	10月下	11月上	中	下	12月上	中	下	1月上	中	下	2月上	中	下
雨量	20.3	44.2	4.3	5.9	0.3	8.2	0.3	0.1	0.5	9.4	4.2	10.1	3.6
		54.4			8.8			10.0			17.9		

月雨量の少いこと12月9，1月6，2月3位である

1894　明治27　夏　高温　干ばつ

7月26日より8月末までの徳島の降雨量 24.5ミリ 近国も亦凡て干ばつに苦しんだが同時に6～8月は驚異的な高温となり月平均気温は平年値より2度位の高目となった　これらは過去70年間では夫々第2位の高順位である

6月　23.8(平年より+2.1)　7月27.7(+2.0)　8月28.4(+1.2)

尚このため年平均気温は16.1となってこれも大5につぐ第2位である。

［注］1　［中野島村史］水争い［山川町史］137日干［木頭村誌］旧3.21より8.3まで夕立程度の雨のみ，田植半分，金びらへもらい水　山で大火たき雨乞　三郎虫大発生

2　本年反収114升大体並

1894　明治27　9　11　台風

720ミリ程度の台風が11日宮崎海岸から米子付近に抜けた。この台風襲来に先だち 吉野川流域に10日午前大雷雨あり徳島では6時から14時までに283ミリの大降りとなったので已らんした。徳島ではSSE19.7m雨量10日289.2（この量は9月として第2位の記録である）11日55ミリ10日撫養222　11日川島128市場115　12日石井225ミリ

［注］県の統計書による本年土木被害 死傷9　家畜9　建物1853 耕地7971町 道17 堤10 橋237 波止場78 船16 復旧費330.2千円　警察統計による水死者14

1895　明治28　3　4　いん石

［井内谷村史］9時45分火矢SEよりNWに飛び大音を発し大地ゆらぐ

1895　明治28　7　24　台風

九州北西隅を掠めて日本海に入った700ミリ程度の優勢な台風　県内で多少の風雨を起した（井内谷村史）が大したことはなかった　徳島S14m　64ミリ

1895　明治28　8　22　台風

22日正午前に高知県須崎市西方から上陸した735ミリ程度の台風　徳島ではSE17.5m　一日間に　177.4ミリ（4時間最115.5ミリ）を計ったが　和食では401ミリに達し那賀川で洪水被害を出した

22日雨量　日和佐148　小松島177　川島175　市場126ミリ

［注］1，県の統計書による本年土木災害　那賀川2回　死1　建物462　耕地2036町　道12　堤4　橋42 波止場472間　船7　復旧費135.1千円

2，［八幡村史］勝浦川　大野堤防2ヶ所（70間）　園瀬川3　犬山1破堤

1896　明治29　8　18　台風

730ミリ程度の台風が18日朝足摺岬付近から上陸し　12時頃米子沖に出た　　愛媛，高知の被害大

徳島ではSSE19.0m　日雨量62ミリだったが川井260 脇町166ミリを計り　板野郡で堤防大破あり（板野郡誌）

［大津村誌］九ケ村堤防大破損

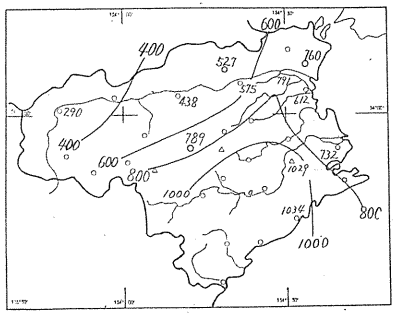
1896　明治29　8　30～31　台風

715ミリ程度の台風が30日19時頃潮岬付近から北上したので通路の近畿から北陸に洪水被害を出した

徳島では30日夜N23.2m　日雨量140ミリを計ったが　石井170 川島180市場195脇150池田178和食242ミリ等を観測した

1896　明治29　9月上旬　大雨

4日低気圧が日本海を通ったあと四国沖に前線停滞大雨になり引続いて735ミリ程度の台風が11日九州四国の南岸を掠めて同夜御坊付近から紀伊半島に上陸した　このため近畿以東広い範囲に　水害を起した。県内で日雨量100ミリを越えたのは4，6～12日であり



9.3～12の9日間雨量

徳島の　4日　5　6　7　8　9　10　11　計　　12日

日雨量　25　47　33　211　56　87　98　203　760ミリ　N20m

特に　日和佐は7日408　石井205　6日和食242　12日川井290　川島236の大雨があり合計雨量は図の通りで県南奥地の雨量は1100ミリ程度と思はれる，この時の吉野川の水位は26尺（徳島）だった。

［注］1．この大雨で本月雨量は和食1102.4　日和佐1091.1

2，県の統計書による本年土木災害は那賀川6吉野川4回で死傷57　建物13257　耕地80763町　道52　堤46　橋496　波止場969　船112　復旧費1141.7千円

尚警察統計による水死者は2名となっているから上記57は傷者が多かったものと思はれる。

3．［徳島年表　井内谷村誌］9月7日暴風雨　［大津村誌］11日暴風雨はげし，稲毛平均35%白及び黒穂反別228.5町とあり詳細次項　［木頭村誌］長雨暖冬

1896　明治29　不作

上記のように相つぐ台風出水に災いされて本年の水稲反収は91升（当時の標準値の81%程度）明25年以来の凶作になった。各月について調べると

徳　島	7月	8月	9月	10月
平均気温	24.9(−0.8)※	26.0(−1.2)	22.2(−10)	17.4(−0.1)
雨　量	363(182%)	297(156)	835(279)	211(110)
日　照	196(89%)	243(99)	140(83)	162(98)

これから低温多雨少照であることが判る　特に9月の多雨は大不作の明治32年につぐ（多い方からの）第2位記録である。県内では和食，日和佐が1000ミリを越えた

［注］尚徳島の雨量2559ミリも明32につぐ第2位記録となる　和食では436.8ミリ

1897　明治30　夏　干ばつ

7月23日より9月2日まで（特に8月16日までの25日間）海岸地方は割に雨少く西日本一帯の干ばつと歩調が合ったが山間では200ミリ以上のところがある　米作は並以上だった。　徳島では7月22日～8月19日の29日間の雨量は5.0ミリ

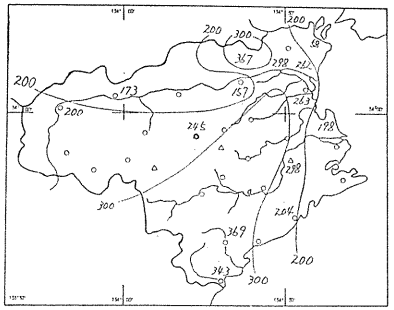
1897　明治30　8　5　火　徳島監獄署　大火（徳島市史）

1897　明治　30　9　29　台風

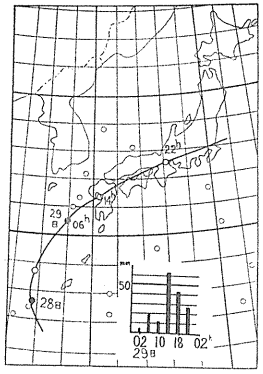
この月2箇の台風害を受けた　　（板野郡誌に水災恩賜金下賜の記事あり又井内谷村史に9.27大水）

※（　）内は平年値よりの偏差又は平年値に対する比　以下同様に使う

一つは722ミリのもの8日の夜紀伊半島南部に上陸し東京の北を抜け全国に非常な災害を与えたが　本県では大したことなく（6日雨量和食238ミリ　小松島139徳島134）他の一つは29日の午後九州中部から上陸四国の北岸を通り暴風雨害を起した　本県では26日から降雨が始まり29日最も強く（市場252ミリ）特に吉野川流域では県南最多雨域と同量の360ミリになったところがあり大きな被害を出した　徳島の気圧739.8ミリS8.9m



9.26～30　4日合計雨量



台風径路と徳島雨量

［注］1．県の統計書による本年水災2回死傷63　家畜41　建物15511棟　田畑12769町　道17715間　堤8051　橋126ケ　価格966.2千円　　尚　警察統計による水死31は9月29日の台風によると思はれる

2．［吉野川］上板町高志で修理中の水門320m破堤流失13戸　死18人　20町埋れて砂丘となる

1897　明治30　9　秋りん

前記の台風に加えて月内の雨天は20日前後（徳島で23日），総雨量も400～800ミリとなった　（徳島の667ミリは9月としての第3位多雨記録）

［注］この年は冷害によって全国的な凶作となるが本県はそれ程でなかった

1898　明治31　9　病　　［井内谷村史］赤痢大流行

1898　明治31　豊作

この年は台風もなく　夏期気温は平年以上で殊に7～10月の雨量が少なかったので多少の日照不足を克服して明治20年についでの豊作となった　反収は168升　当時の標準値の145%程度である。

1899　明治32　5　13　ひよう

［木頭村岡田日記］麦種代もなし翌日黄砂　太陽赤く朝夕甚だし　［諸事誌留簿］海川木頭大霰

1899　明治32　6　8　台風

台湾西海上から8日6時北九州に上陸した745ミリの台風に伴い本県でも200ミリ内外の大雨が降った。特に和食283ミリ徳島219小松島186撫養162等（7日）　このため多少被害があった（風は弱い）

1899　明治32　7　8　台風（洪水）

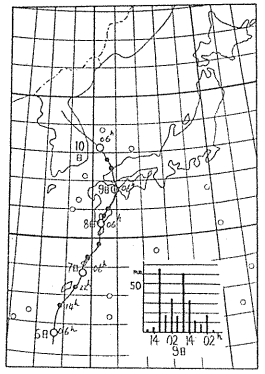
715ミリ以下の台風が8日8時頃大隅半島から上陸し以後非常にゆっくり北進したので　西日本の雨は多かったが風は左程で無かった

徳島では9日741.4ミリSE15.3m　日雨量8日91ミリ　和食302　川井295　石井216　小松島197　9日徳島165ミリ　富岡110　特に吉野川上流の本山は386及び137ミリ　県内の8，9日合計雨量は下図の通り

このため吉野川は洪水となり堤防決壊し死傷多数を出したが10日午後漸く退水した（板野郡史）

［諸事誌留簿］海部郡木頭村では安永4年以来の大洪水という

［注］1，県の統計書による本年土木災害は吉野川5回　那賀川2回で死傷123　家畜69　建物12200　耕地34020町　道21　堤70　橋829　波止場1565間　船430価格7732.9千円

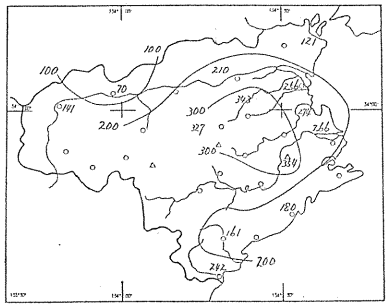


台風径路と徳島の4時間雨量

2，尚警察統計による洪水死82名の内77名はこの日吉野川洪水により残り５名は勝浦川による模様

3，［高川原村史］牛の島堤防決潰32%減収

［吉野川］鳴門大麻松茂も大海のようになる



明32　7.8～9　2日間雨量

1899　明治32　8　28　台風

28日午後九州南西部を掠めて愛媛県から鳥取に抜けた720ミリ位の優勢な台風，通路一体は 豪雨によって非常な災害を受けた　特に愛媛県では別子銅山の崩壊によって512人の死者を出す外河川氾らんで150人程あり其他香川340高知36名となっている 幸い本県は雨量は剣山周辺が200ミリを越したが平野部で100ミリ以下で風もS17.3mと大したことはなかった。

［注］［井内谷村誌］大暴風，吹名40戸中13戸倒

［山城谷村史］大洪水寅年の水に劣らず平水上80尺（25m）の旧伊予川橋も流失の危機せまる

1899　明治32　9　8　台風

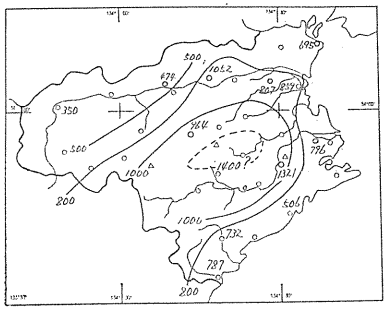
730ミリ程度の台風が本県南岸沿いにNE進し8日13時頃和歌山付近から上陸したため 本州中部地方で豪雨があり洪水害を出した。

徳島では8日N21.0m　260.2ミリを計り（この日雨量は9月の第3位記録）剣山南麓で400ミリ程度だった（和食354ミリ）

［注］［八幡村史］園瀬川1.6丈で破堤　　［西祖谷山村誌］重末小学校々舎倒　　［横瀬町史］未曽有の被害

1899　明治32　9月下旬　秋りん　（台風）

台風らしいもの一つは台湾方面から21日九州西岸を北上し他の一つは西日本のはるか南方を23,4日に西進するなどで20日から30日の11日間に連続降雨があった特に22日は豪雨となり徳島 239.8（これは9月日雨量として第5位）市場462ミリを計り徳島の旬間総計は513ミリになった。8日の台風関係と合せてこの月の合計雨量は図の通り多雨地で1400ミリ位になったと思はれる　尚これは次項のように非常な低温と日照不足を来たし大不作の原因になった。



明32　9月雨量

1899　明治32　不作

相つぐ台風の襲来と 天候不順は 大不作を来たし反収は僅か89升（標準値の75%程度）だった。本年の天候を平年と比べると稲作前期の気温4月は13.9（平年より－0.1）5月18.7(+0.9)6月22.9(+1.2)［高い順では第3位］7月25.4(－0.3),又後期としては次表の通りである

月	8	9	10	11	
気　温	26.1（平年より－1.1）	21.1(－2.1)	15.1(－2.4)	10.9(－1.4)	
低温順位	8	1	1	6	
雨　量	271(平年の143%)8	59(286)	165(86)	46(50)	（9月多雨量第1位）
日　照	182（平年の45%）	91(54)	175(104)	159(99)	（8月少照第6位，9月第1位）

［注］1，徳島の本年雨量2695ミリは70年間の最高位，尚和食では4446ミリとなる。

2，本年の反収と比較出来る低収は次の通り

	明17	19	25	29	本年	昭20
反収	89	92	94	91	89	86

1900　明治33　9　28　台風

27日　沖縄から北上28日朝四国沖を高速度で通過した大型台風で潮岬の気圧721.1ミリ浜松718.5ミリ

徳島ではNE17.4m　総雨量216.5ミリ県内では中部以北海岸が雨量多く200ミリを越え富岡では320ミリを計った短時間の降雨だったので各地共多少の被害を見たようである。

［注］県の統計書による本年土木災害は吉野川4回那賀川3回で　死傷11（死5）建物5570　耕地16813町道8堤14　橋188　波止場25間　船126　復旧費1113.7千円　［八幡村史］洪水

1901　明治34　6～7　梅雨

6月初旬に数日引続き雨を見た，又下旬から7月中旬まで　殆んど連日降雨あり徳島では6月21日～7月15日までの25日間の雨日数（1ミリ以上の日）17日で402ミリの降雨があった。

1902　明治35　4　12～14　霜害

10日以来季節風の吹出し強く本県内でも　雪を見たが引続いて高気圧の移動があり全国的な降霜となり本県ではあい，桑等に被害が出た。徳島の最低気温は11日3.0 12日1.2 13日1.4（霜）14日3.3

1902　明治35　7～8　低温多雨

6月は入梅に引続き23日まで降雨あり低温の徴候があり7月初旬一時晴間を見たが中旬以後天気悪るく平年より－1.5度8月又多雨で下旬になって漸く日照がある程度で平年より－1.8度と2ケ月低温が続いたので本県の水稲収量は稍低下した

［注］1．この年は全国的な凶作になり東北地方で殊に甚しかった

2．徳島で7.16～8.17の33日間に無雨の日は25 28 29 30日のみ又8月日照は174時間で第5位少照

1902　明治35　8　10　台風

720ミリ程度の台風が　10日14時頃熊本に上陸し鳥取付近を経て日本海に抜けた。剣山周辺の雨量は300ミリに達し吉野川流域で50ミリ程度だったが降雨は今月の初めから中頃まで殆んど休むことなく続き特に4，5日には合計300ミリも降っている事からかなりの洪水被害も出した模様であり死傷者，流埋全潰戸に対して御下賜金並びに慈善義捐金が出た（板野郡誌）又多雨地では月総雨量が800ミリを越えた。徳島SE11.5m（7時）

［注］県の統計書による本年土木災害は主に吉野川で起こり大部分はこの台風による

死4　傷3　家全潰52　半29　床上1633　床下4881　堤決101　道46　橋23　防波堤24　海岸59　田流13町　浸水2523　船54　損害346.0千円

1902　明治35　9　7　台風

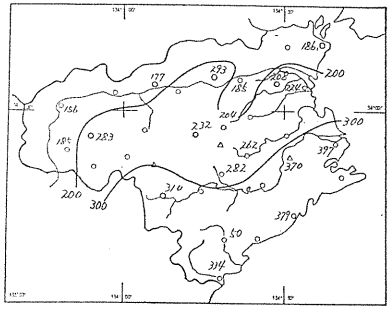
この台風は　四国南方を北西進し7日夕方宮崎県に上陸 大分を経て山口県から日本海え出た730ミリのもので高潮被害も大きく殊に相模灘に浪害を出した。徳島ではSE16.4m(11時)61ミリの雨だったが剣山南麓では300ミリを越えた　丁度水稲開花期に当り多少影響した。　　［注］［八幡村史］破堤

1902～03　明治35～36　暖冬凶作

35年11月に始まり36年4月に終る暖冬は下記の通りに甚しく 尚この間3～5月は多雨で麦 類は記録的な凶作となった。

月	11	12	1	2	3	4
徳島の気温	13.7	9.6	6.2	5.7	10.0	14.4
平年より	+1.4	+2.1	+1.2	+0.7	+2.2	+1.2
高い順位	6	2	8	－	5	5

36年麦作反収　大麦93　裸麦76　小麦23升



明36 7.7～8日　2日間雨量

1903　明治36　7　8　低気圧(大雨)

6月下旬から連続降雨して7月に引続き，遂に8日の梅雨末期豪雨となった7，8両日の合計雨量は図の通りで南部山地に多く北部吉野川筋が少い　那賀川其他県南小河川の氾らん被害があったものと思はれが不明尚徳島の7月雨量409ミリは多量の第3位である

［注］県統計書の本年被害　家全1　半1　床上8　下185　堤35　橋20

1903　明治36　8　少雨(多照)

7月は平年の倍近くの雨を見たが月末頃から8月に続き尚9月上旬まで甚しい晴天続きで徳島では8月最少雨量の記録となった　　県内8月雨量　小松島2.7　徳島7.9　脇町9.3　宍喰14.3　大枝15.4　富岡16.2

又今月の日照時数309時間は平年の126%で多照の第3位

1904　明治37　8　31　台風

27日南西諸島沖からゆっくり北上31日室戸岬付近に上陸，本県内を通り姫路付近から日本海へ抜けた台風　強風はなかったが雨量は　1日に350ミリに達したところあり（下分上山）然し本月前半の旱天のために 大きな被害にはならなかった。今月は日照時数318時間を記録し平年の130%で第1位の多照となる。

1905　明治38　6　梅雨

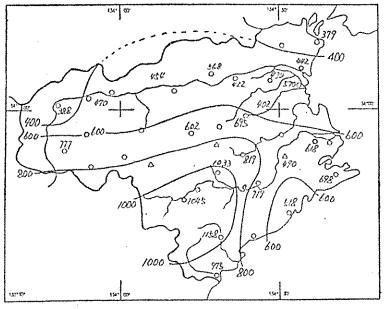
9日以後殆んど連日雨になった（下旬に3日間無雨）

月雨量は平年の倍以上で特に那賀川上流の多雨域では1000ミリを 超え徳 島でも多い方から 第2位記 録となった。

尚この間に県内で日雨 量100ミリ以上は13，14，19～21日等，然し　散発的だったので大きな洪水にはならなかった。

但し麦類（特に大麦）の収穫に相当影響がある。

反収　大麦98　裸109　小麦90



明38　6月雨量

1905　明治38　6　2　地震

安芸灘の地震で広島愛媛で壊家48戸を出した

徳島の震度4　3分間震動を感じた。

1905　明治38　8　低温

5月以降平年並のところ8月に入って急に全国的な低温になった　8月平均気温は25.1（平年より－2.1）その上多雨（月計444ミリ平年の233%で記録は第5位）少照（月計171時間平年の70%で少い方の第3位）で水稲反収は159升(並）だった　特に16日には山岳方面で300ミリを越す大雨があり（川井371坂州336下分上山307ミリ）諸川出水した。

［注］全国的な気候不順は8月だけでこの時三陸沿岸では平年より－4度となり米反収は平年の17%に過ぎなかった　9，10月は平年並に返った。　　［木頭村誌］うんか大発生

1906　明治39　8　干ばつ

雷雨も四回あり内陸では200ミリを越えたところもある（下分上山）が沿岸は好 天連続し2,30ミリに過ぎなかった　徳島では21.2ミリで8月中の少い雨としては第4位である。1ミリ以上の降雨は2，13，17日の3回でしかも13日に半ば以上の12.3ミリ降っているので相当な干ばつと云える。9月に入って時々雨があり水稲の収かくは並となった（反収171升）

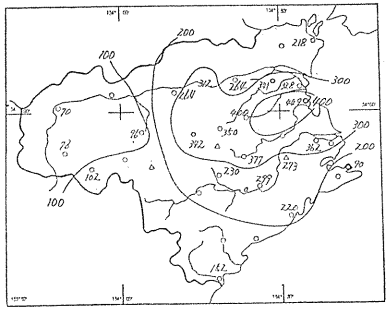
1907　明治40　2　10～11　大雪

所謂台湾坊主が四国沖合を通過したために大雪となったもので10，11日の徳島の平均 気温は1.5と1.1度，積雪42cmを見た，これは積雪の最高記録となるが県内各地も同様大雪となり（半田70cm）農作物に多少の被害を出した，

1907　明治40　8　23～25　大雨

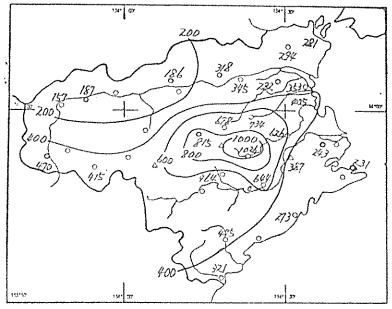
この雨は四国沖に停滞した熱帯低気圧によるもので図のように特に中部沿岸に多かったため河川の大氾らんにはならなかったが徳島では8月の日雨量としては第2位記録を作り多少の被害を出した。

日雨量	23日	24	25
徳　島	24.4	268.5	35.2
小松島	107.0	225.0	117.2
富　岡	71.1	196.2	94.7



8月23～25日　3日間雨量

1907　明治40　9　7　台風(洪水)



9月4～8日　5日間雨量

7日の夜から8日の午前中に九州西岸を北上し山口県を通って日本海に抜けた740ミリの台風で西日本は大災害を受けた。九州北上中に速度が落ちたことは大雨時間をのばした。

7日徳島の最大風速ESE13.6m(14時)　日雨量213.5ミリ県内では全般に4日から降り6，7日が最も多く8日までの合計雨量は左図の通り

	福原	鬼籠野	下分上山	川井	朴野
6日	386	346	262	286	249
7日	371	264	275	279	241

このため吉野川勝浦川下流で非常な出水となった。吉野川水位21尺（徳島市）

［注］1，被害（県の統計書により年合計）死者19（内吉野川16）傷27　家全360 半465 床上10411 下13002 堤決235　道204　橋100　防波堤47　田流51町　畑128　浸水田6636　畑7037　船54　損害2181.6千円

2，［山城谷村史］大洪水［板野郡誌］連日の大降雨により吉野川河水激増し濁流狂奔し各所堤防決かい其他を合せて85ヶ所延長2825間に及び大代の極小区域を除くの外全部浸水す人家浸水座上4寸～4尺，之に加えて潮水も浸入して惨状名状すべからず稲作皆無となる

3，今月総雨量は　福原1193　朴野942　川井921　おろの909

4，今年の水稲反収は135升で当時の標準値の86%程度

1907　明治40　9　17　大火

橘浦　18時より翌18日2時まで全焼96半焼（全町の⅙程度）

1907　明治40　5　21　天文

［井内谷村史］火球とぶ，4，5分後大音　7.31　15時頃流星とぶSE→NW（広島沖海中へ落ちる）

1908　明治41　8　6　台風

四国の南を通って7日夜伊勢湾に上陸した台風だが本県のかなり近くを通って大雨となり6，7日の合計雨量は山手で400～300ミリを計った。6日の雨量は福原353ミリ坂州253西宇233上名239鬼籠野220（風は強くない）

［注］1，尚この月は5日より28日まで雨天多し　この間の無降雨日は5日程度で和食，坂州の月量1000ミリを越える

2，県の統計書による本年災害13.7千円

1909　明治42　4　6～7　低気圧

5日台湾北部から出た低気圧は九州と四国南東部をかすめて和歌山の南へ上陸しながら急激に発達したため各地に猛烈な風雨被害を起した　徳島では雷雨を伴い（6日21時頃）最低気圧739.8ミリW14.6mを計ったが季節には稀な大雨（100ミリ内外）だった。引続き県下では晩雪を見た

［注］［辻風土記］渡船場で17名水死

1909　明治42　6　10　地震

15時50分発の中震で震源は紀伊水道，徳島の震度4有感時間24秒　尚名古屋，岐阜，福井等に有感，高知は無感だった。

1910　明治43　5　10～11　台風

11日朝紀伊半島に上陸した730ミリ程度の台風だったが季節 が極めて早く又風 雨も甚だしかったため関東以西に大被害が出た　和歌山では気船沈没で53名死し神戸港でも30船以上が沈没する等又香川県では高潮も加はり被害は大きかった幸い徳島では最低気圧736.8ミリNW11.1m　(11日02時）降雨時間が短かかったため被害は軽かった（吉野川水位徳島で16.1尺）　10雨量 福原341ミリ鬼籠野337 朴野290 下分上山257 神野川井247 西宇232

1910　明治43　5　13　天文［川内谷村史］ハリー彗星暁天に見ゆ(この彗星は週期約75年，過去に度々見られている)

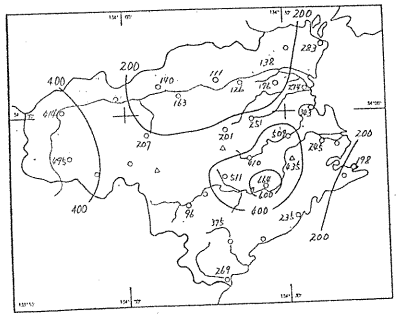
1910　明治43　9　8　台風

6日沖縄の西を通り7日22時に島原半島から上陸して東進し徳島付近を抜けた台風で始めは示度が深かったが上陸して急に衰え京阪以西に多量の雨を降らし水害を起した。本県でも各河川水害を見たが風が弱かったので（徳島NNE6.7m）割合に軽微だった（吉野川水位徳島で17.7尺）この時県下の降雨は早いところで2日に始まりおそいところで10日に終っている。

日雨量は　池田254　大枝170（6日）　日野谷165（4）　130（5）　126（6）　108（7）等

［注］　1．今月は引続き雨天多く日照時数は101.5時間で平年の61%，少い方から第2位の記録となり，水稲反当148升豊作の41.2年に比べてかなり低い（当時の標準の93%程度）

2．県統計書の本年土木災害　住全60　床上359　下1055　堤決104ヶ　道1412　橋85　田流31町　畑36　浸水田532　畑517　船19　損害額406.1千円

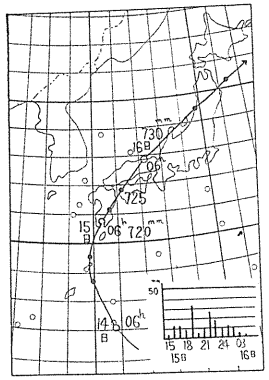


9月3～8日　6日雨量

3．［山城谷村史］大洪水　崩かい数所　川口で一家埋没5死　2戸流　相川で1戸流

1911　明治44　8　15　台風（土佐水）

Aクラスの大型台風で本邦の被害は大きかった

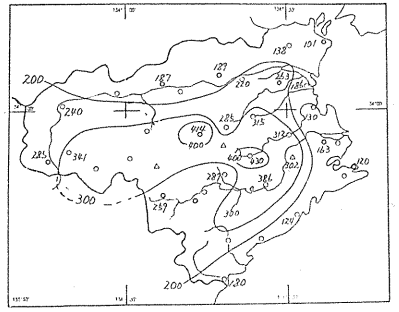


台風径路と徳島毎時雨量

徳島の最低気圧は736.6ミリSE12.9m（21時）大体の雨は15日中に降ってしまったが県内の雨量分布は図の通りで吉野川では上流多雨のため洪水被害となった従って世に土佐水という。

（15日）福原373ミリ

朴野359　川井333　大枝326



8月15～16日　2日雨量

被害　死21　傷7　不明6　住全164半壊308　床上13255　下5478船流57　流埋地585町　浸水17442町

水位　脇町11m（16日5時）徳島7.6m

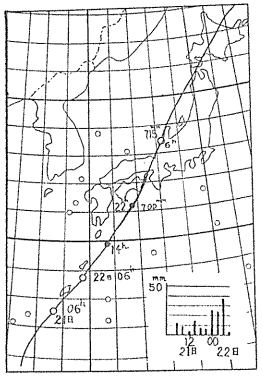
［注］県の統計書による本年土木災害　堤決153ヶ所　道1090　橋381　田流1178町　畑557　浸水田795　船79　損害額1174.9千円

1912　大正1　9　22　台風（洪水　高潮）

22日夜半前に県南海岸を掠めて　阪神地区に上陸したAクラスの台風で中心示度は700ミリ位（和歌山で711.3ミリ大阪714.9徳島717.4ミリ）徳島では卓い風はNW16.7m（23日03時）に過ぎなかったが大水害となり海岸では高潮に見舞はれた。

この台風のため全国的な災害を発生死傷者多数を出したが関東で列車の転ぶく事故もあった。

風雨状況　21日昼頃から始まり23日早朝までに，多いところで600ミリを越えた



台風径路と徳島3時間雨量

日雨量　21日　和食357　神野305　朴野302ミリ

22日　一宇555　朴野431　市場378　福原　351ミリ

尚300ミリ以上は　大寺　川島　下分上山　大枝　坂州　神野　鳴門等

このための河川の出水は吉野川　徳島7.5脇町10.5m　那賀川勝浦川　岩脇　丈六寺　6.3mとなり板野郡で田面上3mに達したという

高潮　室戸台風と殆んど同じ通り方をしたので沿岸の高潮は相当であったと思はれる（上記の板野郡田面3mの半は潮入とする）

伊島で23日1時より2時半まで70年来の高浪であった由（30間の高波と伝えているが大き過ぎるようだ）

［下注3参照］

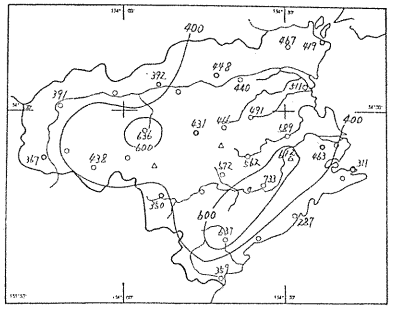
被害　死81　傷53　不明14　住全426　半潰796　床上26708　下16359　船流316　沈41　破421　流埋面積1850町　浸水28102町

内　訳

死者　徳島1　名東7　勝浦1　那賀5　海部2　名西7　板野27　麻植10　阿波10　美馬4　三好7

全潰　徳島1　名東79　勝浦6　那賀33　海部36　西54　板野116　麻植25　阿波39　美馬12　三好25

［注］1，徳島で9月の日雨量最大記録306ミリはこの時に得られ又本月雨量630.5ミリは第4位になる



9月22～23日　2日雨量

2，［脇町誌］大谷川氾らん50戸流失［八幡村史］洪水［高川原村史］吉野川洪水［板西町史］22日17時頃より増水を始め23日正午には寅の水より2～3尺高い，14時より減水を始め24日4時には交通開けたが堤防の決潰等もあり被害は非常だった。併し寅の水と違い白昼で比較的惨状を出さなかった　とに角空前の大水で大寺分署管内で溺死9　畜10　被救助1431名　浸水130戸　流家73　全潰52　半31　田畑流埋5.5町　破堤3ヶ300間　道路3ヶ40間

［橋］2時俄かの高潮5尺で　負傷1　倒家64　浸潮462　其他堤防道路等被害　同30分に潮引く

［棒］浸潮150戸　船50流失　漁具を失うもの206名　［福井村］海岸破堤600間　浸水40町歩

［海部郡誌］由岐では堤防殆んど破損数十戸破壊又は流亡

3，この台風が遙か南方にあった19日に既に大きなうねりが沿岸で観測され，接近時には津波の如しと云はれた処多く鎌倉まで被害があり，伊勢湾では軍艦の坐礁4　があった。

1912　大正1　10　2　台風（大雨）

二つの台風が3日朝及びひる頃に四国を通過したために起った大雨で那賀川流域で3～400ミリになったが特に徳島は稀有の大雨463.4ミリを計り日降雨量の第2位記録を建て尚一時間雨量も85.4ミリに達したしかし小範囲のため格別の大事には到らなかったらしい　徳島S8.0m（14,15時）

［注］1．上記のように此年は台風被害が重なったため水稲反収は138升に過ぎず（当時の標準値の84%程度）

2，県の統計書による本年土木害は　死94　傷169　住全1712　浸水46021　堤決1037　橋678　道2944　田流757町　畑419　船934　額4694.6千円　尚警察統計による水死1月1，8月1，9月50，10月2

1913　大正2　6～8　干ばつ

6月の梅雨期に入っても雨少なく7月は3，4，7，17～19，22日等の外乾天が続き小松島の如きは月合計2ミリに過ぎず徳島の13.7ミリは7月として第二位少記録になった，8月に入って18～21日に雨らしい日を迎え尚月内に1，2回降雨したので漸く干ばつ被害を軽減することが出来た　水稲収量は非常に悪いという程ではなかった（171升）が陸稲は反収39升で最低となる　この間の徳島の気象状態（平年比較）は次の通り

	7月	8月
気　温	25.3(−0.2)	26.5(+0.1)

雨　量　　13.7(−186)　57.3(−123)

雨日数(1ミリ以上)　3(−7)　5(−3)

無降水連続　6月25〜7月17日　[27日0.6　28日0.7　4日4.6　7日4.5]　7月24〜8月17日 [8, 9日0.1]

[注] 1，今夏は東北北海道に冷凶西日本に干ばつを発生した　水稲反収北海道0.8斗青森3.1宮城7.5福島7.7徳島でも7月5日から15日まで著しい低温が続き10，11日の最低気温15.3及15.6は7月に於ける低極第1，2位を占める引続き8月に入っても度々低温が現れ，5日の最低気温17.8は8月中の第5位であった。

2，8月2〜4日雨乞（井内谷村史）

1914　大正3　1　13　降灰

前日の鹿児島県桜島の大噴火による火山灰

1914　大正3　麦凶作

前年11，12月は多雨少照．本年に入ってもその傾向があり気温も高目で

	1月	2	3	4	5	6
気　温	5.5（平年より+0.5）	5.7（+0.6）	10.6（+2.6）	12.6（−1.4）	18.7（+0.9）	22.0（+0.3）
雨　量	17（平年の40%）	66（106）	135（138）	113（94）	279（200）	245（126）
日　照	199（122%）	143（93）	173（96）	200（102）	178（85）	161（93）

麦作に影響が大きく大麦（82升）裸（99）小（86）は明治36年以来の低記録となった

1914　大正3　7　干天

6月末から天気恢復して7月に入り上旬時々微雨あり12日特に吉野川筋で100ミリを越える雨を見たが中旬は晴天連続して18日徳島で計って最高気温37.1度は（旧観測地に於ける）第一位記録となった。尚晴天の持続傾向が強く無雨連続期間をあげると　7月13〜22　29〜8月2日　8月6日〜21日　27日〜9月8日等となるこのように時々降雨があったので大きな干害にはならなかったが7月平均気温27.9，最高気温月平均32.2等夫々第1位記録である

[注] 1，8月3〜5日雨乞（井内谷村史）　2，水稲反収198升は良

1915　大正4　7　干天

7月初旬の前半に4,50ミリの降雨を見た外6月頃から晴天が続き処によって俄雨を見る程度だった特に中旬に気温急昇し14日徳島で計った最高気温37.1は前年7月と同様に7月の（旧観測地に於ける）最高位記録となる　県内の月雨量は50ミリ内外で徳島の50.5ミリも第4位少記録である。

[注] 26〜28日雨乞（井内谷村史）

1915　大正4　9　8　台風．凶作

この台風は九州のはるか南方から北上を続け8日午後大隅半島から上陸して同夜北九州を通り朝鮮東岸に沿うて進んだ当地方では3日から本格的な雨が8日まで続き特に6日以降に大降りし那賀川上流では600ミリに達したが吉野川流域では一般に少雨でだった（200ミリ程度）大きな洪水にはならなかったが時期が丁度水稲の開花期に当っていたため二日続きの強風（カラ風）で大被害を受け反収は111升，明治32年以来の低記録になった（標準値の66%程度）　最低気圧738.8ミリ　8日SE15.0m　9日S10.5m

[注] [木頭村誌] うんかずい虫

1915〜1916　大正4　9〜5　2　温暖

暖冬の気配は前年の大4から始まり10月1月は2度以上の高温になったが3月に入って平年以下になりその後も余り高温にならなかったため麦類には大きな影響は出なかった

	大4				大5		
	9月	10	11	12	1	2	3
平均気温	24.8	19.9	14.1	7.8	7.3	6.4	6.7
平年差	+1.6	+2.5	+1.8	+0.3	+2.3	+1.4	−1.1
高温順位	2位	1	2	—	1	—	×

1917　大正5　温暖（豊作）

本年は暖冬に引続き極めて温暖で梅雨期も高温少雨其後も適当な雨と好晴にめぐまれて水稲は近年にない大豊作（反収221升，標準値の130%程度）となった本年内の月気温の平年比較，高温順位は次の通りである（3月だけは低い方からの順位）

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気　温	7.3	6.4	6.7	14.1	18.7	23.9	26.1	27.3	24.8	18.5	14.1	8.3	16.4
平年より	+2.3	+1.4	−1.1	+0.9	+1.2	+2.4	+0.6	+0.9	+1.8	+1.1	+1.8	+0.8	+1.2
70年間	1位	10	(7)	7	5	1	—	9	2	4	2	8	1

1917　大正6　1　寒冬

前年の暖冬に引きかえ本年から急に寒候期間に入り1月の平均気温3.3は平年より−1.7低い方からの順位は第6位だった。このため降雪も多くミカン類は凍結被害を出した。

1917　大正6　8　3　台風

四国南方から真すぐに北上した台風は3日室戸岬付近から上陸し高松鳥取付近から日本海え抜けた。県内雨量は福原を中心に鬼籠野，坂州，朴野，和食で200ミリ以上（福原506ミリ）だったが7月炎天のあと大きな被害にはならなかった。　徳島の気圧739.7ミリ　S11.4m

1917　大正6　10　10　台風

10日夜四国南岸を掠めて11日末明和歌山付近に上陸した台風で県内では150〜300ミリの雨が降り特に中心の直前で短時間強雨となったが大害は出なかった。　徳島　739.5ミリ　SE17.3m　204ミリ

[注] 尚9月から10月にかけ曇雨天甚で多く徳島の雨日数は夫々18日，又10月の日照時数は114時間で少い方の第1位だった（水稲収量は並の168升）

1917〜18　大正6末〜7始　寒冬少雨

秋の悪天候に引続き11月から1月にかけ極めて低温となり　しかも降雨が少く特に海岸では　12，1月の両月間の総雨量は10ミリ以下　雨らしい日は一日というところも出た(鳴門，富岡，和食，日和佐，宍喰等の海岸地帯)又20ミリ以下は全県の東半分を占める　徳島では表のように

	11月	12	1	2
気温（平年差）	10.1(−2.2)	4.9(−2.6)	3.2(−1.8)	4.8(−0.2)
低い順	1	1	5	—
雨量（平年比）	38.4(40%)	8.6(16)	3.6(8%)	32.9(52)
少雨順	—	8	2	

僅かの期間に多数のレコードが出てミカン，蔬菜類に寒害を出した

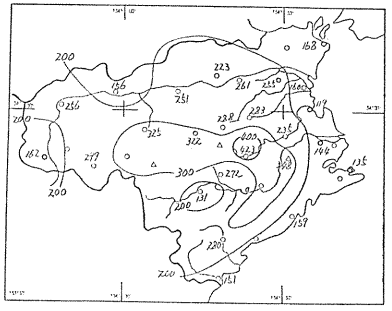
[注] 大正6年の年平均気温14.8は低い方から第2位記録となる

1918　大正7　7　12　台風

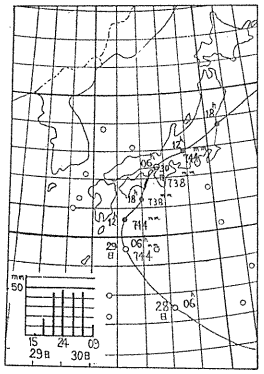
この台風は松山付近を北上同県に大害を与えたもの，徳島では734.4ミリSE15.3m　雨は10〜12日に降り福原634川井530ミリで最多雨域を作った。

1918　大正7　8　29　台風

室戸を掠めて30日朝和歌山付近に上陸した台風徳島の気圧731.9ミリESE22.0m雨は29日に殆んど降り福原408朴野335ミリ等を観測した　このため那賀川は大洪水となり最高水位（宮浜で20.6m古庄で6.2m）に達した。



7月28〜29日　2日間雨量図



台風径路と徳島3時間雨量

［注］1，県の統計書による本年土木災害は　死96　傷69（警察統計の水死者9月29，10月6名とあり）
堤決12260間　道11490　橋400ヶ　田1220町　畑32865　建物23868棟　船1846　価格9430.3千円
尚上記水死9月29名はこの台風によるものと考えられる。
2，尚本月中8日東から来て高知県南西岸に上陸した台風，21日に九州を迂回して山陰に出た台風があり夫々多雨地帯では400ミリの雨を見た。
3，これらの為本月の雨量は多いところで1200ミリを越す有様（朴野1270.7　福原1137.5ミリ）で平年の3倍に達し徳島では8月多雨の第6位になった。

1918　大正7　秋　不作

9月14日南紀に上陸した優勢な台風があり本県では 雨もそれ程で無かった（最多地で250ミリ程度）（徳島最低気圧736.8ミリ　NW15.5m）が水稲成熟期に度々悪天であったことは致命的な影響を与へ反収128升は大4，明35年に次ぐ低記録となった（標準値の75%程度）

	8月	9	10
気　温	26.2（平年差−1.0）	22.7（−0.5）	18.0（+0.5）
雨　量	437ミリ（230%）	379（126）	215（112）
日　照	207時（85%）	184（109）	137（82）

1918　大正7　10〜12　流感

［徳島市史，高川原村史］流行性感冒大流行し多くの死者を出した［井内谷村誌］死70［辻風土記］スペイン風男38女54死
［注］この流感は全国的に流行したもので大正9年にまで及んだ

1919　大正8　豊作

台風の襲来もなく7,8,10月は割に好天に恵まれて反収219升は大5に次ぐ豊作となった（当時の平均の126%程度）

1920　大正9　8　大雨（台風多し）

今月下記の3ケの台風が付近を通り各回日量2，300ミリの降雨があり尚8日夜の思いがけない大降りがあるなどで月総雨量が1000ミリを越えたところは朴野（1743）和食（1570）神野，出原，福原，坂州等であった。
幸いな事に風が弱く（徳島の最強は21日ESE10.3m）大害にはならなかった。
1．3日夜から4日朝にかけて四国沿岸を通り紀州田辺付近え上陸した台風　和食430　朴野347　神野345　徳島115ミリ（1〜3日合計）
2．15日朝西四国南部から広島方面に抜けた台風で13日から降雨が続き次の台風にまで連続したので稀な不良天候となった。14〜16日の3日雨量　和食474　朴野739　出原526　宍喰550
3．20日の夜中に室戸付近より広島え抜けた台風で20日から21日にかけて降り和食298　朴野363　出原261　大枝243（20，21日合計）
［注］県の統計書の本年土木災害　死2　傷1　堤決728間　道454　橋12　田6297町　畑1728　建物1660棟　船9　額585.0千円

1920　大正9　秋　少雨

8月下旬から続いた好天の傾向が11月にまで及んだ。9月は特に吉野川筋に顕著，山地ではそれ程でなく，10，11月は全般に少雨であった。
徳島については9月雨量71.4ミリは少い方から昭和8年に次ぐ第2位記録，10月54.8ミリは第4位の記録である

1921　大正10　6　梅雨（麦不作）

6月11日から21日までの連続降雨で400ミリを越えるところも出たが引続いて24日から30日まで連続して更に100〜200ミリ降り尚一日おいて7月1，2に100ミリ程度の雨を見た，加うるに極度の低温（月平均気温19.8は6月第1位低極で平年より−1.9度）少照（月日照時数72.5時間　少い方から第2位）にわざわいされて本年の麦収は大正3年につぐ低記録となった。　大麦91升　裸123　小麦74

1921　大正10　9　長雨（台風）

9月上旬から降雨日多く3日から25日までに全県にわたる無降雨は8，9，16，19日の4日に過ぎなかった。尚この期間の終りに潮岬の東から北上した台風があって24，5日の雨量は200〜300ミリに達した（徳島の気圧739.1ミリ W12.7m）　又今月の日照時数は119時間で　平年の70%に過ぎなかった（少い方から第4位）
［注］1，県統計書による本年災害額　死1　堤決3376間　海岸400　道1782　橋28ヶ　田3262町　畑1102　建物962棟　船37　価格677.9千円
2，［山城谷村史］25日伊予川沿岸大雨で水田冠水

1922　大正11　1　寒冷

1月は各日とも平年より高温となったことが殆んどなく，特に20日には日平均気温が0度を下る等の珍らしい現象も出て月平均気温3.1（平年より−1.9度）は低い順位では第4位になる。
尚　この年は雪もよく降り9日をかぞえ積雪日数は4日あった

1922　大正11　8　2　旋風

三好郡三野町に14時頃竜巻発生し移動途上の住家を倒し多数の死傷者を出した。特に消滅前15分計り停滞したところでは300m円内に立家を残さない程であった由
被害　住家全潰13　半8　非住家全9　半7　被害戸150　死2　傷10　農地10余町
［注］県統計書による本年土木災害額　293.0千円

1922　大正11　高温夏干

本年内で平年以下に下ったのは1，3の両月に過ぎず7月の外は下表の通り甚で高温だった。又2月は降雨量多く177ミリで第1位多雨を記録したが5，6月かなり少くなり8，9月は特に顕著で水稲には好都合だった。

徳　島	2月	4	5	6	8	9	10	年	8	9
平均気温	8.0	14.0	18.9	22.8	28.3	24.7	18.1	15.9	雨量58	100
平年より	+2.9	0	+1.1	+1.1	+1.1	+1.5	+0.6	+0.4	平年の31%	33
高順位	2	−	3	4	3	3	7	4		

［注］今夏西日本干害

1923　大正12　7〜8　干ばつ

7月下旬から8月中に全県的な降雨を見たのは　8月22，23，31日位のもので　徳島のように7月22日から8月30日までの40日間に降雨日3日（このうち1ミリ以上の日1日）というのもあり甚しい干ばつとなった。
徳島の8月平均気温23.6は平年より+1.4　第1位の高順位であり　7月の最高気温35.8(29日)及び8月の36.5（16日)は共に珍らしい記録となった

1923　大正12　8〜9　赤痢　［井内谷村史］

1923　大正12　9　1　地震　（関東大震）

［理科年表］東京　横浜等が潰滅的な大打撃を受けた　被害合計は死者9.9万　傷10.4　不明4.4　全潰12.8　半12.6　焼44.7　流失0.09　　徳島の発震時は　11時59分　震度4

1923　大正12　9　15　台風　不作

この台風は室戸岬南方から北上し15日の昼頃紀伊半島南部に上陸した。徳島では気圧737.0ミリ　W11.7m，県下の雨は14日から15日にかけて降り多いところで400ミリ（和食425　鬼籠野410　一宇418）だった。
この暴風雨は丁度晩稲の出穂期に当っていたために　大きな災害となり反収は144升に留った（当時の標準値の81%程度）
［注］県統計書による本年土木災害　死3　堤決5144間　道3252　橋141ヶ　田2739町　畑1031　建物1115　船2　額1726.8千円

1924　大正13　夏　干ばつ

6月梅雨期に入っても雨天少く　7月も中頃だけ降雨したが少量であり，その後8月15日から25日にかけて始めて雨天を見る程度だった　一部の農作物は干害に見舞はれたが日照りに不作なしのたとえの通り水稲収量には余りひびいていない。

	6月11日より	7月中	8月18日まで
徳島の雨日数（1ミリ以上）	4	4	1

［注］1，尚この年は東北地方以南で干害を受けた　香川県5分の減収

2．県統計書による本年土木災害702.9千円
［井内谷村史］7.15～17雨乞［山城谷村史］干

1925　大正14　8　3　降ひよう　［井内谷村史］被害あり

1925　大正14　9　17　台風

この台風は17日の夜九州中部に上陸し瀬戸内海をNE進したもので徳島では，気圧749．4ミリ　WNW7m　県内雨量も100～200ミリに過ぎなかったが吉野川上流地域で600ミリの豪雨となったため本県で増水し橋の流失低地浸水山崩れ（鉄道事故）等多少の被害を出した。

［注］県統計書による本年土木災害　467.4千円

1926　大正15　5～6　はしか　大流行

1926　大正15　8　干ばつ

7月始めの大雨のあと雨天少く特に8月に入り干天が続いた。その後15日から25日まで連続的な微雨を見たが量は少く月合計は30～70ミリで徳島の如きは14ミリ，少い方からの第3位の記録となった．又8月平均気温28.3は高い方の第3位　9月の25.0は第2位を占める等大きな干ばつになった。

［注］1．この干ばつは九州，中部等にも及んだが一方北海道は冷害になった
2．今年米収は標準値より多少低い169升
3．県統計書による本年土木災害212.8千円

1927　昭和2　6～7　干ばつ

梅雨期の6月から7月にかけ降雨量甚だ少く僅かに7月初めの連続俄雨で農作業を終ることが出来た状態で炎暑に経過した。

徳島6月雨量57.4ミリは少い方から第3位　7月最高気温の平均32.1度は高い方から第2位

［注］1．本年米収は標準値を上廻る203升
2．［井内谷村史］7.24～26雨乞　［山城谷村史］6～8月干
3．県統計書本年土木災害172.8千円

1928　昭和3　2　22　火災

［八幡村史］眉山200町歩焼失　［徳島市史］23日八万町及び大麻山 山火事

1928　昭和3　3　19　火災

［徳島市史］徳島市庁舎水道課を除き焼失

1928　昭和3　8　30　台風

8月は二つの台風の西日本上陸がある　前者は18日足摺岬から上陸し県南の多雨域で350ミリ　後者は30日朝豊後水道を北上し中国を抜けたもので県内大部分で200～300ミリを観測したが　吉野川，那賀川とも上流域多量で近年稀な出水となり家屋橋堤防及び農作物等に害が出た　徳島の気圧749.6　SSE 12.6m

［注］1．県統計書本年土木災害　死1　傷2　堤決7818m　防波堤1068　道1967　橋流31　田2470ヘクタール　畑1654　住2837　船26　価格1063.9千円
2．［高川原村史］吉野川改修のため本村被害なし［山城谷村史］伊予川沿岸水田冠水

1929　昭和4　1～2　低温　少雨

1月の雨量は10ミリ程度（県内で最少2ミリから最大30ミリ）又2月も28日の大量降雨を除けば20ミリ前後で二ケ月少雨が続いたため水不足になったところも出た　これは寒気の強いことに関係し両月とも平年より一度低温だった。

1929　昭和4　3　15　黄砂　この黄砂はかなり顕著で名古屋以西で観測され半日～1日続いた

1929　昭和4　4　9　火災　富田小学校全焼

1929　昭和4　7～8　干天

7月10日の梅雨明けより8月中旬の台風来まで中間に一週間位の雨天はあったが雨量少く全般に水不足となり尚炎暑強く平年に比べ1度位の高温となった。

［注］この年東北地方を除き全国的な干害となる　［山城谷村史］干

1929　昭和4　8　15　台風

この台風は四国南方から北上，15日東岸沿いに神戸付近え抜けでたもので徳島の気圧738.9ミリ　ESE14.8m
県内の雨量は100～250ミリ程度で多少の被害を出した

［注］県統計書　本年土木災害1回
堤決10550m　海岸堤2492　道574　橋流9　田186ヘクタール　畑33　住2　計170.6千円

1929　昭和4　9～10上旬　秋りん

8月の台風後好晴が続いたが9月4日より始まった悪天候は10月の上旬に続き総雨量は過多とは云えないが日照時を大いに減じ（9月は平年の80%）水稲収穫に多少影響した

1930　昭和5　9　少雨

8月沿海部で少雨の傾向があったが9月は全県的に少く10月の中旬にまで及んだ．県内の9月雨量は50～100ミリ程度
徳島は77.2ミリで少い方から第3位の記録であり　8，9月併せて150ミリとなり平年の30%に過ぎなかった。

［注］県統計書　本年土木災害1回
堤決1368m　海岸堤909　道決415　橋流4　田27ヘクタール　価格133.9千円

1931　昭和6　2　10　大雪

大陸高気圧の張り出しによって寒気厳しかったあと10日に発達した台湾坊主が四国沖を通ったため県下一帯，特に剣山北斜面に大雪となり30㎝の積雪を見た　徳島でも27㎝積り第5位の記録となった。

1931　昭和6　5　15　低気圧(風雨)

山陰沖を通った強い低気圧のために全国的な暴風雨を起したが徳島では気圧754.3ミリ　SSE18.6mを計り　県内では7日から連続降雨中のところえ50～150ミリ（多いところで朴野　神野が250ミリ以上）の短時間豪雨があって河川増水し橋の流出，豊作物の被害を出した。

1931　昭和6　6　12　低気圧(大雨)

本州を挟んで南北二中心の所謂二つ玉低気圧の通過による大雨で特に那賀川上流に多く100～200ミリ（多い朴野では400ミリ）で橋の流出損傷や浸水家屋が出たが　一方吉野川筋では河口付近を除き殆んど降らなかった。

1931　昭和6　7　梅雨　低温(不作)

6月下旬から曇雨天が続き，特に7月に入って連日のように降雨した。夏晴れを見たのは30日以後でこの間の無雨日は8,23の両日に過ぎなかった。然し各日の雨量はそれ程多くは無いので月量としては300～400ミリの程度。一方気温は甚だ低下し月平均値は最低第1位記録となり又日照時数も平年の約½で最低記録だった。

7月　平均気温	23.6	最高気温平均　26.8	最低平均　21.2	日照時数　118時
平年より	−2.1	−3.0	−1.2	−103
低い順位	1	1	6	1

このような結果水稲の成長十分でなく且つ甚しい害虫の発生や下記9,10月の台風襲来があって　収量は167升標準値の88%程度の不作となった。

［注］この年は北海道東北関東にかけて冷凶となり北海道の減収率は48%だった。
（4，5月の気温低下　奥羽北海道1～1.5度其他1度以内，7月奥羽3度以上関東近畿中国2～3九州1～2度）

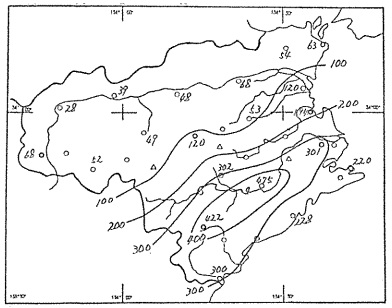
1931　昭和6　9　26　台風(洪水)

この台風は26日九州と山陰の西海岸を掠めて北東進した。本県では 25，6日那賀川以南に多降し小河川の氾らんによって局地被害となった。

徳島の気圧748.6ミリ　SE12.3m　日雨量最大は朴野320神野300ミリ(25日)

被害　赤河内村では溺死者を出し日和佐町で薬王寺前の浸水は26日午後6尺を越え軒に達したところあり又牟岐町も浸水被害を受けた。

死3　傷6　家浸水2000　流8　倒12　道崩50　堤防決15　船不明14　県費復旧被害50万円



9．24～26日の3日合計雨量

［注］［赤河内村史］日和佐川大洪水西河内月輪の堤防数十間決かい１戸流失，北河内では２戸流，２戸半かい10.13の洪水で被害を大きくする

1931　昭和6　10　13　台風

14時頃室戸を掠め紀州田辺付近から上陸した740㎜の台風で雨は12日から13日に 降り吉野川流域の150ミリから南部海岸の300ミリ程度だった．前台風と同様に被害は県南に多く堤防決　橋流　道崩れ等あり又吉野川支流の飯尾鮎喰川は短時間大雨の氾らんで田畑に被害が出た

徳島気圧　744.5ミリ　WNW10.8m　13日の雨量176.6ミリ（一日雨量の大きい順から第３位）

被害　傷６　床上300　下900　田畑の冠水180

［注］県統計書 本年土木災害２回　死３　傷12　堤決13160m　道17422　橋流87　田1693ヘクタール　畑482　住1822戸　船４　価格1055.2千円

1932　昭和7　1　温暖　少雨

月平均気温は6.4度で平年に比べ＋1.4度と甚だ高温になり高い方からの順位では第６位を占めた。

尚月雨量も甚だ少く県の西部で30ミリを越えた外全般に５ミリ程度で 徳島の 月雨量5.5ミリは少い方からの第４位記録になる　然しこの温暖少雨の傾向はこの月限りで２月は大体平年並にもどっている。

1932　昭和7　2　25　大雪

低気圧（台湾坊主）の四国南方通過後　徳島で11時に31.3㎝の積雪を見た。県内でもところどころ30㎝以上に積り北西部は常に反して案外少なかった　（小松島35㎝　池田15　日和佐18）

［注］２月の大雪ででは　明治40.2.11(42㎝)，明26.2.27(33㎝)につぐ第３位記録である。

1932　昭和7　4　低温

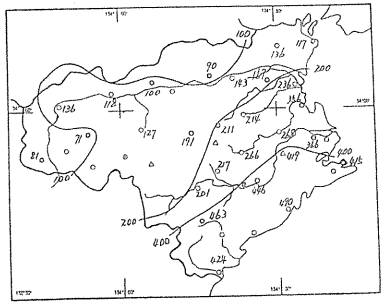
2，3月と低温気味であったが ４月も亦連日低く，平年以上の日は５日間に過ぎず 遂に月 平均は12.0度　平年より2.0度も低い　これは４月平均気温の低い順で第３位となる。尚１日に観測した最低気温0.3度も４月の最低気温としては第３位になる。

1932　昭和7　7　2　低気圧(大雨)

２日未明徳島付近を通った低気圧のため県内各地大雨となり殊に県南部に多く日和佐で 300ミリ（１日）を計った徳島も176（２日）だった。 二日間の合計雨量は図の通りで県南海岸が400ミリを越えている　風は強くなかった。

被害　県南部は浸水橋流堤防道路の決潰があり　吉野川の橋も流され徳島市内では浸水180戸を算えた。

［注］今月後半無雨16日位続く



7．1～2日　２日合計雨量

1932　昭和7　8　12～15　台風

この台風は12日に四国の沖合まで北上しながら15日まで停滞し，漸やく北東進したため連日降雨に見舞はれ特に坂州の如きは９日から13日まで各日100ミリ以上（110ミリ，192，277，170，203）という珍らしい大降りになった　然し大雨範囲が割に狭まかったため大きな水害は起さなかったが月を通じて雨天日数多く（多いところは26日）合計雨量も坂州，朴野で1000ミリを越えた

1932　昭和7　9　前半　秋りん

２日から16日まで殆んど連日降雨し　毎日の雨量は非常に多いという程では無かったが９日未明瀬戸内海を北東に通過した低気圧では100ミリ内外，15日から16日にかけ四国沖を通った低気圧では50～100ミリ降った。

これらのため県内では200～350ミリの合計雨量となり海部郡で被害を出し　又東祖谷山村では13日来数回の山崩れがあり県道10m余り崩壊して数日間交通と絶した 尚この期間に雷雨の発生も多く4日には板野郡で落雷した。

［注］県統計書　本年土木災害576.6千円

1933　昭和8　5　3　低気圧(風雨)

２日正午頃黄海にあった低気圧が３日日本海へ進行したが徳島では２日朝から雨，夜になって暴風雨となり最強はWNW17.2mだった

総雨量は県南の山地で200ミリ程度（朴野250ミリ），県北は少ない（徳島30ミリ）

このため航路欠航工事中の鉄橋の一部破損により一名溺死（名東郡新居村）等があった。

1933　昭和8　6　14　ひょう

この日は雷日和で関東以西で多数の雷雨があり本県では午後発雷し徳島を夜20～21時に通った。

この雷は吉野川下流域所々に降ひょうし最も烈しいのは市場，伊沢村南部で巾１㎞東西16㎞の一帯に10分間前後中には雞卵大のもあり　温室，農作物に被害が大きかった。

1933　昭和8　6　28　雷雨

香川県SWで発生した雷が東進して11時半頃板野郡の二ケ所に落雷し死者１名を出した。

尚今月は梅雨期に抱らず雨天少く殊に月末は高温となり月平均気温22.7度は平年より＋1.0 高い方から第５位の記録となる。

1933　昭和8　8　3　台風

この台風は東支那海から朝鮮南部を廻って４日日本海え出たもので県南山地に多量の雨を降らせた．早いところでは７月31日から降り出し 総雨量は500ミリに近かった（３日雨量 横瀬は318 朴野243ミリ）然し吉野川流域では大体100ミリ内だった。この台風による水害は堤防道路の小破損に止った。　徳島の気圧755.4ミリSSE8.3m

1933　昭和8　8　雷雨

月内に10日の雷雨があり落雷したのは4，23，24，27，28日等で23日延野村27日坂野村で各一名雷死者を出した

1933　昭和8　9　少雨　多照　豊作

20日対島海峡で衰弱した台風の副低が室戸から東進したため　県南海岸で200ミリの日雨量を見たところ(宍喰，神野）も出たが一般には大したことなく特に北部で少雨多照に経過した（月内降雨１ミリ以上の日数４～９日に過ぎない）徳島の月雨量51.9ミリは９月として少い方から第１位の記録であり，不照日は１日のみ（19日）日照時数238時間は昭和14年に次ぐ第２位の記録 平年より70時間の超過となった。

このため本県では稀な豊作となり 反収227升をあげ戦前に於ける最高記録をたてた（当時の標準値の119%程度）

［注］主に西日本で６～９月干害を受けたが　全国的な豊年となつた。

1933　昭和8　10　20　屋島丸台風

石垣島付近で710ミリに発達していた優勢な台風で 宮崎を通り姫路付近へ抜けた折（13時頃）須磨沖で屋島丸（大阪商船946トン)を沈没し乗員船客の約半数(不明とも66)の遭難者を出した。通路各地の被害も甚大であった。

本県の雨量は100ミリ前後で水害は無かったが多少の風害を出した　徳島の気圧739.1ミリ　S17.3m

被　害　　海上　　漁船10　発動機船６　小船数隻　不明者９

　　陸上　　製糸工場１小学校（建設中）１ 競馬場スタンド１倒壊

［注］県統計書　本年土木災害　150.6千円

1934　昭和9　1　9　地震

剣山北麓（貞光川源）の地震。８時07分発震。本県では稀に見る強さ（震度Ⅲ）で強震範囲は本県大部分と香川岡山に及び有感範囲は近畿中国の大部分と大分であった。　被害なし

1934　昭和9　1～2　低温少雨

１月に入って寒気厳しく連日平年値を下り特に下旬に甚しく月の平均気温2.8は低い方から第３位になる(平年差１月―2.2　２月―0.5)　尚少雨の傾向は８年12月から本年３月に及び12～２月の合計雨量は 平年の48%，特に２月の19.4ミリは少い方から第４位記録である

［注］尚この低温傾向は3，4，10，11月と続き年平均気温14.8は大６と同じく低い方から第２位である

1934　昭和9　3　21　低気圧（風）

20日夜から21日にかけて日本海で発達した低気圧は徳島でも12時間に14.1ミリの気圧下降を示した程で22日朝カラフトSE方海上に達した時は704ミリとなり暴風猛烈を極めた　徳島では最低気圧745.0ミリ　W18.2m

近海は大浪のため交通混乱し牟岐では漁船２大破，又美馬郡で小学校の倒壊があった。

［注］函館大火で死者2094焼失22633戸

1934　昭和9　5　13　濃霧　降ひよう

12日夜から近来稀な濃霧で海上交通が混乱し貨物船喜代丸が由良沖で坐礁した。この濃霧がはれた13日に雷雨頻発し香川徳島岡山で大豆～豌豆大の降雹があった　徳島の雷は午前10時頃から発生したが降ひようは13時頃から16時の間に諸所（徳島，加茂名町，小松島，立江，藍園，森山，佐那河内，木頭）に起り桑，ミカン，麦等の農作物に少被害が出た。

1934　昭和9　6下～7上　8月　干ばつ

６月25日から雨なく特に７月に入り連日好天11日まで続いた　時期が丁度田植期であったため県の北東部で植付不能を生じ北西部では煙草などの農作物に干害を出した。尚８月に入っても散発的な雨より無く特に県北西部の雨量は30日までに30ミリ程度（31日に20～40ミリ降る）で第十の水量は平年の半にも達しない状態で相当に農作物に影響し飲料水にもこと欠く有様といわれた。

［注］１，この時関東以西の大平洋岸で干害となったが，一方奥羽北海道では冷害となり米収は平年の17%減で大正２年以来の凶作だった

２，7.9～11雨乞（井内谷村史）7.28～8.29干（山城谷村史）

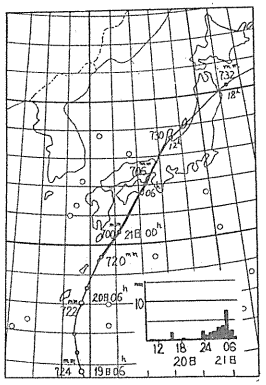
1934　昭和9　7　8　火さい　池田大火　100戸余焼失　（損害50万円）

1934　昭和9　9　9　台風

この台風は有明海から山口県に抜けた　　徳島気圧746.1ミリ　SSE18.6m

雨は那賀川上流山地に多く250ミリを越えたが５日の150ミリ程度も加わって河川増水し　道路，護岸の決，三好の山崩れの外農作物にも被害が出た。

1934　昭和9　9　21　室戸台風（高潮）



室戸台風と徳島の雨量

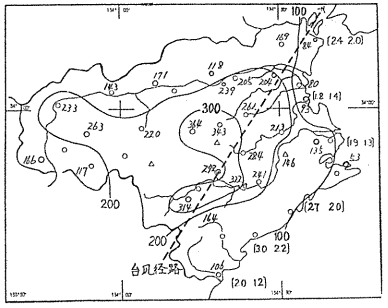
台風の経路と示度は図の通りで21日05時10分室戸岬を通った時最低気圧は684.0ミリを計り空前の最低記録を建てた。

徳島706.8　洲本706.3　大阪715.8　京都718.4ミリ

この台風の被害は北海道を除く全国に及び特に大阪では高潮被害を加えて大きく，日本の経済を大きくゆさぶった　全国合計　死2702　傷14994　不明334　全潰38771　浸水401157

県内状況　下図のように徳島のすぐ西方内陸を副台を伴って北進し各地で台風眼を観測し又発光現象も気付かれている　尚一つの特徴は中心前の暖気が異常であった。徳島で15m以上の暴風は（左図の太線経路のように）20日21時から21日９時までの13時間　６時に最大SE36.7m を計り６時10分から５分間位風衰えて後風向順転したから眼半径は極めて小さいように見える

雨量　20～21日にかけて雲早山の北麓で300ミリ南麓で260ミリ其他は一般に少く17日以降の合計量は右図の通りである。



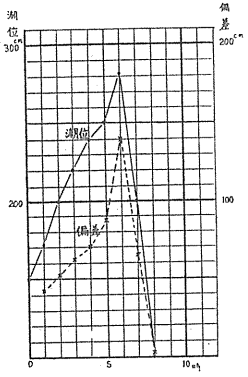
9.17～20　4日合計雨量と高汐

高　潮　小松島の高潮は（太径路は徳島で15m以上）図の通りで６時少し前に最高に達し最大偏差（実際潮位から天文潮位を引いたもの）1.4mを観測した尚牟岐港修築事務所の報告によると当日と平日の最高潮位の差は2.1mであった由　其他県内の潮高は右図に［　］で記載の通りに風当りの強い県南海岸と中心の通った鳴門が最大偏差２mとなっている

［　］の内左は平均水面からの潮位　右は偏差　単位m

被害　台風通路の東部に大きく海部那賀両郡では4.3の全潰家を出し名東2.6板野1.8%其他は１%以下であった河川水害は大して無かったが高潮害で23000軒の浸水（全戸数への割合徳島74%板野郡24第３位の海部郡は4.5）撫養塩田は荒廃し又海岸の稲作は700町歩が収かく皆無となった。

死37　傷345　不明２　住家全922　半1268　流66　床上浸水6168　下12517　船2303　橋24　道353　堤防69　田畑30450町　流材28420石　見積額1736.5千円　船882千円



21日　小松島の高汐

	人 死	人 傷	人 不明	家 全かい	家 半	家 流	床上浸	床下
徳島市	1	1		133	81	8	4650	9800
名東郡	4	63	1	222	103	1	319	674
名　西	1	4		72	45		55	96
板　野	4	30		356	351	25	1644	3256
阿　波	4	4		87	78		63	199
麻　植	2	2		54	19	1	23	81
美　馬	3	6		57	41	8	148	154
三　好	1	3	1	34	40	4	30	106
勝　浦	4	5		29	262	5	97	875
那　賀	9	104		699	768	14	38	448
海　部	4	77		376	231	68	134	268

［注］１，県の統計書による本年土木災害　死34　傷416　堤防決45902m　防波堤162　海岸堤15814　道69414　橋流89　田3922町　畑1010　住家14595　非10043　船1136　価格15215.8千円

２，東北地方では冷害となり水稲反収青森8.7斗（５年平均の60%）岩手18.5(52)宮城11.9(66)山形12.0(59)

1934　昭和9　不作

上記のよう年内に両度の台風に加え干ばつ被害もあって本年米作は156升（当時の　標準値の82%程度）と大正１２年以降の不作になった　米作期間の平年比較は次の通り

	7月	8	9	10
気　温	26.3(+0.8)	26.6(+0.1)	22.8(−0.2)	16.1(−1.3)
雨　量	157ミリ(79%)	30(16)	375(128)	204(106)
日　照	226時間(102%)	277(114)	143(85)	163(98)

1935　昭和10　3　24　低気圧（風雨）

発達した低気圧が四国沖を通って暴風雨になった　県南多雨地で100ミリを越えるところも出たが一般に少く殊に吉野川沿いで少なかった。　然し風は稍強く徳島でSE15.3mを計り海上交通を混乱する外徳島護岸の決潰，県南で倒壊非住家４棟等の災害を出した。

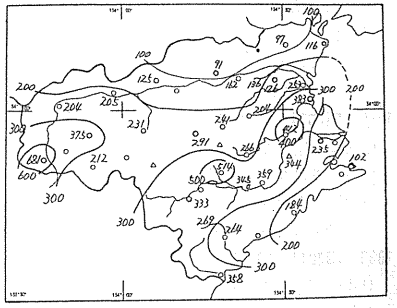
1935　昭和10　6　27～30　前線（大雨）

27日に始まった大雨は29日まで続き多雨域で各日200ミリ前後を観測して遂に洪水警報を出す程であった。（27日上名270　横瀬241　小松島219　28日上名270　沢谷220　29日　出原182）

徳島では29日に124.4ミリを観測したが６月日雨量の大きい方から第５位記録である。

この四日間の合計雨量は図の通り

被害　田畑3500町（内勝浦郡1400　名東麻植は軽微）の水稲，西瓜，甘藷，桑等　死１　傷１　住家半１　非全10　道５　西祖谷山村300坪決　那賀川木材流失300万才，善入寺島　板野郡の低地　川内村等浸水



6.27～30　4日合計雨量

［注］この時は北九州中四国近畿に被害あり（死者147不明９）

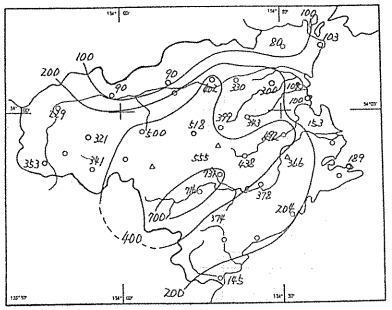
1935　昭和10　8　28　台風

この優勢な台風は28日朝大隅半島東方から15時に宇和島南方に上陸し（中心示度715ミリ）29日朝 神戸方面へ抜け内陸を縦断して岩手県宮古付近から海上へ出たため殆んど全国的な災害を出した。

本県では26日から山地の雨が始まったが28日に200～400ミリの豪雨となり水害を起した（28日　出原446　坂州393　川井298　横瀬293　朴野280）　県内の総雨量は図の通りで那賀川では最近での高水位（古庄5.8m）に達した。

徳島の最低気圧736.1ミリ　SE22.3m

被害　死2　傷1　不3　家全16　半29　流5　浸水6081　橋流10　破18　堤防決25　道39　田畑流失浸水9528町　農作物水稲皆無131町，5割以上減収 958町（最大被害の那賀郡は全体の24%）



8.26～28　3日合計雨量

1935　昭和10　9　25　台風

この台風は豊後水道から25日の3時頃松山をへて鳥取方面え抜けたが関東地方に大雨して死者 計317不明60を出した　本県で雨が始まったのは19日であり其の後連日相当の雨が降り　特に四国を通過中には坂州，出原で日量230ミリに達した。19日からの 全雨量は沢谷552 富岡176池田294徳島201ミリ　このため河川増水して浸水多数を出し道，農作物に被害が多かった　徳島の気圧740.4ミリ　S17.8m

［注］1，此の月は雨天多く25日までに全般的な雨は16日を数えることが出来る　このような悪天候のため本年の水稲反収は174升で稍不作だった（標準値の91%程度）

2，この年北日本で冷害となった，水稲反収北海道78升（5年平均の58%）青森78(49%)

1936　昭和11　（特に1～4）　低温

稀らしく長期に亘り寒候が続いた。雪日数は平年より10日も多く山間地方は積雪で麦作は2割の減収といはれ（東祖谷山村のは5割8分），交通杜絶したところもある。又南部の那賀勝浦両郡ではみかん類の被害は8割3分を占め（186万円）其他の農作物にも大きな被害を出した。

徳島の気温を見ると1月17日の最高気温が0度以下になるという稀な現象があった。

	1月	2	3	4
月平均	2.5	3.4	5.6	12.4
平年より	−2.5	−1.7	−2.4	−1.6
低い順位	1	4	1	6
最低極気温	−5.0	−2.2	−3.4	1.5
低い順位	3	—	2	—

［注］1，麦類の反収は　大麦112課168小麦162で大麦の外は被害軽微である。

2，本年は上記の寒候に引続き5月も平年以下0.9度　7月−0.6　8月−1.0　10月−0.8　11月−0.3等全年的に低温で年平均気温は14.5，平年より1度も低く低温第1位となった

1936　昭和11　6　少雨

中旬は好晴連続し漸やく下旬に入って梅雨空になったが各日共雨量少なく県内総雨量は50～70ミリ徳島の月雨量48.7ミリは少い方の第1位となった。

［注］今年は7月後半から8，9月にかけて甚だ好晴に恵まれたので水稲は豊作（反収218）となり（徳島8月雨量67.7　9月147.7ミリ）特に9月前半の残暑は印象が深かった様である。

1936　昭和11　10　2～3　台風

日本の南方海上を通った台風で徳島以東の太平洋岸は北海道まで被害があった。本県では9.29から降雨が始まり10.2の夜最も強く県南の海岸を除いて150～200ミリを計った。

徳島の気圧742.1ミリ　NW12.8m

被害　堤防133件（55.6万円）橋流34（2.5万円）田畑1758町（7万円）家被害829戸（0.28万円）

1937　昭和12　1～2　暖冬

昭和11年12月からの暖候は此年の3月にまで続き特に最低気温の高いことが注目される

	12	1	2	3	高温順位
平均気温（平年より）	8.8(+1.3)	5.9(+0.9)	6.7(+1.6)	8.6(+0.6)	(12月6　1月10　2月8位)
平均最低気温（平年より）	5.1(+1.5)	3.2(+2.0)	3.5(+2.1)	4.4(+0.7)	(12月6　1月2　2月3位)

尚　2月は平年の倍量程度の多雨であった。

［注］然しその後の天候恢復によって麦作には余りひびいてはいない

1937　昭和12　8　干天

県内山地では100～200ミリの降雨に恵まれたが海岸及び吉野川流域で甚だ少く殆んど50ミリ以下

徳島の24.0ミリは少い方から第5位記録であり日照時数の多いこと（301.9時間）も第5位になる

尚　8月の前半は割に涼冷であったが後半から9月上旬にかけ近年稀な暑夏となった。

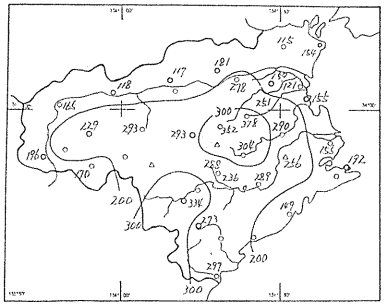
［注］1，この年の干害は関東に大きく東北北海道の一部京都等にも発生した。

2，［大俣村誌］殆んど米収なし

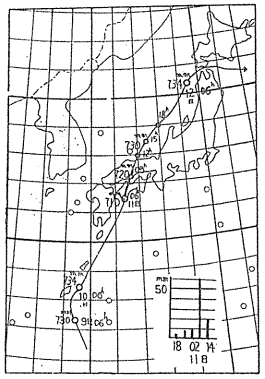
1937　昭和12　9　11　台風

このAクラス台風の経路は図の通りで被害範囲は九州関西、北陸に及んだ（死73　不明11）

本県で雨が始まったのは8日だが大部分の雨は11日の未明に降った。



9.8～10　3日合計雨量



台風径路と徳島の雨量

この大雨で県下河川の増水甚しく吉野川の最高水位は池田で7.27m，第十で6.5那賀川の羽浦町では4.5mだった

風は一時的に甚だ強く徳島でSSE 32.2m（11日08時）を計ったが長続きせず15m以上は6時間に過ぎなかった（径路図中の太線）徳島気圧732.8ミリ

被害　丁度二百二十日の襲来であったため水稲に影響し反収169升（当時の標準値の89%）再に桑，果樹農作物の被害額は277万円である。

人死5　傷25　家全370　半207　流4　床上107　下697　橋16　堤防186　道429ヶ所　船56　損害額623.9万円

1938　昭和13　1　2　地震

0時12分田辺沖に起った浅い地震であったが有感範囲は中部以西の日本の半ばに及び最大震度はⅤ（本県の大部分を含む）壁に割目が入る等の家屋の小破損が出ている尚この地震の余震は　2時33分と24日22時02分に感じた

1938　昭和13　4　1　三野地震

22時40分三野付近を中心として四国の外中国の大部分，和歌山に有感の地震で震度はⅣ（芝生、川井，下分上山池田，和食）Ⅲ徳島，高知，岡山

1938　昭和13　5～6　陰曇（麦凶作）

本年3月の月雨量は平年並だったが　曇天多く18日を算え，尚温暖（月平均気温9.8度は高い方から第6位）で

あった。4月は晴天多く（月合計の日照時数242.7時間は多い方から第5位）順調に経過したが5月に入って又陰曇少照となり6月も少雨に抱らず陰曇だった　尚雨天は7月の初旬に引続いたので麦作に相当悪影響した。

曇天日数　5月 20　6月 19　　日照時数　180（平年の85%）175(100%)

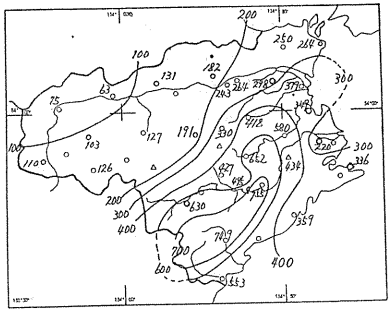
［注］麦反収　大麦125　裸136　小129升（裸，小麦は近年に於ける最低）

1938　昭和13　7　3～5　前線（大雨）［神戸六甲山崩壊］

これは梅雨末期の豪雨として奥羽から近畿までの太平洋岸殊に神戸の六甲山ほう壊によって空前の大災害を起した（死708不明217）本県では6月の連続雨天のあと3日から5日に大降りし山地では2日間に250～300ミリに達した（出原460朴野408ミリ）一方風もかなり強く（徳島で　4日SSE16.1m）　各所で風水害を出した。

1938　昭和13　7.28～8.2　低気圧（大雨）

楊子江南方流域から四国の上を通った低気圧による大雨で通路の四国，近畿東海にかけて災害が出た。県内の雨は28日に始まり那賀川上流では 連日100ミリ以上降り8月1日が最も多く朴野横瀬で 290ミリを計り4日まで降続いた。県南各所で水害を起した。



7.28～8.2　この間の5日雨量

1938　昭和13　7～8　多雨

7月始めに上記のような梅雨末期の大雨があり14日で一応梅雨明けとなった　然し月末再び大雨が始まり8月に入って月初め又大雨し再に7,8,15～22，26～29日と熱帯低気圧性の大雨が続き8月中無雨日は9日程に過ぎず又一方日雨量100ミリ以上を 計った日は7月は3,4,28～31の6日，8月は1，17，18，19，26，27，28日の7日を数える。

月雨量が1000ミリを越えたところは7月出原（1027ミリ）8月桜谷（1389）神野（1320）朴野（1287）等である

8月の雨量分布は図の通りでこれは7月末から8月始めの大雨の分布と非常に似ている。

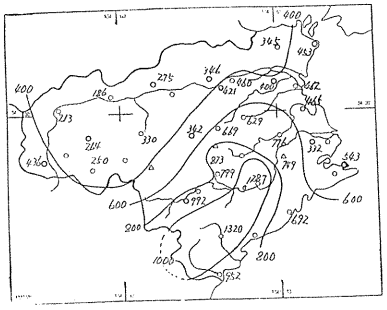
徳島の記録は

7月雨量　328.3ミリ（多い順から9位）

8月〃　584.9（2位）

［注］徳島8月の第1位多雨は明治24年の652.4ミリ。

尚本年7，8月の悪天に引続き下記の9月始めの台風来があって水稲にも多少悪影響した。



昭和13年8月雨量

1938　昭和13　9　5　台風

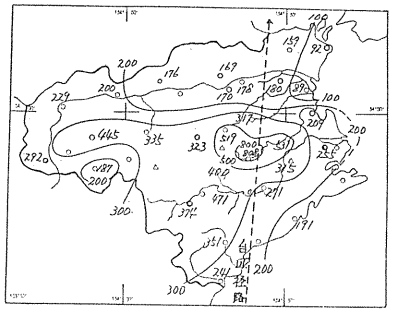
この台風は中心示度715ミリで11時7分頃 牟岐から上陸，徳島のま西を通って13時に北灘に抜けたが四国近畿の被害大きく死者合計81名を出した

徳島の気圧723.6ミリ　ENE29.3m　15m以上は10—14

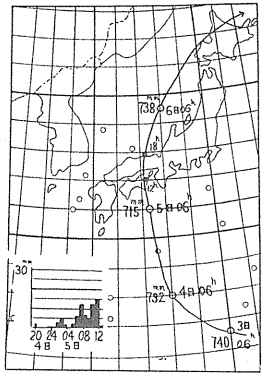
降雨状況　比較的短時間の降雨で終ったが最多の福 原では4，5の両日間に780ミリを計ったと 云はれ其他の日雨量では横瀬394小祖谷322下分上山313 ミリ等がある。これらは殆んど5日昼頃の2時間で大降りしたもので 下記福原の記録は我国でも最大級のものであろう

福　原	10—11時	11—12	12—13	13—14	合　計
5　日	74.0	130.5	138.5	74.2	417.2ミリ

このような降雨で勝浦川鮎喰川は未曽有の大氾らんとなった



9.3～5　3日合計雨量



台風径路と徳島の雨量

被害　今回の雨は短時間の強雨であったことと台風が県内を北上したために阿讃山脈にも大量降雨となった結果鮎喰川勝浦川穴吹川貞光川宮川内谷川佐馬路川等の小河川で山崩れと河川はん乱があり　避難のいとまなく一部落跡かたなく全滅してところもある程で60人の死，不明者を出している　県費関係被害額1950万円

人死44　傷30　不明15　（麻植　美馬　名西　那賀で大）　家全166　半277

流293　床上1145　下4336　道379所　橋流101　堤防43　船26　田畑流200町

［注］1，大雨が局地に限定され平野部の被害は軽微だった。

2，県の統計書による本年土木災害は　死39　傷35　堤防決96118m　海岸堤6645　道71863　橋流306ケ　田5736　畑10004ヘクタール　住家3620　非1869　船64　価格17943.3千円

3，［大俣村誌］大水害食糧不足で村長払下げ米に奔走　［神領村誌］1時頃増水甚しく木材，民家の流れあとを絶えず

1939　昭和14　夏　干ばつ（多照）

西日本近年の大干ばつで6月から8月に至る間各月共平年量より100～200ミリ少なく特に平野部に干害を出し（山地では雷雨によって害をまぬがれた）全国収量は五年平均の10.5%減になった。

徳島県では五月から雨量少なく10月にやっと回復している

	5月	6	7	8	9
雨　量	45.3ミリ	100.3	72.6	39.9	150.5
平年より	−94.9ミリ	−93.9	−126.0	−150.3	−149.5
少い方の順位	4	9	—	9	—

	5月	6	7	8	9
日照時	247	204	266	280	245
平年の	117%117	120	114	145	

尚この間大体低温気味，甚だ多照（9月総日照時数は多い方の第1位）であった幸い本県は吉野川其他の水量豊富な河川があるので他県に比べ水稲は佳作を示し（反収217升標準値の114%程度）陸作物の甘藷では多少の低下を来している。

［注］本年の徳島年総雨量1088ミリは少い方からの順で第2位

1939　昭和14　10　16　台風

台風は16日に九州南端を掠めて東進し九，四国の南部で被害が出た　徳島では15日から雨が始まり16～17日の夜最も強く那賀川下流域を除いて200ミリ内外を計った。従って総雨量は大部分で200～300ミリになっている。

日雨量最大は出原400ミリ横瀬299福原263等

被害　全潰1戸　床上23　下303　橋流18　破2　堤防決1　損1　道10

［注］［木頭村誌］助　大久保地区り

1940　昭和15　低温少雨

少雨は昨年の12月に引続いて全年に及び　平年より多いのは僅かに6月のみでそれも15ミリ程の超過に過ぎなか

った。気温も7，10～12月を除いて平年以下で特に8月の低温は甚しかった。

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気　温	4.0	3.9	7.0	12.3	16.9	21.0	26.1	25.0	22.8	18.1	13.0	8.1	14.9
平年より	−1.0	−1.2	−1.0	−1.7	−0.9	−0.7	+0.4	−2.2	−0.4	+0.6	+0.7	+0.6	−0.6
低い順	10	7	10	5	5	6	—	1	—	—	—	—	3
雨　量	3.4	56.7	85.4	79.8	21.6	209.3	60.5	178.2	82.6	112.1	76.6	21.6	987.8
平年の	8%	91	87	66	15	108	31	94	23	58	83	39	58
少い順位	1	—	—	—	1	—	7	—	4	—	—	—	1

［注］1．徳島の昭14年12月雨量1.3ミリは少い方から第1位である

2．［木頭村誌］雨乞い数回［井内谷村誌］5.10　山火事　3町歩

1940　昭和15　4　3　低気圧(風)

2日朝豊子江南方域から現はれた低気圧は3日朝四国を通って急に発達したため本邦全体に春一番の大風となったが当地方では2日SSE15　3日W20mを観測した。

1940　昭和15　9　11　台風

この台風は四国南方洋上から11日早朝九州に上陸し中国を横断して伊豆沖に出る異常径路をとり九州に被害が大きかった。当地方では10日早朝から雨が始まり11日までが強く木頭では日量224ミリを計った　10～12日の三日合計量では剣山SE斜面で300ミリ内外吉野川上流（高知県内）で500ミリを越えた。風も強かったので農作に影響があった。　徳島気圧749.3ミリ　S24.2m

1941　昭和16　4　8　霜害

珍しく優勢な移動性高気圧772ミリ（1029mb）のものが日本の上空を通ったため気温急降し北海道以南で凍霜害を見た。主なものは桑害　徳島の最低気温は7日朝1.8　8日は　1.7度

1941　昭和16　4　9　低気圧（風）

前記の強い高気圧とその後の低気圧との間で強い風を吹かせた（この低気圧は発達しなかったので東日本に異常なし）　徳島ではSE21.8mに達しこの種の風としては珍らしい強さである

1941　昭和16　6～7　梅雨

6月10日から始まった雨期は7月末まで続き顕著な梅雨になった。この間に雨が全県的に降らなかった日は6月24，30　7月1～3，17位の6日間に過ぎない，殊に7月は熱帯性低気圧の影響を受けることが多くなり25日には200ミリ以上を計ったところもある（桜谷，川井）が一般に小雨が連続したので大きな被害にはならなかった。尚この雨天連続のため7月の気温低下と日照不足が目立つがこの傾向は9月まで続く

	6月	7	8	9
平均気温	21.6	24.4	25.3	21.5
平年より	−0.1	−1.3	−1.9	−1.7
低い方から順位		7	3	3
日照時数	137.2	159.5	215.6	126.0
平年の	79%	72	88	75
少い順位	9	8	−	7

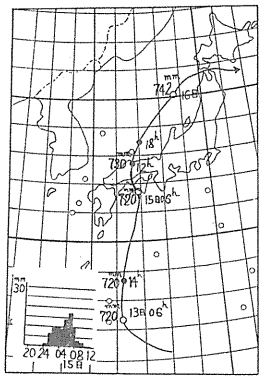
	6	7
雨　量	307.2	212.1
平年の	158%	107
多い方から	8位	—

［注］1，このため8月15日現在の水稲減収率は0.04と云はれたが以後悪天候に患され下記別項のように甚しい凶作になった

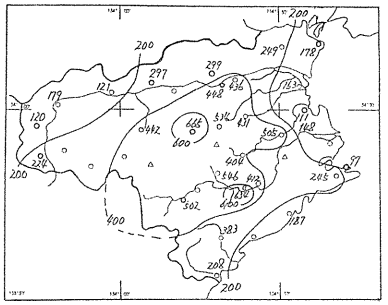
2，尚西日本はこの梅雨水害に見まわれ死100を出した

1941　昭和16　8　15　台風

15日6時室戸の西に上陸（室戸の気圧724.0ミリ）9時頃多度津付近から中国え抜けた（多度津の気圧は724.4ミリだからこの間殆んど衰えていない）沿道で相当な暴風雨害を出した徳島ではSE37.8mを計ったが　これは70年内に観測された第1位の強風である　暴風時間は割に短かかった。（15m以上は左図の太い径路の区間で5～10時の6時間位）　気圧729.9ミリ



台風径路と徳島毎時雨量



8.12～14　3日合計雨量

降雨状況　台風前ぶれの雨は12日から始まり剣山の南北斜面で200ミリ以上降ったが一般には100ミリ以下，13日は全体に100ミリ内外，14日から台風通過の15日朝までに大降りして山地で400ミリを越すところも出た（桜谷423下分上山398横瀬367坂州341）12～14日の合計雨量は上図の通り

被害　豪雨は短時間であったので支流や局地河川が氾乱した程度である

人死3　傷9　家全114　半50　流10　床上浸319　床下4721　橋流破損16　堤防25　道52　船25

1941　昭和16　8～9　凶作（曇雨天）

8月は中旬の台風に引続き下旬の始め又台風の雨があり其の後時々降雨し9月に入って上旬は雨は少なかったが其後台風二個の活動によって度々大雨を見，24日，28～30，10月1日等に県内で日雨量100ミリ以上を観測したこの期間中気圧配置は大体北高型であったため北日本は勿論当地方まで低温に経過した（本年の梅雨の項参照）このため本年の米収は159升となり昭9年以来の不作だった。（当時の標準値の84%程度）

［注］この低温は北日本で−2.0以上に及び近年稀な冷凶で16.4%の減収となった。

1941　昭和16　10　1　台風

この台風は大分を通って米子付近から日本海え抜けた720ミリの大型で沿道の九州四国中国で死者108を出した。本県は稍離れていたので大きな被害はなく　徳島の気圧741ミリ最大風速はSSE33.7m（第3位の強風）雨は28日から始まり各日100ミリ以上を計って10月1日までの四日合計量は雲早，大竜寺山を中心に500ミリ以上，少い区域でも250ミリ程度だった。

吉野川上流（高知県内）は割に雨量は少く那賀川奥地も同様だったのが被害の少なかった原因であろう。

［注］［井内谷村史］大水

1942　昭和17　3　高温

1月2月と稍低温が続いたあと3月に入り急に昇温し月平均気温は10.8度となった。これは70年間の第1位高記録である。

この温暖現象は全国的な規模で起っている。

［注］徳島1月の雨量5.1ミリは少い方から第3位

1942　昭和17　7　干天

梅雨は7月3日で終りあと俄雨のほかまとまって降雨がなく8月4日に及んだ（徳島の無降雨日数は7月5日より8月4日まで31日続く）県内の雨量は80ミリ以下である　このように晴天が続いたため著しく昇温し徳島の月平均気

温27.5度は平年より1.8の高目で第３位の高温となる。尚月雨量46.5ミリは少い方から第３位，日照時数321時間は多い方の第１位である。

［注］この干ばつは全国的な現象で所々で被害を出した。

1942　昭和17　8　27　台風

九州西方近海から長崎県北西部を掠めて日本海え入った 700ミリの優勢な台風のため 26～28日に大雨があり，尚引続き小台風が31日高知付近から高松え抜けているため31日まで雨天が続いた。

前の台風では剣山の東方斜面に多く降り400ミリを越え海岸と北西部で200ミリ以下であった。日雨量最大は28日川井横瀬で300ミリ　　徳島気圧747.1ミリ　SSE28.2m

被害　久しく旱天が続いたため大被害にはならなかった。

家全潰12　半23　浸水13　橋流２　破３　堤防決３　破２　道18　果物1～3割減収

［注］１．この台風は九州で暴風高潮の大災害を出し特に山口県では満潮時と重なって708名の死者を出した

全国被害　死891　傷1438　不明267

２．後の台風の　県内雨量は100ミリ内外である。

1942　昭和17　9　21　台風

21日高知県須崎付近から上陸し多度津から兵庫に出た　710ミリ位の強い台風で 沿道にかなりの被害を出した。

本県では17日から雨が始まり　21日には剣山東斜面の多雨域で400ミリ　総雨量は中央部山岳地帯が500，南北が少く最少の県南海岸が250ミリ程度　徳島の気圧741.8ミリSSE16.7m

被害　雨天が多かったあとの台風雨で　人不明１　家全潰１　床上64　下1184　橋流２　耕地浸水380町

1942～3　昭和17～18　10～4　寒冬

低温傾向は17年の10月から始まり18年では1，2，4月等が甚しかった。

	17年10	11	12	1	2	3	4
平均気温	16.4	11.1	6.4	3.2	3.9	7.4	11.7
平年より	−1.1	−1.2	−1.1	−1.8	−1.8	−0.6	−2.3
低い順位	4	7	8	6	7	—	2

これは少雨多照と結びついている。特に著しいものは雨量で11月29.4ミリは少い方から８位，３月46.6ミリは７位［日照は別記昭18年多照の項参照］

1943　昭和18　3　13～16　山火事

移動性高気圧の内に入って東海以西で諸所山火事を発生したが本県も阿波郡伊沢谷で山林60町歩を焼いた

平均湿度は12日47，13日50，16日55最少湿度13日31　16日21%

1943　昭和18　5　11　火災　　県立工業試験場焼失

1943　昭和18　7　24　台風

台風の裏えたものが愛媛県を北上したため同県下で死者114名を出し其他の 沿道も洪水による大被害があった

死者計211　不明29　本県では雨の割に被害は少なかった　徳島の気圧750.7ミリ　SSE16.7m

本県の雨は台風が南方にある18日から始まり多雨地では20日から100ミリ 以上の日雨量を計り 特に24～25日にかけては400ミリ以上の所あり（24日　坂州355ミリ　日和佐350　福原328　25日　小松島486　椿泊332　福井315）総雨量として最多域の那賀川中流から下流にかけて800ミリ最少域の吉野川流域は300～400ミリだった。

被害　家全潰１　床上46　道６　堤防６　橋流４　田畑浸水4589町　木材流失1500石

1943　昭和18　7　多雨

上記の台風前後に熱帯性低気圧２個による雨もあって７月下旬は連日降雨した。月雨量の多いところは1000ミリを越え（桜谷1287　坂州1273　福原1107　日野谷1010ミリ）　少いところは320ミリで凡その分布は上記の台風雨と同様だった。

［注］徳島の月雨量389.2ミリは多い方から第４位である。

1943　昭和18　9　20　台風

この台風は20日12時頃 宿毛付近に上陸した 700ミリ位の優勢なもので九州中四国の被害は大きく死者768　不明202を出し島根と大分がその大部分を占める。　　徳島の気圧742.1　ESE22.5m

本県では17日の夜から雨が始まり20日の夕方で終ったが 各日とも雨量大きく特に 19日には300ミリを越えたところ（川井，木頭）もあり総雨量は剣山の東斜面で500ミリを越しその周囲の少い各方面は100ミリ以下だった。

被害　不明１　家全潰７　床上22　道５　堤防１　橋流２　田畑浸水2400町

1943　昭和18　多照

年内で平年以下の日照を見た月は僅かに２ヶ月という珍らしい年で結局年合計として第一位多照年になった

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
時間数	199	201	214	229	228	173	193	272	209	173	196	196	2482
平年より	+36時	+47	+33	+34	+17	−1	−28	+27	+40	+7	+33	+35	+279
多照順位	6	2	5	—	—	—	—	—	7	—	6	2	1

1944　昭和19　1～4　低温

昭和18年初の寒冬に引続いて本年も寒冬から始まった

	1月	2	3	4
月平均気温	4.8	4.1	6.4	12.4
低い順	—	9	4	6

1944　昭和19　5　24　火災　　徳島刑務所焼ける

1944　昭和19　9　17　台風

この台風は17日朝九州南部に上陸し松山付近を経て神戸に抜けた720ミリの優勢なものだったため 沿道に被害が多かった。　徳島の気圧736.9ミリSSE24.3m

雨は15日から始まり16日最も多く多雨域で200ミリを越え３日間の総雨量は300ミリに達した　被害量は不明

1944　昭和19　12　7　東南海地震

熊野灘（33.7N　136.2E）の大地震で中心域では震度6　有感範囲は関東北陸から西は四国と中国の東半に及び熊野灘沿岸で津波を伴った（尾鷲６m）

徳島では13時36分05秒発震　震度Ⅳ　日和佐での津波は上げ潮で始まり２mだった　県下被害はなかった

1945　昭和　20初　寒冬（少雨）

昭和18年から引続いて３年に亘る寒冬は本年に入って顕著になった

	12月	1	2		1月		2
平均気温	6.1	2.6	2.4	最低気温の月平均	−0.8（低い順１）		−1.0(1)
低い順	5	2	1	最高気温の月平均	6.7	(2)	6.7(1)

特に２月９日の最低気温−0.6は70年来の第１位低極レコードになる。

尚12，１月共少雨（月雨量16.5及び8.3ミリ）だった

1945　昭和20　6～7　徳島市戦災

大戦末期のたい勢の内昭和19年11月30日に始めて東京空襲があってから次第に 全国各都市に及び徳島市は 6.1から下記の様な連続戦災を被った。

6．1　午前9時10分B29沖洲町末広町空襲　油脂焼夷弾

6．5　午前7時B29津田町　焼夷弾

6.15　吉野本町助任本町鷲匠町伊月町及び富田橋の一部空襲　焼夷弾　全半焼61戸死者４人負傷者40人

6.20　秋田町鷹匠町50キロ爆弾空襲

6.26　住吉島　助任本町　前川町　１トン爆弾空襲　全半壊500戸　死者200人　負傷者199人

7．3　22時過ぎB29　7～8機　徳島市中心部全域焼失　周辺の勝占上八万川内なども一部ら災　中旬より毎日沖洲及び板野郡川内　北島　応神　松茂一帯　艦上機の機銃掃射

7.24　佐古三合，蔵本

7.25　末広町　津田新浜

7.3の被害　全焼戸数16283戸　被災者70295人　被災面積462万m^2（全市の62%）

死者1001（男431　女553　男女不明17）重傷420　軽傷780　不明450

主な焼失建物　［官公署］県庁（⅔）外廊を残す　市庁（本館以外）徳島警察署（本館以外）消防署　徳島駅

税務署　郵便局　貯金局　裁判所　刑務所　専売局及び工場　43聯隊　憲兵隊　聯隊区司令部　蚕糸試験場　工業試験場

［公共施設］県立図書館　武徳殿　徳島公園千秋閣　市民病院　ＮＨＫ（一部）

［小学校］新町　福島　師範付属　八幡南　助任　千松　内町（内部）

［幼稚園］内町　助任　福島　富田　千松

［学校］徳島中学校　高等女学校　市立高女　高工　師範学校

［神社］春日　忌部　護国　金比羅　八幡（下助任）　天神社　通町蛭子　沖洲蛭子

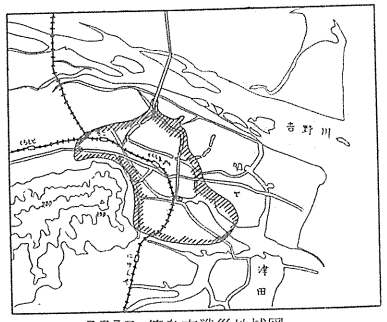
［寺院］寺町は本覚寺の外全部，渭東１　渭北興源寺

［其他］新聞社（毎日，日々）川南造船　徳島工業　福島紡績

鉄道車両約 100　市バス　66台（残ったものは佐古浄水場に疎開してあった木炭車２）　徳バス 61台中６残る

7月3日の空襲状況　午後10時すぎ宍喰監視所から警察部内の警備隊本部へ"阪神の攻撃を終った敵機は南方洋上へ脱出した"との連絡あり。このため警備隊本部では県下に発令していた空襲警報を警戒警報に切り替えた。そのとたんにどこにひそんでいたのか7～8機のB27が空襲警報の解除でうす明るくなった徳島めがけて猛然とエレクトロン，油脂焼夷弾数千発を投下したまっ先に常三島―城山を結ぶ一帯を襲い，ゆうゆうと低空飛行して眉山，佐古山等周辺から廻旋しつつ中心部に爆弾をたたきつけた。

県警察部では死体処理班を作って吉野川南岸の堤防外の河原に死体を集めて野火で焼いた。



7月3日　徳島市戦災地域図

1945　昭和20　8　25　台風

この台風は引続いて九州に上陸した親台風の前駆をした 980ミリバール程度のもので 18時に室戸岬から上陸し本県西部を通り高松に抜けた　県内の雨量は 100～200ミリ程度だったが短時間の強雨であり雨の後SEの強風が数時間続いた。　徳島気圧749.3　SSE22.8m

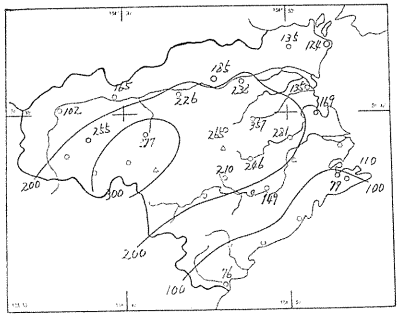
1945　昭和20　9　17　枕崎台風

17日14時40分に鹿児島県枕崎で観測した最低気圧は687.5ミリは従来の最深台風（室戸台風）の684ミリに比べても大差のない超大型台風であり関東中部以西に大被害を出した（死2473 不明1283）

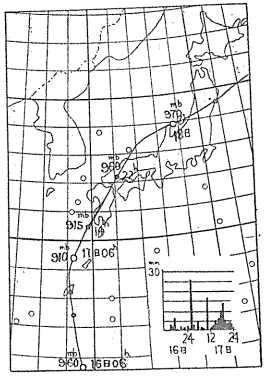
風雨状況

本県では16日のおそくから雨が始まり大体17日で終った

雨量はそれ程でなかったが風は強く且つ長時間に亘ったので被害を増加したものと見られる徳島では17日のひる過からSEの暴風が始まり台風が瀬戸内海へ出た21時過が最も強くSSE29.3mを計ったが日本海へ出た18日１時に北寄風となり以後次第に衰えた。（15m以上は13～1時の13時間と6，7時）最低気圧733.3ミリ　この暴風雨で戦災後の徳島の仮小屋は殆んど倒壊した。尚吉野川は上流高知県の雨量が大きかったので記録的な最大洪水となり池田 9.3（警戒水位6.0）岩津7.6（5.5）新町5.1m（3.5）の水位を記録した。



9.16～17　２日合計雨量

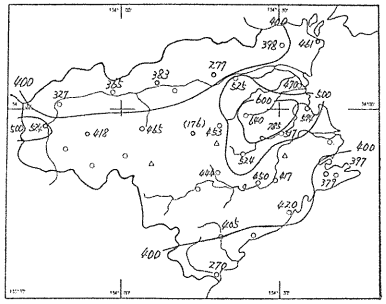


台風径路と徳島毎時雨量

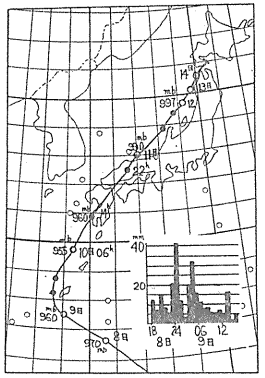
被害　全国的な戦災直後のこととて被害を増大した傾向はあらそえない本県では人死44　傷18　不３　計65　家全1166 半1417 流30 床上1536 下1324 計5982橋流７道32 堤防４ 田畑流12 浸水3275町［山城谷村史］地辷り

1945　昭和20　10　10　阿久根台風

前台風に続いて鹿児島県阿久根町に上陸した大台風で北海道以南に大きな災害を出したが前台風の風害に対し今度のは洪水害が大きかったこれは台風接近前の前線雨が加はったためである（全国の死377 不明147）台風は10日14時22分阿久根に上陸し同地で963.7mbを計り津軽海峡で消滅した徳島の気圧 764.6ミリS16.7m



10.7～10　４日合計雨量



台風径路と徳島毎時雨量

降雨状況　県下の雨は７日から始まったが８日の夜に最も激しく10日夜まで続いた　８日から９日にかけての日雨量は250ミリ内外，尚10日も100ミリを越えたので県内大部分は400ミリ以上となり勝浦川流域に最多雨域が出た。

尚今回は吉野川上流域（高知県内）も 700ミリを越える雨量となり本県で床上３mに及んだところもあり其他県内の河川は殆んど氾らんした。

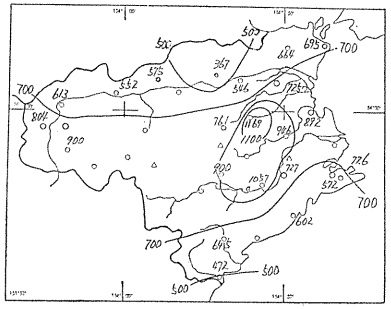
被害　死５　不３　家全43 半22 流６　床上1114 下4521 橋流８ 堤防９ 道161 田畑流160 浸水11664町歩

1945　昭和20　10　大雨

月初め南方海域から北上した台風が５日 朝室戸岬沖でNEに転進し本県では２～５日に雲 早山付近の最多雨域で200～300ミリを計ったがこれに引続いて阿久根台風が豪雨を降らせ尚17～23日にも合計 100ミリ内外の連続雨がある等で今月の雨量は図の通りに鬼籠野　桜谷では1000ミリを越える有様となった。

徳島では 725ミリだったがこれは10月雨量としては第１位多量で平年値192ミリの3.8倍に当たる

［注］徳島で本年内に平年以上の降雨を見たのは2，6～10月等で結局年総雨量2423ミリは多い方から第４位になる。



昭和20年10月雨量

1945　昭和20　凶作

年初からの低温が６月を除いて８月まで続きその後猛烈な台風の影響を受けること二回，且つ６～10月の多雨であった不率は戦争終結前後の人心の動揺人手不足作業不備に加はって戦前戦後を通じて空前の一大不作を出現し国民を飢餓線上に追いやることになった。

本県の水稲反収は86升で平年値の½にも及ばない（標準値の47%程度）

［注］この冷害は北海道，東北（山形を除く）関東北陸長野岐阜等に甚しく北海道の反収6.9斗（５年平均の44%）青森8.1（47%）

1945　昭和20　低温　多雨　多照

年初の寒冬から春夏に低温が続き又秋には大型台風の連続と多雨のために　上記のような大凶作になったが結局年平均気温は14.5度で平年より１度も低く昭和11年と同じ低極第１位となった。日照は反対に多い方だった。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気　温	2.6	2.4	7.7	13.1	15.9	21.7	24.4	26.8	23.3	17.8	12.3	6.4	14.5
平年より	−2.4	−2.7	−0.2	−0.1	−1.6	+0.2	−1.1	+0.3	+0.3	+0.4	0	−1.1	−0.8
雨　量	8	79	53	69	145	298	256	214	449	725	83	45	2423
平年の	19%	125	54	54	104	150	130	116	154	376	89	83	144
日　照	199	175	200	250	226	192	239	268	166	155	201	186	2418
平年の	122%	113	110	128	107	110	108	106	99	93	123	115	112

上表で1，2月の平均気温は低い順で2，1位，又１月雨量は少い順で５位，10月は第１位多雨尚日照は多い順で１月５位　4，11月，年計は夫々第３位である。

1946　昭和21　麦不作

梅雨は６月15日から殆んど連日で７月９日に及んだ雨量としてはそれ程大きなもので無かったが日照は甚だ不足し特に６月の125時間は少い方から第７位の記録であるこれより以前の月々はそれ程異常天候と云えるものはなかったから麦大不作の原因には終戦第一年の混乱の悪影響が大きいと考えられる　徳島の反収は大麦67升　裸麦83　小麦80（平年値の50%程度）

［注］梅雨あけから下記の台風来まで好晴が続いた

1946　昭和21　7　29　台風

29日の夕方豊後水道を北上し米子に抜けた960mb程度のものだったが短時間の強雨と強風とで災害を起した。

徳島742.2ミリSE25.4m総雨量163ミリ県内の大部分が300ミリ以上を計り東海岸と北西隅で少なかった。

日雨量最大は横瀬405　小祖谷387　木頭360ミリ

被害　人死1　不明1　家全32　半25　流3　床上345　下862　道決17　橋流5　浸水田2756　畑155

1946　昭和21　12　21　南海道大地震（津波）

４時19分頃潮岬の南50キロ位の処(135.6E　33.0N)に起った大地震（最大震度Ⅵ）津波によって中部より九州までに被害を出し死者1362全潰家11506戸，余震も驚くほどの多数に上った尚震後地盤変動が発見され四国では室戸岬等の最南端部が隆起した外全般的に沈降した［別項昭和25年地盤沈下の項参照］

本県では海岸の震度Ⅴ（著しい水平動で外に出ても立って居られない程，又地割れや建物の被害が出た）内陸はⅣ　又余震は月内に有感55無感230回程が観測された。

津浪状況　津波第一波の到着時間は計算で出したもの（第１図）と大体あっているが多少早目に来た傾向がある（以下は現地の話）

橘町　津波が来るまで30分位の間があった。大風のようなゴーゴーとい音がして潮が押し寄せた前面が泡立ち１〜2尺の高さのものが後から後からと続いた１回目のは石垣を越すか越さぬ程度，20分程して第2波が又大風のような音を立て真黒な泥波で一番高く学校も浸水した。あとは30分位の間隔で５回繰返した。津波の高さ3.4m位

日和佐町　地震後2.30分で津波が来た30分間隔で４回目のが最も大きかった（三回目とした話もある）波高３m

牟岐町　潮が上げるのに20分，引くのに20分程掛り９時頃には終った。役場付近の家は大破し大きな船が４雙堤の上に乗上げた。潮が街中に氾らんしたのは一回きり，波高4.5mだった。

浅川村　伊勢田川橋（コンクリート製）は中央から東部が25cm川上にずれ，水面上3.9mの欄干を越えた津波は4.7mの高さであった，部落は殆んど浸水した。震後10分程して津波がダブダブと押し寄せた３回目が最も大きく沖合の出漁船は４Km位の巨離の進退を繰返したそうである。

宍喰町　震後10分位に津波の第１波が来た10分位おきに夜明までに９回来て大きいのは５回最大は３回目だった波高4.5m

上記の波高を図にしたものは第２図である。

被害	人 死	人 (不明)	人 傷	住家 流失	住家 全壊	住家 半壊	住家 床上	住家 床下	堤防決	道決	橋流	船流	田流	畑浸水	木材流石
徳島市	2		5		23	22			1			3		60	500
名東郡	1				6	8									
小松島市	1		3	2	6	10	96	248	3	1	2	11		431	430
那賀郡	6		27	25	47	118	1844	174	3	12	6	83		954	1680
海部郡 三岐田	8		16	71	52	198	488	144	11		2	36		12	
海部郡 日和佐	1		1		5	7	28	58	3		1	4		30	
海部郡 牟岐	53		40	121	154	199	755	235		1		78	16	67	2930
海部郡 浅川	85		80	185	161	169	85	15	4			80	62	23	
海部郡 宍喰	9		58	9	10	107	97	155	7	3		35		96	120000
海部郡 鞆奥							42	38	1						1000
名西郡	4		1		8	6			4						
板野郡	15		6		77	31			2					48	
阿波郡	1		2		6	3									
麻植郡	3		3		7	10									
美馬郡	11		15		33	20									
三好郡					3	3									
※合計	202		258	413	602	914	3440	1057	40	21	11	330	78	1734町	—

［注］※合計には海部郡の上記以外の地点を含む

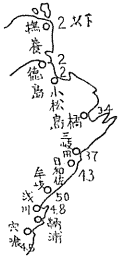
発光現象其他　この地震では和歌山等でも地震の折に発光現象を見たが本県でも所々に記録がある（徳島　三岐田　日和佐）又西牟岐では１週間位前から井戸水の低下した家もあった

日和佐町恵比須浜では震後井戸が多少濁り減水した由

浅川の津波記念碑（昭和31年12月浅川天神前道路傍に建てられたもの）

昭和21年12月21日午前４時19分の満潮時東経135度6分，北緯33度潮岬南々西約50キロの海底を震源とする大地震あり大地鳴動数分に及べり震後10分余りにして津波襲来第１波の極点４時40分波高９尺第２波５時12尺第３波５時20分11尺を記録す死者85人　傷者80人　住家流失185戸　全壊161戸　半壊169戸　特に東町新屋敷太田方面は殆んど流失　全滅の状態となる　其他船舶漁具家財及農作物の流失被害は計り知れず，当時復旧を思う者なし時終戦後の物資不足の折多面に援助を受く　茲に銘を記し記念とす。

第１図　津波到着時間（計算値）と震度



第２図　津波の高さ(m)

1947　昭和22　低温　少雨　多照

本年は極めて特徴のある年で徳島で下表のように多くの記録を作った。

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温	5.6	3.0	6.7	12.3	16.3	20.5	25.9	27.0	23.7	16.3	10.6	6.1	14.5
平年差	+0.6	−2.1	−1.3	−1.7	−1.5	−1.2	+0.2	−0.2	+0.5	−1.2	−1.7	−1.4	−1.0
低い順	—	2	7	5	2	2	—	—	—	3	3	5	1
雨　量	113ミリ	39	51	47	153	90	295	10	91	179	19	51	1138
平年比	263%	63	52	39	109	46	148	5	30	93	20	93	※67
少い順	×	—	10	2	×	6	×	2	6	—	3	—	3
日　照	126時	199	185	265	219	181	259	312	173	181	202	153	2456

平年比	77	129	102	136	104	104	117	127	102	109	124	95	112
多い順	×	4	—	1	—	—	—	2	—	—	2	×	4

［注］1．（4月22，3日の霜害）徳島でも23日の最低気温は2.1度だったから県内で桑，馬鈴薯等に多少の被害が出たものと思はれる。

2．（夏期干ばつ）7月下旬から9月上旬に至に少雨は特に海岸で干ばつとなり8月合計雨量（10ミリ以内のところ）は　日和佐0.1　宍喰4.6　椿泊8.3　鳴門3.3　板西6.1 鴨島7.3 等であり徳島も10.4ミリだった尚9月雨量もかなり少なかったが水稲は全体として干害を出す程ではなかった（反収200升並良）

尚関東以西の処々でも干害となり宮崎では特に激しかった。

1947　昭和22　3　25　火災　鴨島町

16～21時に150戸を焼き損害3000万円と云はれたが，これは近年の大火である。

1948～49　昭和23～24　12～2月　暖冬

この暖冬は下表のように12月が最も顕著で70年中の1位を占めるが月内に最高気温が20度を越す日は21，26日の2日あった　この暖冬の結果麦類の徒長，漁業不振等を招いた。

	12月	1	2
平均気温	9.8	5.9	6.9
平年より	+2.3	+0.9	+1.8
高い順位	1	10	6

［注］この暖冬はこれから後10年を越す暖候の皮切りとなったもので全国的な規模で起っている。東京でも明治8年以来の高記録を出した。原因は日本へ冬をもたらす北極寒気がシベリアに停滞する暖気団に防げられてまっすぐ日本に向かえず大部分は北米へ南下したためで同地は非常な寒さに見舞はれた由

1949　昭和24　3～4月　寒春

上記の暖冬に引続く寒春は4月に特に顕著に現れた。従って麦作には可成り悪い成績となった　反収大麦101

	3	4
平均気温	6.9	11.4
平年より	−1.1（低い順9位）	−2.6(1)

1949　昭和24　6　21　台風デラ（2号）

時期的にも早いものであり且つ青葉丸の沈没事故［注1］を引起したことで有名な台風　沖縄付近で960mbの最深示度に発達してから図のように北上した。この台風の接近前本邦の南方洋上にあった梅雨前線が15日から北上して太平洋岸に雨を降らせこれに引続いて台風襲来となったため北陸から東北の日本海側，北海道を除いた各地で大きな被害となり死202不明216を出した。

徳島の最低気圧　745.9㎜S22.6m

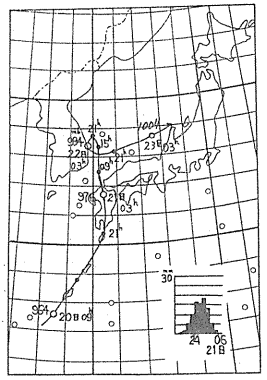
風雨状況　15日から16日にかけて梅雨前線の活動による雨は60～100ミリ，次いで18日から19日は台風の前ぶれで各日100ミリを越えたところが多く20日から21日朝までの台風直接の雨は100ミリ内外だった（18日宍喰260　19日椿泊300　20日鬼籠野217ミリ）

風は台風が大分の西にくるまで弱くその後山口県沖合に出るまでが強い（上図太径路区間が徳島15m以上）

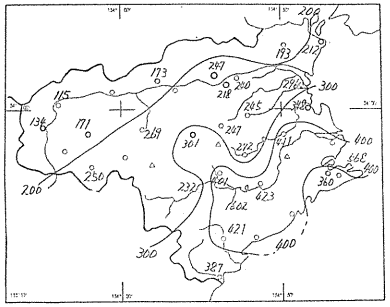
被害　人死4　不明6　家全35　半21　流4　床上710　下2358　田流埋884　畑2718　田冠水9584　畑6774　道324　橋44　堤防166　山くずれ31

［注］1，20日21時高浜港を出発した川崎汽船門司高浜航路の定期旅客船青葉丸（599㌧）は船員48客93名を乗せ　21日03時頃大分県姫島東方10マイルの海上で沈没し助かったものは僅かに3名に過ぎなかった。

2，今月徳島の雨量464ミリは多い方から第1位である。



徳島毎時雨量



6.18～20　3日合計雨量

1949　昭和24　7　30　大雨（台風ヘスター）

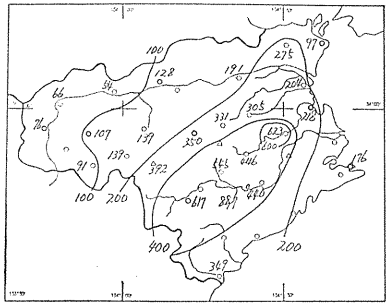
三重県に上陸した最低示度980mbの弱い台風で30日若狭湾に入って消滅したがその名残りでこの夜大雨となった県内大部では100ミリ以下の雨で終ったが岩倉で236ミリを計り半田町付近に集中大雨して下記のような被害を出した。人死10　傷12　不2　家全11　半23　流15　全焼1　床上216　下767　田流埋219　冠水531　道55　橋36　堤防65　山崩27　鉄道13　通信10　船流7

1949　昭和24　8　16～18　台風ジュディス（9号）

デラ台風と似た経路をとって15日九州南部に上陸し長崎を抜けた960mbの台風で当地では風は余り吹かなかったが（SE14m）16日以降の雨は強く日雨量最大は15日木頭150　16日桜谷475　17日横瀬411　18日日野谷270ミリ等で那賀川上流では図のように600ミリを越えた。

被害　不明1名　家全1　半5　床上1212　下1674

田流埋253　冠水3105　道55　橋流24　堤防20



8.15～18のうち3日合計雨量

1949　昭和24　11　23　風雨

台風アレン（22号）はかなり南方海上を通ったので県内で50ミリ内外の雨があり風も大したもので無かったが次のような被害が報告されている

不明3人　床下浸水20　橋流5　船流3

1949～50　昭和24～25　12～5　温暖

暖冬の第2年目は次の通り

	12月	1	2	3	4	5
平均気温（平年差）	8.1(+0.8)	6.7(+1.8)	5.8(+0.8)	8.1(+0.3)	14.4(+1.0)	18.8(+1.1)

2，3月は左程でなかったが1，4月は高い方から夫々第5位5月は第4位であった。特に1月中旬から2月の上旬にかけての平均は7.2度で平年より2 6度の高目となり1月28日に観測した最高気温21.5は1月として第1位の高極気温である。温暖は同時に多雨と結びつき特に1月雨量133ミリは第1位多量の記録となる

［注］上記の暖かさに加え5，6月陰曇多雨であったため麦作は近年第一の不良となっている

1950　昭和25　1　30　低気圧（風雨）

30日の朝黄海南部に出て来た低気圧は日本海岸沿いに北海道に進み31日の内に24mbも発達する珍らしい荒れ方で徳島でS17.4mに達し日雨量86ミリの第1位記録を立てた。　この時の被害は　人不明2　家全2　田畑流埋1　冠水103　道3　橋4　山崩3

1950　昭和25　3　13　火災　徳島市憲法記念館焼ける

1950　昭和25　4　16　山火事

数日来乾燥続きの折柄16日県内各所で火災発生したが特に牟岐町の山火事は17日11時頃漸く鎮火したもので民有林500町歩を焼いた（1500万円）

1950　昭和25　5　2～3　低気圧（大雨）

弱低気圧が九州に接近し関東沖の高気圧から吹出しのＥＳＥ風は2日の夜から3日午前に15.6mに達し又雨も那賀川中流で局地的に400ミリを越える等で多少の被害を出した。

水死1　床下5　道11　橋2　麦田浸水倒伏4200町　減収1万石

1950　昭和25　5　13　うねり

台風ドリスが28N139E付近を北東に進行中（13日15時）海部郡阿部港に押寄せた3～4mの高波で小型漁船7隻沈大破9其他40の被害がある

［注］　台風ドリスは12日9時に転向し午後沖ノ鳥島付近からNE進14日0時に鳥島の東を通過した

1950　昭和25　5　27　低気圧（大雨）

太平洋岸沿いに進んだ低気圧による豪雨は椿泊―川上の線で250ミリ程度になり水害を出した　家全13　半3（以上橘町）床上26　下126　田流埋11　冠水540　道17　橋5　堤防7　山崩5　鉄道1（牟岐線）

1950　昭和25　6　4　ひょう

日和佐牟岐方面に珍らしい降ひょうがあり野菜甘藷等に被害が出た　煙草は日和佐赤河内各2町歩牟岐1町歩全滅

した（150万円）

1950　昭和25　7　21　台風グレイス（8号）

この台風は20～21日に九州西方を北上し那賀川上流域で17～21日の５日間に600ミリ以上の大雨を降らせ被害を出したが一般には少雨（100ミリ程度）であった。徳島の最低気圧753ミリSE19.3m木頭雨量18日105　19日94　20日225　21日218ミリ　被害　道路　山崩　橋流等81万円

1950　昭和25　7　27　台風ヘリーン（9号）

この台風は九州南西海上に接近してぐづつき其後西に移動した変り種で雲早連山の多雨地帯で150ミリ以上の日雨量を見，山間部で道路山崩等多少の被害があった。徳島気圧989mb　ESE21.1m　川井27日177ミリ
被害　田畑冠水15町（阿波郡八幡町）煙草３反倒伏（美馬郡三島村）道３ヶ所

1950　昭和25　8　6　熱低（13号）

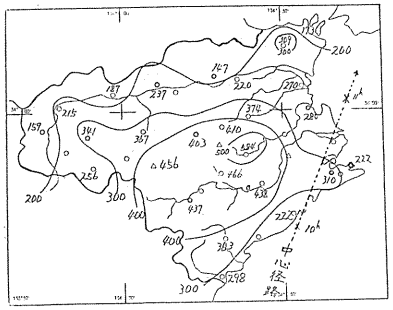
７月から８月にかけて例年よりはるかに高緯度で多数の熱帯低気圧が群発した。特に８月中に18ケの発生が見られるこの内の一つが６日室戸岬の西から四国に上陸し日本海へ抜けた折本県に大雨を降らせた．７日10時に計った日雨量は最多雨地川井で434ミリ　其他川上307 鬼籠野296 市場273ミリと県の中央部の南北に多く東西に減少し100ミリ以下となる。このため阿波麻植の被害が大きく那賀川も増水したが吉野川本流は大して影響なかった
被害　人不明１　傷３　家全８　半７　床上250　下1567　田畑流埋71 冠水827 道56 橋流８　堤防10 山崩10

1950　昭和25　8　20　熱低（24号）

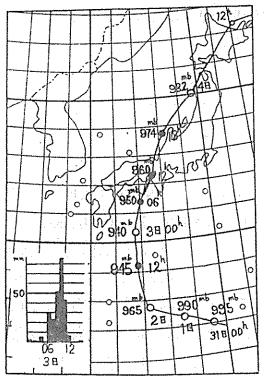
19日から20日に四国中部を北上した熱低は県内中央部の多雨地で100ミリ程度の雨を降らせ少被害を出した
死１　堤防１　船沈１

1950　昭和25　9　3　台風ジェーン（28号）

Bクラスの台風であったが大阪湾に高潮を起こす最悪コースをとって阪神地区に大被害を出した。
（死398　不明141）
風雨状況　31日から前線雨が降っていたが殆んどは台風通過の３日に集中し徳島では10～11時に86.9ミリの記録的な強雨があり同時にNNW29.2mを観測した。尚15m以上の暴風はこの前後５時間に過ぎなかった。
徳島の最低気圧969.6mb(10時47分) 1～3日の合計雨量は図の通りで雲早山周辺に最大雨域が出ている この雨は徳島と同様に台風中心通過時の３日 09～12時に集中し数十年に見ない強雨であった由で日雨量は２日福原 382 川井321鬼籠野297下分上山293一宇及小祖谷280　３日桜谷291日野谷282ミリ
河川状況　吉野川は上流雨量が少なかったが最高水位は池田５m　脇町8.2　新町3.95m　鮎喰川は大氾らん
那賀川　上流の大雨で稀な高水位となった　宮浜18.5 古庄6.2 富岡4.1 豊益4.95m　桑野川も同様に氾らんした
被害　土木24.543（億単位）農地農業施設20.618　農産物13.3687（水稲減19万石）
水産　漁船は北灘と浅川が遭難多く3635トン　資材413349貫
林産　林道264km　山林1039町　木材10.75万石　其他計10.457億
外に民間事業場83件其他で合計85億となり官有施設を加えて100億円の台になる由
人死28　傷282　不10　家全451　半2138　流85　床上7626　下35123　非住家885　田畑流埋931　冠水13638　道536　橋127　堤225　山崩45　通信線42　電柱326　船流61　破303　その他42



9.1～3　3日合計雨量

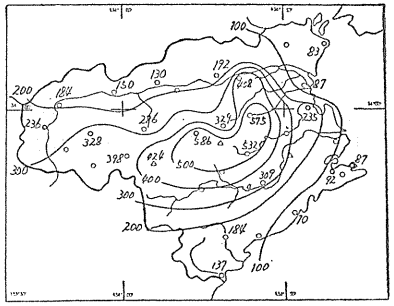

徳島毎時雨量

内訳	死	不明	軽傷	全潰	半潰	流失	床上	床下
徳島	7	6	11	11戸	30	3	2414	18958
鳴門	2		10	19	78	1	467	3169
名東			51	19	44		357	1090
勝浦	5	1	68	76	596	40	1840	3555
名西			8	17	65	3	63	191
那賀	2	3	68	101	537	28	1564	3825
海部	1		8	22	153		212	598
板野	2		38	120	343	5	568	1313
阿波	3		15	32	130		41	1099
麻植				19	87		33	664
美馬	4		4	10	46	5	29	361
三好	2		1	5	29		38	300
計	28	10	282	451	2138	85	7626	35123

水稲被害　16950町は全体の60.3%　甘藷3032町　雑穀2909　蔬菜1070　果樹1341
高潮　湾奥の大阪市では2.6mだが徳島県下では大体1.5m（豊益検潮所では1.25m）　このため本県の海岸で護岸の欠潰，水田の潮入り等多数に上った。範囲は日和佐より北の海岸（この範囲は第二室戸台風と非常に似る）

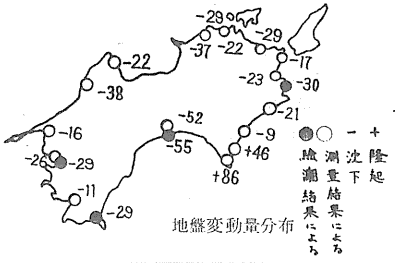
1950　昭和25　9　13　台風キジア（29号）

ジェーン台風の稍南方に発生し13日九州内陸を縦断して日本海に抜けた。最低気圧945ミリ，九州通過中は960ミリだった。　徳島1000mb，SF24.7m
風雨状況　300km以上西方を通ったにかかわらず強いSE風を長時間吹かせた
15m以上は13日08時～14日07時の24時間
又このSE風は本県の山岳地帯に大雨を伴ない24時間最大雨量は14日鬼籠野378ミリ　川井342　13日福原　339ミリ等，尚12～14日の総計は図の通りである。
被害　吉野川上流の雨量も多く県内各河川凡て警戒水位を突破し水害を発生した。一方時期的にも最も海水面の高い折から二日間に５回の高潮の浸入した所があった。
人死４　傷24　不１（罹災者総数40579）家全40　流２　半168　浸水8434　流埋田66　畑245　冠水田3633　畑1831　道148　橋44　堤防19　木材流4700石　船5535隻
［注］１，本月は上，中旬両度の台風によって県内の日雨量100ミリ以上となった日は2，3，12，13，15等であり最多雨地の月量は1000ミリを越えた。（桜谷1412　福原1415　鬼籠野1165　川井1100　日野谷1027）　一方海岸及吉野川流域は400～500ミリだった。
２，上記のように多数の台風に見舞はれたので本年の水稲収量はかなり悪くなり反収172升（標準値の93%程度）


9.12～14　3日合計雨量

1950　昭和25　地盤沈下

昭和21年々末の南海道大地震によって発生した四国の地盤沈下（南端の室戸岬のみは反対に隆起）は地震後除々に進行し25年の前に終った模様であるが本県については昭和23年に大部分が，24年に残りが完了したらしく小松島検潮記録はその後大きな変動は見られない
四国四県の被害額は840億位で 高知が最も大きく60%愛媛之につぎ24%香川，徳島は同率８%で最少である
国土地理院が県内の一二等水準点の測量成果から出し



地盤変動量分布

た県東部の沈下量は30cm±3cm位である。［尚特に海岸で顕著な沈下（多くは40～90cm）を伝えるところは地盤の軟弱なために構築物の重さによる沈下部分が多いのではないかと見る専門家もある］地盤沈下のために引起された被害は人家農地塩田護岸港湾と非常に広い範囲に亘るが大規模にかさ上げした田地は次の通り

	松茂	徳長	牛屋島	徳島住吉	小松島金磯新田	坂野	今津	橘南新田	浅川
客土	40cm			30～35		30			

1951　昭和26　2　14　大雪

所謂台湾坊主の通過による太平洋岸の大雪で本県では14日9時頃低気圧が豊後水道沖に接近した時から始まり伊豆沖に進んだ22時頃に終った。県内最大積雪は鬼籠野56cm其他市場池田大枝等が30cm以上，尚日和佐も2cmを見たが宍喰には積らなかった。徳島の29cmは第4位の記録である　この雪で交通通信送電関係に被害が出た。

1951　昭和26　7　1　台風ケイト（6号）

7月1日の夜中に四国をSWからNEに縦走した小型台風で降雨期間も短かく大きな被害にはならなかった　上陸前の示度は975mb，徳島の気圧991.1mb，ESE21.9m　雨量は最多の那賀流域で250ミリ以上　大枝で210ミリ少雨域は吉野川流域で50ミリ内外だった（これらは一日雨量である）徳島59ミリ

被害　家全1　床上30　下36　田流377　浸水5475　畑流598　浸水1093　道291　橋22　堤防94　船流沈10　護岸7　果樹風害8.8町　煙草冠水2260　桑冠水2111

1951　昭和26　6～7　梅雨

6月14日以降降雨頻繁となり27日より7月17日の間約20日間は殆んど毎日の様に雨が降った。県内の雨量は600～400ミリ，この間に100ミリ以上の日は6月28日　7月1日（ケイト台風）8，10，12日等である　このように連続雨に一時的な大雨が加わって本州中部以西に水害を発生した（死者計162不明144）本県関係は次の通り

被害　人傷3　家全潰2　床上27　田流埋392　畑冠水65　道3　山崩5

1951　昭和26　7下～8中　干ばつ

梅雨があけて俄に夏型気配置となり8月中頃まで連日晴天が続いた（8月に入って盛んに雷雨が発生）

このため炎熱干ばつに苦しみ農作に被害を出した。

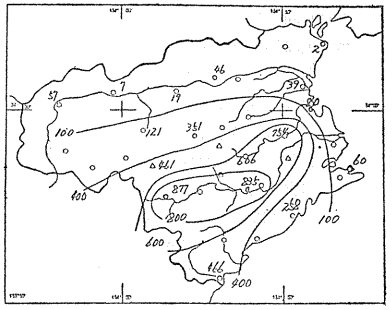
［注］この干害は北海道，北陸を除く全国的なものである

1951　昭和26　8　19～22　台風マージ（11号）

沖縄から東支那海に入った大型台風であったため本県もその勢力範囲に入って16日から降雨連続し特に19～22日那賀川流域の多雨帯で各日100ミリ以上の大雨があり　水害を出した。19日　桜谷164　木頭150　20日桜谷178　福原172　21日　木頭260　桜谷228　22日　木頭209　桜谷190等

このため最多雨地では図のように　800ミリを越えたが長期に亘ったので被害は少なかった

被害　家半潰7　田冠水252　道2　堤1



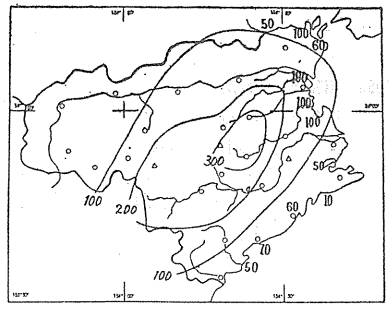
8.16～22　7日合計雨量

1951　昭和26　9　低温

雨量は平年の½程度であったが割に曇雨天多く日照も少な目で平均気温は平年より1.8度低目の21.4となった　この値は過去70年中で明32につぐ第2位の低記録である（最低気温の月平均値18.0も同様に第2位記録となる）

1951　昭和26　10　14～15　台風ルース（15号）

14日から15日の夜に鹿児島から広島を抜けた大型台風で北海道関東を除いた地方で被害があった　死者572　不明371　風雨状況　14日早朝から雨が始まり台風が九州に上陸してから弱まって霙雨性となったが風はその反対にこの頃から強く真夜中前後に最強風になった。徳島の最低気圧978mb



ルース台風の雨量と浸水高（cm）

SE27.9m　県内の降雨分布は上図の通りに雲早山系で300ミリを越えその外周に減少している。割に短時間の降雨のことで各河川は大体警戒水位内に止った。

高潮　この台風の被害の主なものは高潮で起っている小松島の高潮偏差最大は61cmで中心が丁度日本海え出た頃の15日3時過だった。県内の浸水高は上図に記入の通り最大は1m位だった。

強風　尚この台風では三好郡の山狭地帯，特に山城谷，祖谷等で近年稀れな突風があって住家の倒壊人の死傷等を出した。

被害　死10　傷85　家全潰350　半1390　床上468　下3706　流3　道187ヶ　橋52　堤防120　田流100町　浸水4398　畑170及357　船310　三好郡（山城谷　死2　傷10　三縄　死1　西祖谷山　傷3　全壊山城谷27　三縄27　東祖谷山7　西祖谷山20　三名6　佐馬路9　三庄5　箸蔵4　三野1）

1952　昭和27　3　19　低気圧（風）

18日東支那海で発生した低気圧が急速に発達しながら日本海をNEに進み又太平洋側にも副低を発生したので徳島地方のSE風は20.2mとなり3月としては第1位の記録を作った。

1952　昭和27　3　22　低気圧［福井村豪雨］

この日北方から東支那海に伸びる気圧の谷で低気圧が急速に発達し21時に本県南部に到着したがこの時県南海岸特に那賀郡福井で雷雨に伴う記録的な強雨があり　水害を発生した　然しこの地方を除いて大雨はなく県の北半は50ミリ以下だった。　徳島41ミリESE12m

福井の時間雨量	15時	16	17	18	19	20	21	22	23	24	計
	5.7	3.7	12.6	3.5	6.2	4.5	72.9	160.2	6.7	0.5	276.5ミリ

（最大をとると60分に167.2ミリ）　この一時間強雨は日本としては第一級のものである（昭和32年7月25日夜の諏早の大雨の時の最大時間雨量は144ミリ）

被害　死6　傷2　家全3　半18　床上305　下130　橋流16　堤320m　道16　田畑流75町　農作被害200町　山崩3　（4300万円以上）

［注］気象台等の一時間雨量記録は　1足摺150　2銚子140　3宮崎134　徳島87

1952　昭和27　3～7　多雨

徳島の雨量を平年と比べると

	3	4	5	6	7月
本　年	144.6	312.1	179.1	340.5	275.5ミリ
平年比	150%	258	135	176	140

上表のように各月引続いて多雨で　特に4月の雨量は70年内の第1位記録となった。これは又この期間中曇雨天日数の多いこと及び日照の少いことと関係があり（例えば4月日照は少い方からの順位が6位，5月は7位等）麦類の収獲も悪い方であった。

1952　昭和27　6　23　台風ダイナ（2号）

23日中に沖縄から潮岬のすぐ南方を通過した台風で本県はその北側にかなり離れていたため大きな被害にはならなかったが県内では100～200ミリの短時間降雨があり徳島では時間雨量55.8ミリの6月第1位記録を作った。（尚日雨量205.1は6月としては明治32年に次ぐ第2位となる）

被害　死1　傷5　全壊2　半6　床上27　下3243　田畑流埋4と7町　冠水5220と980　道20　橋6　堤防7　山崩22　船流2

1953　昭和28　2　21　大雪

2月20日夕刻沖縄諸島南方で発生した低気圧が21日四国沖を通る時山陰沖にも副低気圧を発生し本県では未明から雪となり夕刻まで続いた。山地の多雪地で30cm位，平地でも10cm程度となった。最近では昭和26年以来である（徳島最深9cm，切越川井32穴吹池田桜谷鬼籠野岩倉は20cm以上）このため通信交通に若干の被害を見た

［注］尚本年は3月28日にも県内全般に降雪があり徳島では2cmだったがこれ程おそくに積雪したことは珍らしい記録である。

1953　昭和28　4下旬　火災

4月17日から28日の間12日間は殆んど降雨なく特に21～25日は著しく乾燥し23日の最小湿度25%，24日は29%と下ったので県内で火災を頻発した。

1953　昭和28　5～6　はしか　流行

1953　昭和28　6　7　台風（2号）

この台風は九州西岸中央から瀬戸内を通ったもので本県では7日昼過から短時間風雨が強くなり徳島の最強風はSE23.9m県内の雨量は100ミリ内外で大きな被害にはならなかった（最大は谷路132ミリ）

被害　全壊1　半2　田冠水4　堤3

1953　昭和28　7　17～21　前線（大雨）［和歌山大水害］

21日頃まで梅雨前線停滞の悪天が続き全国的な水害になったが特に17～18日和歌山県下で記録的な豪雨（1日に400ミリ以上）による大災害を発生し死者639 不明376を出した。幸い本県では被害軽微にすんだが雨の多かったのは17，8日と20日で多雨域で夫々100ミリを越え，（後者では吉野川上流域で多雨）かなり出水した。

被害　全壊1　半3　田冠水733　畑5　道3　山崩6

［注］尚6月24日から29日にかけて北九州中国は大水害となり　死者749　不明265を出した。

1953　昭和28　8下旬　異常気温

7月23日から割合雨の少い天気が続いたが　8月下旬前半に著しく昇温し徳島で24日最高気温37.0を計った　これは8月として第1位の高温であり（これ以上のものは7月の37.1で大3.7.18，大4.7.14）ついでオーツク海高気圧が強くなり25日頃から急に涼しく29日の最高気温は22.7に降った（この温度は珍らしい低さで8月としては記録的である）

［注］8月から9月にかけ東日本（特に北海道奥羽北関東中部の山間）は冷夏となり水稲は福島山梨58%群馬54　栃木53　埼玉長野43%減

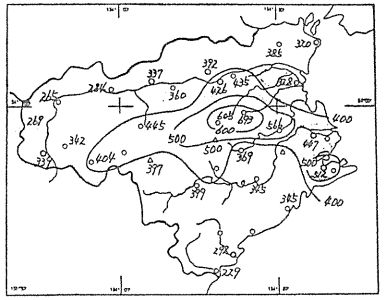
1953　昭和28　9　16　ひよう

此日午後雷雨が発生し阿波郡市場，八幡を中心として14時頃から15分間の降ひょうと落雷があった。ひょうは市場では1×0.5cm　八幡で直径3.5cm位のまであり多少の被害を出した。

1953　昭和28　9　24～25　台風テス（13号）

このAクラス台風は四国南方から真すぐ潮岬の南まで北上しそこから　NE進して志摩半島と　握美湾に大被害を与え日本を縦断した。全国の死者393名，その内108名は京都府で出している（舞鶴付近の大雨による）。

風雨状況　本県の南東方を稍離れて通った事と上陸前の中心気圧は930mbと少し衰えかけていたため徳島での風は左程強いものでなかった。（最低気圧983.4mb最大風速NW 22.5m）然し雨は阿久根台風以来と云はれる程大降りし鮎喰川上流で23日から25日の三日間に600ミリを越えた 23日は30ミリ位，24日は早朝に多いところで100ミリ，同夜から25日にかけてのものが台風直接の雨で毎時10ミリ以上の雨が15時間内外連続した最大は12～13時に鬼籠野68.7横瀬59.8ミリ等であった。



9月22日9時～26日9時　4日合計雨量

吉野川水位	板野	岩津	第十	新町
	8.6m	6.3	7.15	4.49
（警戒	9.0	5.5	6.5	3.5）

被害　降水の低地はんらんで板野郡が最も被害を受け徳島市，鳴門市がこれに次いだ　尚小松島港での高潮最大偏差は42cmで沿岸処々に被害を出した。

負傷6　不明1　全壊22　半60　流9　床上浸水1924　下8932　流埋田20町　畑2　冠水田1293　畑31　道203　橋70　堤98　山崩101　船沈1　流6　罹災者43806

［注］この時の雨が加はって徳島の9月雨量531ミリは第6位多雨

［木頭村誌］森林被害2万石以上　室戸台風以来の被害

1954　昭和29　1～4　暖冬

昭和28年は概して高温に経過した（年平均気温15.9は平年より+0.4）が12月から29年4月までの高温は顕著であった　徳島の値は下表の通り

	12月	1	2	3	4
月気温（平年より）	9.4（+1.9）	7.1(+2.1)	7.1(+2.0)	8.6(+0.6)	14.9(+0.9)
高温順位	4	2	5	—	1
雨量(平年に対する%)	78	177	68	61	158
日照　（〃）	87	68	117	106	100

1954　昭和29　3　火災

17日から26日まで（移動性）高気圧の範囲内にあること多く連日好晴が続き高温乾燥となり日本各地で火災が頻発した。　本県でも家火事，山火事が多数発生した。

1954　昭和29　4　5，11　低気圧（大雨）

東支那海から発達しながらNE進して日本海に抜けた二個の低気圧によって 県南海岸よりに局地的大雨があったこの両者は非常に似た雨量分布をしており急激な雨だったの多少の被害を出した。

	宍喰	川西	赤河内	日和佐	椿泊	木頭	桜谷
5日	248	180	167	151	25	115	161
11日	270	214	198	81	250	153	82

この雨は15時～09時の18時間位で　徳島では夫々SE14.5及びESE13.0を観測した。

1954　昭和29　6　22～23　低気圧（大雨）

22日15時東支那海に発生した低気圧が23日早朝に四国沖を東進しこの間に 海部郡の海岸で150ミリを越える大雨を降らせた（由岐190，日和佐173ミリ）このため三岐田町で山崩れを起こしる名の死傷者を出した

死2　傷1　家全壊4　山崩1

1954　昭和29　6　29～30　前線（大雨）

28日楊子江下流に出て来た低気圧はNEに進行し30日の早朝朝鮮中部の日本海側に出たが四国南方に梅雨前線が停滞し剣山山系に大量の雨を降らせた。特に29日の夜から30日の朝にかけての15時間位の間は雷を伴い多雨地では200ミリを越えた（川口292　祖谷241　大歩危238　池田200ミリ）

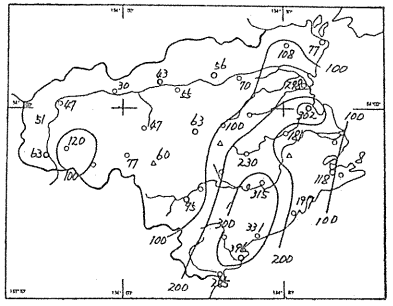
被害　死3　傷4　全壊15　半43　流6　床上165　下1233　道57　木材流654石

［注］西日本各地で小被害がある

1954　昭和29　7　30　前線（大雨，竜巻）

四国横断の低気圧に伴い終日雷雨があり（徳島では14時02分ひょう）特に13時頃勝浦川上流から出た雷雨はNEに進行して経路に大雨を降らせ小松島で竜巻を起した。

図のように徳島から宍喰にかけて最多区域が出ている。この雨は30日の午後から31日の昼頃までに降ったもので川西の最大時間雨量は106.6ミリ(23～24時）又小松島では68.7（1～2時）だった 徳島の日雨量（30日）273.5ミリは7月での第1位記録である。



7月30日9時～8月1日9時　2日雨量

被害　全壊2　半2　床上215　下1793　橋2　道3　山崩8　田冠水2003町　畑118

［注］小松島田浦の竜巻は13時30分に発生約2km東進して海上で消える。被害発生の1340頃は市50m全壊家1　半6　屋根窓ガラスの破損84戸　負傷1

1954　昭和29　6～7　低温多雨

5月も曇雨天は20日に達したが6，7月も同様に20日を数え且つ各日の雨量も多く県内で日雨量が100ミリ以上を計った日は6月では1，6，19，22，28，29日，7月では18，19，30となる。従って6，7月とも平年より甚だ多く特に海岸よりに顕著だった。特に県南の川西，宍喰の6月雨量は1000ミリを越え（1206及び1006ミリ）7月川西は806ミリだった。これは同時に低温少照をもたらすので徳島について見ると下表の通りになる

	6月		7	
雨　量	404.2（平年の208%	第4位多量）	483.1（239%	第2位）
気　温	20.6（平年より−1.1	第3位低温）	24.1（−1.7	第4位）
日照時	131（平年の76%	第8位少量）	156（71%	第6位）

この原因はオーツク海高気圧が優勢で梅雨前線は日本の付近及びその南方に停滞することが多かったこと及びしばしば大雨を見た為である。然し麦類の収かくはむしろ良好であった（大麦134俵187小178升）

［注］尚この時に九州より関東に至る各地でも各月2〜3度気温低下し冷害になった。

1954　昭和29　8　18　台風（5号グレイス）

18日の3時に南九州阿久根から上陸し四国を横断して神戸に上陸した台風で上陸前は940mb 徳島県上で970mbだった。　徳島ではこの日朝から夕方まで20m位の暴風雨が続き台風が本県に接近した夜に入って衰えた。最低気圧977.3最大風SE20.2m

雨量分布　剣山雲早山系が250ミリを越えその外側に少くなって県南海岸，吉野川平野は100ミリ以下だったが一宇付近に局地的大降りし521ミリを計った　これは50時間位の量である。尚この台風の最大高潮量は小松島で44日和佐で36cmである

被害　死2　傷1　全壊6　半24　流7　床上23　下215　田流埋2　冠水田120，畑276　道22　橋1　堤1　山崩4

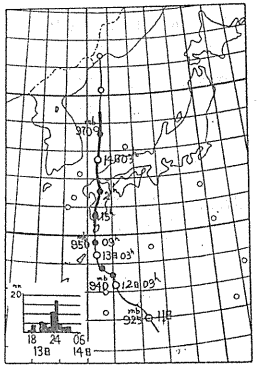
1954　昭和29　9　7　台風（13号キヤシイ）

7日の夜九州西岸を北上した中級台風で徳島の最低気圧1005.3mb最大風SE16.5m 本県の雨は山地では7日0時から8日の昼まで，平地では7日の夜から8日の昼までが強かった。最多は木頭の525ミリ（6〜8日の3日量）次位は福原の466ミリ　東海岸と県北西部で100ミリ以下だった。

被害　不明1　傷18　全壊1　半1　床上2　下26　田流埋1　田冠水248　畑142　道6　山崩3

1954　昭和29　9　13　台風ジューン（12号）

稀な大きさで北上して来たAクラス台風で台風眼が特に大きかった（最大直径200キロ）に反し中心付近の暴風は予想程に強くなかったこと，進行がおそく暴風雨の時間が長かったこと，極めて強いうねりで被害を大きくしたこと及び転向せずにシベリアまで北上したこと等で話題を生んだ台風である（死者計107人）



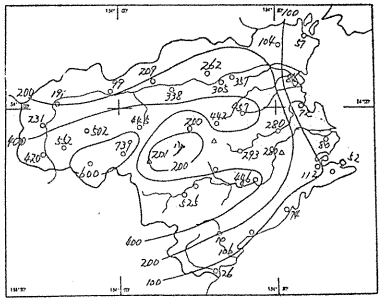
徳島毎時雨量　太径路は徳島15m以上

風雨状況　この台風が本邦のはるか南方にあった9日頃から海上ではうねりが高く10日から被害が出る位になった。13日の早朝九州のすぐ南方に近づいた頃から徳島では15mの風が吹き14日の12時頃まで凡そ25時間連続し最大風はSE32.2m（2時台風中心が山口県の北へ出た時）最低気圧985.4mb　雨は12日午後から始まり台風が九州を通過中一段と強くなったが最盛期は日本海に出てからで山間部では毎時30ミリを越え，中でも菅生は10時間に331ミリを計った雨の弱まったのは風と暑同時刻である。

被害　山間部の短時間大雨により各河川は増水し特に吉野川は空前の大洪水となり所々欠壊し三好　美馬　麻植郡等では家の全壊流失浸水等を出したが洪水予報実施で人的被害は少なかった　尚この台風による最大高潮量（小松島で）は65cmだった。

水位	池田	岩津	第十	新町
	10.20m	7.80	8.96	5.30

（計画洪水位は　第十9.00　新町5.88）



9.12〜13　2日雨量

死9　傷8　不1　全壊131　半263一部1902　流55　床上2057　下6886　田流埋7　畑66　田冠水4289　畑2012　船流失27　破14　道152　橋20　堤防63　山崖くずれ104　木材流880石　罹災者20230

1954　昭和29　9　18　台風（14号ローナ）

前台風の一週間後に発生したBクラス台風で 四国を目ざして北上し18日09時室戸沖合150キロ位から急にNEに転向した。徳島の最低気圧990.3mb最大風NW16.5　小松島港の高潮最大偏差53cm　雨は17日午後から18日の夕刻の大体24時間に最多雨地の剣山一雲早山系に150ミリを越える程度で大きな被害はなかった

被害　住全1　半1　床下5　田冠水10町　道1　堤5　崖くずれ6　罹災者16

1954　昭和29　9　26　洞や丸台風（15号マリー）

台湾東方からNE進し殆んど方向を変えずに，又多少発達さえもしながら急進して函館港で連絡船洞爺丸其他を沈没大惨事を起した有名な台風，全国死者は1361名（函館1228）不明400

風雨状況　風の強かったのは割に短時間で15m以上は徳島で26日4時から8時まで，最大風はSE30.2m最低気圧982.4mb　小松島港の高潮最大偏差60cm　雨は25日朝から前線による前ぶれが始まり16時頃から弱くなったが26日5時から8時は台風の雨があって9時過天気恢復に向った。福原を中心に400ミリと祖谷川上流の300ミリの外は一般に少ない。吉野川の水位は川口20.5m(11.20)板野10.8(11.30)岩津5.52(14.00)川島4.9(14.30)

被害　死3　傷116　全壊249　半370一部2232　流2　床上121　下1838　田流埋10　畑15　田冠水854　畑972　道58　橋10　山崩22　船沈25　流6　破29　其他総額10億円と云はれる。　（り災636戸，3727人）

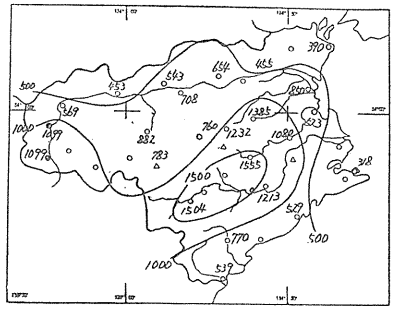
1954　昭和29　凶作

稲作にとって大切な9月に4回も台風の襲うところとなり雨量も極めて多く殆んどの地点で平年の倍量以上を計り最多雨地の福原木頭では3.5倍の1500ミリを越え月雨量としてのレコードを作った。引続く10月も北高南低型気圧配置で低温少照に経過した。

徳島（平年比較）

月	気温		雨量		日照	
8	27.4度	(+1.0)	187.4ミリ	(104%)	282.9時	(114%)
9	23.7	(+0.7)	527.8	(181)	161.5	(95)
10	16.9	(−0.5)	63.1	(33)	127.2	(76)

これらのため本年の水稲収かくは極めて悪るく昭和20年以後の最低記録139升に過ぎなかった（標準量の71%程度）



昭和29年9月雨量

［注］6，7月の梅雨とその後の雨及び9月の大雨によって徳島本年の総雨量は2459ミリとなり明32，明29年に次ぐ第3位を取った又日照時年計は少い方から第5位の記録である。

1955　昭和30　2　20　寒冷前線（風雨雪）

19日朝鮮中部からNE進した低気圧の寒前線が夜中に本県を通ってWよりの暴風となり徳島でWSW17.4mを計ったが寒気の氾らんで気温は8〜10°も下り30〜50ミリの降雨を見た　又20日の夜に入り雪が降り21日朝止むまでに麻植郡を中心に昭和26年以来の大雪となった。（海部郡は降らず）

川田50cm　穴吹30　鴨島25　池田17　徳島　板東　小松島　横瀬　和歌は10cm又はそれ以上

被害　山（がけ）崩2　通信被害2ヶ所

1955　昭和30　3　少照

今月の日照時数は103時間で70年内で第1位少照を記録した。これは曇雨天が甚だ多く不照日は10日を数えたためである。一方曇雨天のために気温の降下が防げられたためか最低気温の月平均値6.4度は3月として最も高い値であった。

徳　島　3月	平均気温	最高平均	最低平均	雨量	日照時
	9.7	13.6	6.4	85.4	103.2
平年比較	+1.7	+0.8	+2.7	87%	57%
順　位	7	10	1	—	(1)

1955　昭和30　4　15〜16　前線（大雨）

不連続線による大雨で佐世保のボタ山崩壊事故を起した。14日黄海に入った低気圧が16日まで停滞し，17日漸

く東進したがこの間本邦に前線が停滞した　16日午前中の本県の大雨は50～130ミリ15～17日の三日間雨量分布は県南半が150～200ミリ吉野川流域で100ミリ以下だった。

被害　全壊1　半3　田冠水70　道2　山崩1

1955　昭和30　6　17～19　梅雨前線（大雨）

低気圧は黄海にあって強いものでなく梅雨前線によって四国九州に大雨が降った　本県では南部で17～18日，北部で17～19日の間に100～150ミリ降り多少の被害を出した　　被害　田冠水3　道1　山崩1

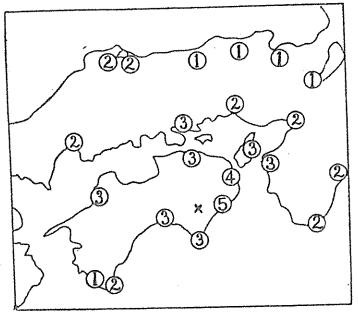
1955　昭和30　7　16　台風（8号）

16日四国沖を北西進して九州南部を横断した995mbの弱い台風　剣山周辺に200ミリ位の雨の外一般に少く被害も道路2ヶ所の程度で終った。　徳島最大風速SE17m

1955　昭和30　7　27　地震

10時21分頃那賀川上流（33.7N　134.2E）を中心に震度Vの地震があり四国全般中国近畿の大部分と遠く離れて諏訪猪苗代にも有感の本県としては観測開始以来の大きな地震で同日14時21時にも有感の余震を発生した。震源付近の宮浜平谷木頭の各村及び海南町で山崖崩れが多数起り宮浜村では死傷者も出た。

被害　死1　傷5　山崩20　トンネル崩1　道11



震度分布　　×　震央

1955　昭和30　7下～8中　干天

7月中旬は台風の近海停滞によって雨天が多く漸く24日からはれて8月の21日まで全般的な雨を見ず干天は28日間連続した従って8月21日の前線性降雨は農家や発電関係に大変喜こばれた。

1955　昭和30　9　30　台風（22号ルイズ）

27日九州内陸を西寄りに真すぐ北上したBクラス台風で北海道に再上陸したため関東近畿を除いた各地で被害があった。本県では27日夜から前ぶれが始まり27日夜から30日朝にかけての台風の雨が最も強く以後次第に小降りになった。27日15時～1日16時の総雨量は雲早山系が470ミリ，次は祖谷川上流が380ミリ，平地は全体に少く50ミリ程度だった。

徳島の最低気圧998.4mb　最大風SE24.8m　15m以上の暴風は30日0時～14時，尚小松島港の高潮量は30cm

被害　全壊4　半14　床上1　下15　田冠水87　畑250　道10　橋1　山崩7

1955　昭和30　10　4　台風（23号マージ）

4日豊後水道をNW進して日本海岸に出てからNEに転進した小型台風で沿道の諸県に被害が出た。本県は大部分が3日9時過頃から風雨となり4日の早朝が最も強く18時頃には大体終った。総雨量は前台風同様雲早山系を中心に250ミリを越えその外側に減少し平地は50ミリ程度だった。　徳島の最低気圧1009.1mb　ESE17.1m

被害　傷1　床下9　田冠水68　畑18　道3　堤1　山崩4

1955　昭和30　10　20　台風（26号オバール）

四国の南方を通って紀伊半島南部に上陸したCクラス台風で20日早朝から風雨が強まり夕刻には晴れた。

県内の総雨量は60～100ミリ程度である。最低気圧998.2mb　W15.3m

被害　床下2　田冠水1　道2　山崩2

1955　昭和30　豊作

この年は全国的に史上空前の大豊作となった。この原因は良い気候に恵まれたという以上に最近の農業技術，特に農薬の進歩に負うところが大であると云はれている。それはこの年以後の各年が従来の豊作以上の収穫をもたらしている事からも考えられる。

従来の最大豊作

昭和	30	31	32	33	34	35	36	37	昭8
全国	1238万トン	1090	1146	1169	1250	1285	1214	1301	1061
徳島	11.5	9.7	9.8	9.9	10.8	9.9	9.3	11.0	9.4

参考のため本年の気候を示すと

	6月	7	8	9	10
気温	22.8（平年より+1.1）	26.4(+0.7)	26.9(−0.3)	23.5(+0.3)	17.7(+0.2)
雨量	207（平年の106%）	138(69)	203(107)	99(33)	236(123)
日照	143（平年の82%）	222(100)	245(100)	190(112)	127(77)

以上のように特徴は少ないが7，8月旱天があったこと，9月の少雨多照が有効であったと思はれる

1956　昭和31　5　多雨

本邦南方海上は前線帯となってしばしば低気圧が通過し尚下旬（22日）に梅雨に入ったので曇雨天極めて多く（20日位の雨）雨量は平年の2倍以上になった。　徳島で月雨量296.6ミリは第3位多量，又日照時数119.5時間は第1位の少照記録である。

［注］この結果麦類の収かくは可成り不成績だった。

1956　昭和31　7～8　干天

7月上旬梅雨明け後，16日にかなりまとまった雨が降った外は小範囲の雨が数日あっただけで8月15日に及び30日程度の無降雨となり県下全般特に阿波麻植美馬郡等水利の不便な地域で干天被害が起り始めた。丁度この折下記台風の襲来があって干ばつの危機を免れることが出来た。

1956　昭和31　8　16～17　台風（9号バブス）

この台風は九州の西岸を夜の間に通り17日の朝山口県沖をNE進したBクラスのもので近畿以西に被害があった徳島の最低気圧989.7mb　SE24.2m，15m以上は17日04～12時　本県の風雨は16日の夜から17日昼過ぎまで15～20時間，祖谷川が多雨で400ミリを越えたところ（祖谷一宇）もあるが一般に少く雲早連山でも200ミリに達せず海岸地方は50ミリ以下だった。

被害　床下浸水5　冠水田2　畑2　道3　橋流1

［注］尚この台風のあと18日大館市で大火となり住家692非住家629戸を焼いた

1956　昭和31　9　10　台風（12号エマ）

上記の9号台風と殆んど似た経路をとって10日に東支那海から日本海え抜けた台風だが発生直後硫黄島から一時SW進の異常進路をとり，沖縄付近え北上した時930mbに発達した等の異常台風で尚雨量が多いこと，うねりが高かったこと等の特徴がある。

風雨状況　7日末明から　うねりが高くなりその午後から俄雨が多くなった。8日は強い俄雨で県南東部の多雨地帯では100～200ミリ，9日は200～300ミリになった。10日9時以後大降りはなく午過に終った。

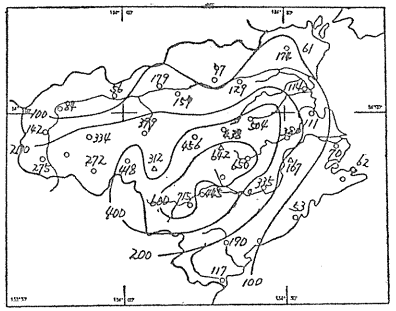
徳島で15m以上の風は9日18～10日09時最大はSE23.8m

最低気圧999.1mb小松島に於ける高潮量は25cmである

被害　死1　全壊5　床上1　下21　田冠水255　畑367

道8　橋1　山崩15　木材流60石

［注］この台風が日本海を通過中富山県魚津市で大火1755戸を焼く



9.7　9時～11　9時　4日合計雨量

1956　昭和31　9　26～27　台風（15号ハリエット）

夜の間に四国沖合を通過したBクラス台風　北海道以外に被害があり死者20

本県では24日の夜から雨のところあり25日夜からの連続強雨は27日の朝に及んで200～360ミリに達した。総雨量は祖谷川上流と雲早山系が400ミリを越え特に富岡では局地的に517ミリを計ったがこの東西一連の多雨帯の南北に少く200ミリになっている　那賀川流域で増水害を出した。　徳島の最大風W12.0m

被害　全壊3　半3　床上132　下924　田流埋1　冠水1264　畑215　道9　橋2　堤防8　山崩23

1956　昭和31　10　8～9　低気圧（大雨）

8日東支那海に発生した低気圧がNE進し日本海を通過中顕著な寒冷前線が9日早朝四国を通過した。この前後に本県でも局地的集中雨があって那賀川中流で200ミリを越したため被害が出た。漁船流失27　崖崩れ2　橋1

1956　昭和31　10　30～31　低気圧（大雨）

３０日東支那海で発生した低気圧は既に四国の南方に出来ていた前線を北上させて雷雨に伴う強い雨を降らせた（17～21時）　この日の雨量は　椿泊264　富岡249ミリ　徳島の155.4ミリは10月第４位の記録となる

被害　山崩　橋町（下福井）１　田冠水　橘３　羽ノ浦２

1956　昭和31　12　低温少雨

低温干ばつの傾向は11月から続いており特に12月に著しくなった。これは冬型気圧配置が卓越したためで乾燥した晴天が続いて各地に火災を出した　尚少雨の傾向は翌32年１月に及んでいる。

月	気温	雨量	湿度
11	12.0（平年より－0.3）	42.9(47%)	77(+4%)
12	6.1(－1.4)低温５位	4.1(7)少雨３位	58(－11)

［注］この異常乾燥は北陸東北を除く全国的なもので関東の無降水は40日以上続いた。

1957　昭和32　3　21　山火事

中旬から雨らしい降りがなく低温で乾燥した天気が続いていたが21日顕著な寒冷前線が通りNWの突風があって最小湿度は23%まで降った。21，2日県下で11件の山火事が発生し450町歩を焼いた。この日は近畿，中国，四国と広い範囲に亘って山火事を出している。

［注］乾燥した天候はこのあと４月半ばまで続く

1957　昭和32　6　27　台風（5号ヴァジニア）

台湾を通って27日早朝九州の西で消え丁度この時五島に進んで来た低気圧に肩変りしたＣクラスの台風で大した暴風雨はなかった。県下の雨量は前年８月の９号台風と好く似ており祖谷川上流で400ミリ　那賀川　勝浦川の中流で200ミリ　徳島の最大風速SE12.5m　　被害　田冠水250町　道５　山崩れ２

1957　昭和32　7　25～28　前線（豪雨）　［九州大水害］

尚この月2～5日北九州，7～8東北地方南部　16～18近畿と水害多し

1957　昭和32　8　20　台風（7号アグネス）

九州西方を通って朝鮮を北上したＡクラスの台風であったが本県とは巨離も遠いので被害は大きくなかった　徳島最低気圧1002.2mb 最大風ESE19.0m 県内の雨は台風が沖縄を越えて東支那海に入った頃から強くなり20日の夜が最も強く21日夕方で大体収まった。最多雨域は雲早山の東麓で500ミリを越え，大部の海岸と吉野川流域は100ミリ以下であった。

被害　全潰１　半潰２　冠水田２　畑１　道２　山崩13（２世帯）

1957　昭和32　8　23～24　台風（9号）

23日四国の南方から真すぐに北上した弱い台風で徳島の最大風もENE 10.8m に過ぎなかった。この時は最多雨量は川上の268ミリで雲早山系が150ミリ其他は少なかった。

被害　床下１戸　水田冠水70町　道３　山崩１（海部郡）

1957　昭和32　9　7　台風（10号ベス）

これは西日本の沖合を西進し名瀬の西から急に向を変えて北東に進み九州南部　四国北西部を通ったＢクラスの台風で通路の奥羽北海道外でも被害があった。徳島の最低気圧992.8mb最大風SE23.9m　15m以上の風は７日4～15時　雨は６日の夜台風が宮崎県に入った頃から強くなり　高松沖え出る７日15時頃まで続き剣山，雲早の南東斜面で300ミリ以上（出原352），その東，北に減少して100ミリ以下だった。

被害　床上３　下81　冠水田328　畑254　道１　橋１　山崩れ７（３世帯）

1957　昭和32　9　9～11　前線（大雨）

10号台風通過後四国沖に前線が停滞したが11日には北上し且つ低気圧も発生する等で特に雨量が多くなった。（11日川西169，川上146ミリ）３日間の合計雨量は県南東端が300ミリ北西県境に低下して100ミリである

被害　死１　傷４　半壊１　床上１　床下133　水田冠水492　道８　橋２　山崩れ18　材木流82石

1957～58　昭和32　11～昭和33　4　暖冬

下記の通りにかなり温暖多雨だった。

	11	12	1	2	3	4
平均気温	13.4（平年の+1.1）	8.6(+.12)	5.5(+0.6)	6.5(+1.5)	8.8(+0.9)	14.4(+1.0)
雨量	37(40%)	58(112)	34(81)	116(184)	158(162)	195(156)
日照	177(109%)	131(82)	171(105)	182(117)	194(107)	160(82)

気温の高い方からの順位は　11月８位，12月７位，２月９位　４月５位

1958　昭和33　1　26　南海丸沈没

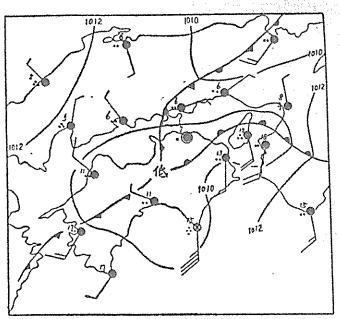
17時30分小松島港を出発した南海汽船株式会社の紀阿航路定期船 南海丸（498トン）は18時30分頃 沼島の南東方で「キケンキケン」の無線連絡をしたまま 沈没し乗客139船員28名全員遭難した（本船は約１年後に引上げ鳴門丸と改名して就航する）

当時の気象　右図に示したとおり気圧の谷に伴う温暖，寒冷両前線の中間の南風域内で起った事件で翌27日はこの谷が日本の東の海上に出て発達し中華東部の高気圧との気圧傾度が大きく15m位の強風が吹いた。　遭難当時の付近各地の風は

26日	徳島	沼島	洲本	和歌山
18時	S4.6	SSW8.0	S10.3	SSW10.8
19時	S8.4	SSW9.6	S11.7	SSW10.5

（沼島は現地の山上に設置してある兵庫県の風速計による）

これらは決して強いものではない，尚海上は上表から推察すると13～20m位と考えられる（沼島で最大風速は20時15.2m）この程度の風では遭難の直接原因とは考えられず従ってこの南の強風中に高くなった波浪の影響が大きかったのではないかと見られている即ち現場の近くを通った大阪商船あふりか丸の観測によれば16時20時には南の波浪6～9mを，又巡視艇あおりも20時40分に航行困難なうねりと波浪を経験している（潮流については異変なし）



26日18時［黒丸の左の小粒は 雨の程度を表はす］

1958　昭和33　3　31　霜害

中旬からずっと温暖傾向を続けていたが26日優勢な大陸高気圧が現れて冬型気圧配置に逆もどりし31日に移動性となって本邦を通過した。このため関東以西の各地で記録的な低温となり凍霜害を発生した。徳島でも31日の最低気温－1.9は下旬として第１位の低極であった。麦類にとっては上記の暖冬に加えて急激な寒害のため15960町歩，7794トンの被害となり反収は大麦109，裸141，小152升であった。

1958　昭和33　8　25　台風（17号フロシー）

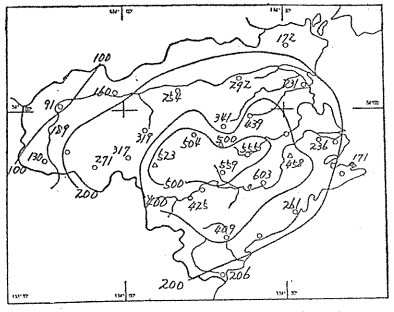
四国沖を真すぐ北上して25日紀伊水道を和歌山から上陸したＣクラスのもので三重愛知で水害が大きかった。

風雨状況　本県では23日の夜から前線北上による大雨が始まり25日18時台風が上陸するまで続いた　従って雨量は極めて多く23日横瀬286ミリ　日野谷278　福原旭210　24日坂州278　木頭267　川井263　鬼籠野 225　福原旭208　25日　日野谷 156 等を計った。合計雨量は図の通りである。

徳島で15m以上の風が吹いたのは25日14～19時の６時間

最大風はNNE21.6m　最低気圧988.8mb

被害　全壊２　半３　床上２　下108　田流4.5　冠水465　畑７　道７　橋３　堤６　山崩28　通信３



8.23　9時～26　9時　3日合計雨量

1958　昭和33　9　17　台風（21号ヘレン）

南方海上を北東進して東京に上陸したＢクラス台風で主に関東東北に被害があり全国死者25名を出した。

本県は南部海岸特に牟岐で大雨があった外大きな雨は無かった　牟岐の15日雨量368ミリ 徳島の最大風 N16.6m

最低気圧991.9mb

被害　田冠水25　堤１　道３　山くずれ　5

1958　昭和33　9　26～28　狩野川台風（22号アイダ）

近畿以東特に伊豆の狩野川に大災害（死合計900不明289）本県は被害なし

1958　昭和33　10　18　低気圧（大雨）

低気圧が四国の南岸ぞいに東進し高知から和歌山間で短時間の大雨となり被害が出た。本県では18日の朝日野谷で328ミリ川西270　宍喰232等を計り県南河川はん乱し丁度 刈取期の稲穂を流し死傷者を出す等の被害になった

被害　死1　傷1　半壊1　床上57　下221　田畑流埋129　冠水312　道15　橋4　堤4　山崩れ10　鉄軌道2　通信2回線

1958～1959　昭和33～34　温暖

この暖候は下表の通りに甚しい異常を示した

	12	1	2	3	4	5
平均気温	9.6(平年より+2.2)	4.8(−0.1)	8.5(+3.5)	10.2(+2.3)	14.8(+1.4)	18.7(+1.0)
高温順位	2	—	1	3	2	5
雨　量	88（平年の170%）	39(93)	63(100)	101(104)	215(172)	130(95)
日　照	182(114%)	171(105)	93(60)	200(110)	179(91)	191(90)

この長期に亘たる温暖多雨は麦作に多少の被害を出す一方海水温の上昇で 養殖海苔腐敗の被害は7～8割に及び又鰤の水揚げは皆無だった。

1959　昭和34　1　16～17　低気圧（風雨　低温）

16日日本海に入った低気圧は急に発達し徳島でも13mの強風を 観測したが夜から雪になって近年稀れな積雪を見た　徳島では5cmだったが 愛媛県では殊に 県南が激しく大洲で57cmを計った程で交 通に大きな障害を出した（尚南国鹿児島でも10cmと云はれた）この時は大陸高気圧は1060mbを示し強い寒 気が南下して来たので朝の最低気温は徳島で−3.7日和佐で−6.7を記録した。本県では積雪による山崩れがあった。

1959　昭和34　7　13～15　前線（大雨）

梅雨前線は早く北上し空つゆ気味で7月に入ったところ11，2日北陸で，13日以降 西日本でところどころ集中大雨があり死者44名を出した。徳島県では13日夜から15日にかけて雨が降り続いたがそれ程 の大量にならず最多地剣山の331ミリの外は割に少なく県の北半は100ミリ以下だった。　　被害　負傷1　全潰1戸　道1

1959　昭和34　8　8　台風（6号）

鳥島を中心に円に近い動きをして8日朝九州南端から夜中に四国南東部を掠めたBクラス台 風で九州南部から東北南部に水害を出した。徳島県では6日朝から雨が始まり　8日朝強くなり9日朝 まで続いたが 台風の通路に近かったため雨量は割に多く8日の日雨量最大は福原旭338　松尾川331ミリである。6日09時～9日09時の三日合計雨量は剣山で500ミリを越えこれから雲早山系に多く別に松尾川流域で400ミリを越えこれらの北方と海岸 とえ減少している　徳島の最大風ESE14.9m　最低気圧976.3mb

被害　浸水床上21　床下62　冠水田129　畑24　道7　橋2　山崩20　鉄道1　通信11　漁船流2

1959　昭和34　9　16～17　台風（14号）

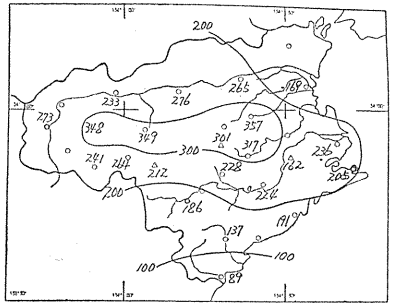
本邦の西を迂回して日本海を北東進したAクラスの台風で巨離があったため本県の 被害は少なかったが宮古島では最低気圧908.4mbを記録しSWの53mを計った。全国死 者40名の内，長崎県と 北海道で25人になる。県内の二日間の雨量は剣山雲早山川上の広い範囲で200ミリを越え阿讃山脈の少雨地は2，30ミリだった。徳島で15m以上の風は9～16時，最大風はSSE21.6m最低気圧998.4mb　尚鳴門では14時50分頃竜巻による被害を出した。

被害　傷1　全壊1　床上1　床下30一部破損30　道4　山崩4　通信7

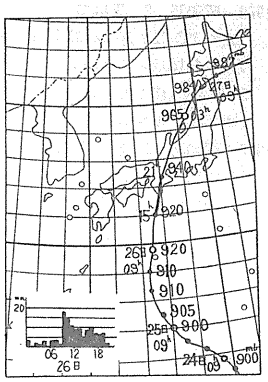
1959　昭和34　9　26　伊勢湾台風（15号）

潮岬の西から紀伊半島に上陸したAクラスの大台風で九州以外の各地に被害があり特 に名古屋は水害，高潮害が重なって全国死者4759名の内3000名を出した。上陸した時の潮岬の最低気圧は929.5mb（18時13分），本邦海岸の観測値で　これより深いものは室戸，第二室戸，枕崎台風のみである。且つ暴風圏が非常に 大きくしかも上陸後も勢力があまり衰えなかったため風による被害が大きく伊勢湾では3.55mの高潮を起こし潮水と 雨水との両方に攻められて未曽有の災害となった。

風雨状況　25日の午後からポツポツ降雨26日午後暴風雨圏内に入り15m以上の風は15～20時の6時間最大風速は徳島でN26.4m日和佐NW16.7mだった雨が上ったのは風の衰え始めた21時前後で県内の雨量分布は図の通り阿讃山系に比較的多雨であり同方面の河川被害が目出った。特に銅山川で15～20時に230ミリの豪雨があってダムコントローの方法と下流の山城町に発生した被害について建設省と地元との間に問題が起った。徳島最低気圧967.0mb



25日9時～27日9時　2日雨量



徳島雨量　太径路は徳島15m以上

被害　死4　傷24　不1　全壊25　半壊37　流1　床上438　床下1882　一部破損105　田流埋6　冠水2907　畑流埋5　冠水264　道77　堤39　山崩53　鉄道2　通信14　橋17　木材流25立方米　船沈1　流3　破損30　漁船10

高潮　この台風による小松島港の高潮量は74cm，県南海岸では処々で堤防決潰があった。

1959　昭和34　10　18　台風（18号）

本邦の稍南方を通った台風で県内では大した風雨にならなかったが県西部で山崩2ヶ所発生した。徳島の最大風N9.1m

1959　昭和34　9～11　暖秋

年初の暖かさに引続き各月気温は平年を上廻ったが秋にかなり高温を示した。

	9月	10	11
平均気温	24.6（平年より+1.4）	18.5(+1.0)	14.0(+1.8)
雨　量	363（平年の126%）	203(106)	93(101)
日　照	195（平年の114%）	144(86)	149(86)

70年間の高温順位では9，10月は第4位，11月は第3位となる　尚引続く12月も高温であったため年平均気温16.6は平年より1.1度の高目で第1位記録を樹てた。この間9月には伊勢湾 台風による大被害を受けたにかかわらず本県の米反収は昭和30年に次ぐものとなったがこれは農業 技術の進歩によるものだろう。　［昭30豊作の項参照］

1959　昭和34　12　2　低気圧（大雨）

二つ玉低気圧が西日本を挾んで通ったため本県では21時頃より降雨が始まり23時頃 雷雨を伴う局地豪雨になった徳島，横瀬，日野谷，川上の一線が100ミリを越え徳島106.5　川上185.0 となった。これは12月の日雨量としては従来の最高記録を破る大雨である　一方県西部に極めて少く20ミリ以下だった。この雨のため 阿南市橘町で死者1を出し機帆船1隻沈没した。

1959～1960　昭和34～35　暖冬

昭和34年初以来の高温は昭和35年に入っても止まず4月漸く平年に立もどった

	12月	1	2	3
平年気温	8.8（平年より+1.4）	5.5（+0.6）	7.3（+2.1）	10.2（+2.1）
雨　量	180（平年の346%）	35（83）	12（20）	74（76）
日　照	143（平年の89%）	192（118）	201（127）	186（102）

各月の状態を見ると12月は前半が高温，後半に低く甚だ多雨であり1月も似た傾向で前 後の温度差が大きかった2月は上，下旬が特に暖かく雨量の少ないことが目立ち，この月雨量12ミリは明治35年に 次ぐ第2位の少量レコードであり又近県でも記録となったところが多く出た。3月は寒暖の差が大きく雨も少なかった。

月平均気温の高温順位は　12月６位　２月４位　３月３位である。

1960　昭和35　2　干ばつ

上表のように２月の高温少雨は県下の野菜果樹に多くの被害をあたえた　この少雨は1，2月を通じて雨天らしい日が１月16日30ミリ同29日７ミリの２日に過ぎなかったためで２月の好天連続は異常乾燥を起こし17日鴨島　21日板野の山林で火災を出し２月の総火災件数45件前年同月の12件に比べて大差がある。

［注］隣県和歌山では26，28日山火事発生，殊に28日は根来寺付近で近年稀な大火になった。

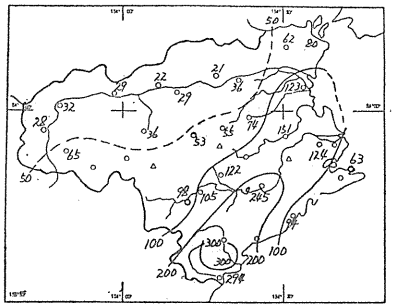
1960　昭和35　4　20　低気圧（大雨）

20日に西日本を通った二つ玉低気圧による大雨で，風も激しく徳島では同日早朝南の17.9mを観測した　県内の雨量分布も図のように昭和33年10月18日と似たものであった。

この雨で徳島の記録は次のように更新された。

	4月日雨量	1時間最大
1位	137.4（昭27，8日）	57.3（本年）
2位	123.1（本年）	26.9（昭34，5日）

被害　徳島　阿南市（橘町）で　床上38　床下418　田冠水135　畑650　道8　山崩6



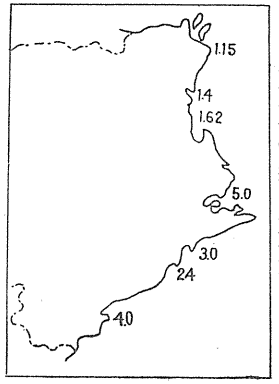
4.19～20　1日雨量

1960　昭和35　5　24　チリ地震津波

この日早朝太平洋岸一体に突然大津波が押し寄せ特に東北北海道で大被害になったがこれは南米チリ中部沖に起った大地震（38S，73.5Wで23日４時11分発）によるものであった。この津波は北海道，三陸沿岸に２時40分頃到着したが小松島えは３時28分になっている　震央から徳島までの巨離は157度（17455キロ）になるから津浪の時速は746キロである。この津波のための全国被害は　死者119　不明20　全壊家1571戸　半壊2183　流失1259等である

本県の状況　最初のはっきりした海面上昇の時間は小松島で４時10分（県南ではこれより早いと思はれるが観測では４後30分になっている或はこれは第二波であろうか）週期は40～50分で５波位の後は干潮時間に入るので橘町を除いて問題にならなかった（橘町では10波位が陸上浸入した由）最大振巾は図のように橘町５m（これは平水面よりの上昇潮高2.5mを２倍した値）浅川４m（全振巾，以下同）県北に減少して小松島1.6徳島1.4鳴門1.2となる。全く平常に復したのは４日後の27日夜であった。

被害状況　最大被害を受けた橘町では正常潮位からの増分は2.5～2.9mで海岸沿いの路上1.6mに達し全町の75%が被災，50%は床上浸水して災害救助法が発動された同夕までに26回の干満をくり返した由　其他県南の各所の被害は



チリ地震津波の全振巾（単位m）

	橘	大潟	津峯	福井	椿	由岐	日和佐	牟岐	海南	海部	宍喰
床上浸水	1000			32				17	5		1
床下	300	250	50	60	20	62	5	200	80		5
非住家	6			1			3				
畑流埋					1						
畑冠水	35			80			15	5	8		6
道損壊	2										
堤決壊	2	1		5	2						
通信施設	7										
木材流（石）									130	230	100
船破損				14			2			1	17

この外養殖真珠（浅川湾）の被害は水産被害の86%を占める大きいものであった。

1960　昭和35　6　21　低気圧（大雨）

日本海岸ぞいに東進した低気圧が発達し各地に南よりの強風雨をもたらした。本県では21日朝から雨が始まり大体１日間で終って剣山南東斜面で150ミリを越えた。　被害　道1　山崩れ5　軌道1

1960　昭和35　8　11～12　台風（11，12号）

この８月には10ヶの台風が発生し，内３ヶが四国に上陸した珍らしい年であった［高緯度多発の昭和25年から10年目で両者の傾向は似ている］第11号は21°N付近から出発し11日05時室戸の西安芸市付近から上陸，本県の西部を北上した小型台風で徳島で15m以上の暴風は７時間　最大風はE20.4mだった。雨は剣山～雲早山系に多く250ミリ以上　吉野川流域が100ミリ以下だった。

被害　死1　傷1　半壊2　一部9　道3　山崩れ8　田冠水98　通信19

第12号は24°N付近に発生し12日夕方前者と同様に安芸市付近から上陸した小型台風で剣山の東を北東進し21時には徳島の西を通った。徳島では15m以上は３時間最大風はSSE18.2m　県内の雨量は県南東部の川上，福原に最多雨域が出て250ミリ程度県北西に減少している。

被害　不明1　床下119　田冠水90　畑10　道7　通信2

1960　昭和35　8　24　台風（16号）

この日13時40分頃高知市の西へ上陸したBクラスの台風で雨量が非常に多く四国近畿各地で破堤山崩れ等を起し中でも京都府は桂川はん乱で大きな災害になった。

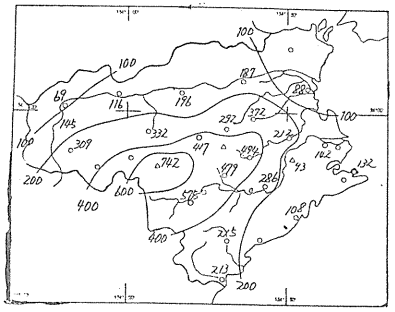
徳島では15m以上は12時間最大風はSSE25.6m最低気圧983.1mb，小松島港の高潮最大偏差66cm

風雨状況　台風の先がけ雨は27日の午後から始まり風雨ともに強かったのは29日の朝から晩方までで日雨量は　木頭474　坂州381　鬼籠野359等であった。

河川水位

吉野川	板野	川島	那賀川	古庄
最高	8.2m	4.3		6.87
（警戒）	9.0	5.0		6.50

被害　傷3　全壊7　半壊17　一部201　床上33　下879　田畑冠水606及104　道51　橋2　堤8　通信62　船沈11　流1　破1



27日９時～30日９時　３日雨量

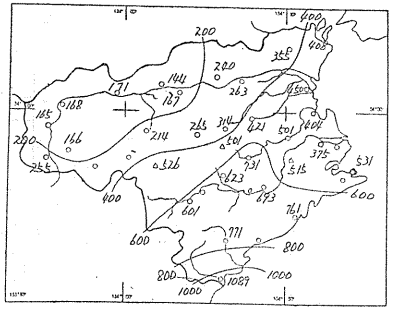
1960　昭和35　温暖

月平均気温が平年並になったのは4，6，12月のみで年平均は16.2度　高い方から第３位（大正３年と同じ）だった。

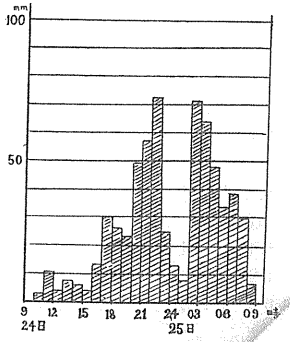
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均	5.5	7.3	10.2	13.1	18.2	21.6	26.8	27.3	24.2	18.3	13.9	7.7	16.2
平年差	+0.5	+2.2	+2.3	−0.1	+0.7	+0.1	+1.3	+0.8	+1.2	+0.9	+1.6	+0.2	+1.0

1961　昭和36　6末　豪雨（梅雨前線豪雨）

24日夜宍喰から始まった豪雨は26日近畿から紀伊半島に，尚28日には中部，東海道関東に移り30日北陸，東北にまで広がって２日に漸く晴天を見ることが出来たもので各地に洪水渦を起し特に天竜川，伊那谷（大鹿



6.24～29　6日合計雨量



宍喰の毎時雨量

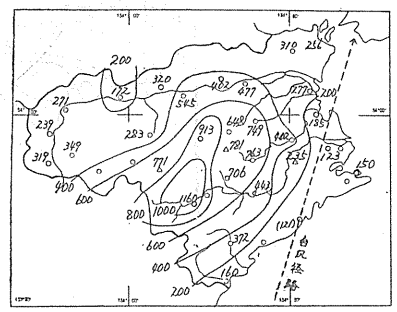
村）の大地とり，狩野川の再氾らん等の大災害が発生した。（尚３日には北海道南部に雨が及んだ）
昭和36年梅雨前線豪雨と呼ばれ死者総計270　不明82を出した。
降雨状況　24日15時頃から県南部でかなり強い雨が始まり夜に入り増々強く25日朝まで続いて宍喰で644ミリの記録的大雨となったが，この様に夜間の強雨が27日の朝までる夜連続し各日200ミリ以上のところが出たので県南河川は氾らんを起した　雨の上ったのは大体30日だった。宍喰の総雨量1089ミリは平地として日本最大のものだった。

	徳島	宍喰	川上	日和佐	椿泊	福原	日野谷	坂州	木頭	雲早山	大竜寺山	剣山
24日	135	644	347	307	300	195	252	177	232	94	213	98
25	62	59	38	146	21	113	78	100	106	84	43	101
26	185	253	283	184	145	340	317	276	211	254	190	202
27	24	15	19	32	45	27	26	22	18	24	34	24
28	29	111	61	88	16	41	15	33	21	27	30	55
29	15	7	23	4	4	15	5	15	13	18	5	46
計	450	1089	771	761	531	731	693	623	601	501	515	526

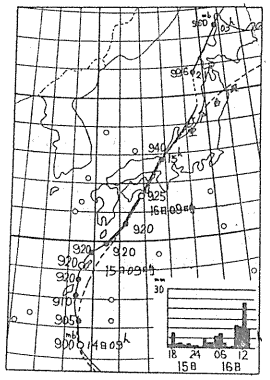
被害　今回の雨は県南海岸に始まり最強域は一日置いて那賀川流域に及び吉野川ではそれ程で無かった　最も大きい被害は農業関係で，土木被害はその５割程度，総額で２億５千万円と見られている。
重傷３　軽傷１　家全潰１　半潰６　床上290　床下3124一部破８　冠水田6378　畑143ヘクタール　道21　橋流４　堤１　山崩19　木材流失296m³ [28日県警]

1961　昭和36　9　16　第二室戸台風（18号）（高潮）

室戸に上陸し本県東部を通って阪神間を抜けた最大級の台風で本県には記録的な高潮被害を残したが幸いなことに人命損傷は全国的に少く（死者不明191 流失全かい13828戸）防災対策の充実して来たことを示した。

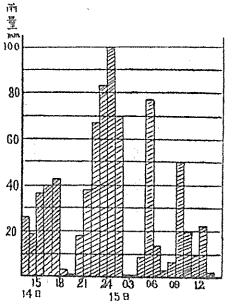


9.14～16　３日合計雨量



太径路区間は徳島15m以上徳島雨量

台風経路　9月6日に南方洋上で発見されNW進の後期（13日15時）に最低気圧885m bを観測した。四国から阪神にかけては図のように室戸台風の径路と殆んど一致している。県内の通路は左の雨量図に示す通りで日和佐から和田鼻に抜けている。
風雨状況　この台風が沖縄を目ざして北上中の14日午後から剣山　山系の南で一時間30～50ミリの俄雨があり夜に入って強く特に木頭では１時に100ミリを計った　この日沿岸では３m位のうねりが入って来た。15日午前中は俄雨が降ったり止んだりで終り夜に入って再び強くなり翌16日昼台風通過で収まった　三日間の合計雨量は上図のように1000ミリを越えるところもあり非常な大雨だったが短時間に集中しなかったので被害を軽減した 徳島で風速が15mを越えたのは15日21時～16日14時の18時間，最大風速はSE27.5（16日10時20分）最低気圧935.2m b（11時33分）は室戸台風時のものよりも低い第一位記録である。



木頭毎時雨量

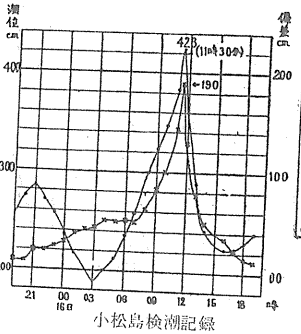
降　雨　量

	徳島	木頭	川井	鬼籠野	福原	坂州	下上分山	穴吹	鴨島	横瀬	川上	日野谷	市場	剣山	雲早山	大竜寺
14日	61	661	334	211	249	303	157	153	130	145	188	30	122	142	218	81
15	86	394	431	348	307	299	379	257	216	188	133	322	160	450	430	86
16	90	105	148	190	207	104	112	135	131	129	51	88	120	179	133	68
計	277	1160	913	749	763	706	648	545	477	462	372	440	402	771	781	235

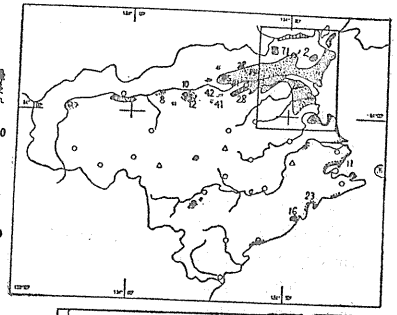
河川水位	吉野川 板野	吉野川 岩津	吉野川 川島	吉野川 中央橋	吉野川 第十	那賀川 宮浜	那賀川 和食	那賀川 古庄	那賀川 富岡
最高	12.60m	7.0	6.0	5.71	7.69	17.6	10.4	7.38	2.15
16日	15時	20	18	19	20	12	13	15	18

吉野川中央橋では既往最高水位（昭29.9.14）と同値，那賀川和食では昭35.8.29の9.5mを越える高水位となったが其他は皆稍低く破堤洪水には至らなかった。

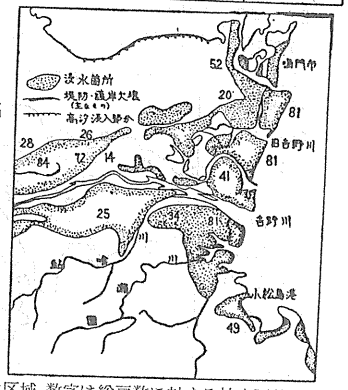
高潮　この台風では日和佐及び以北の海岸で高潮被害が発生し特に県北三市は全市が殆んど床下浸水以上となり低地で床上１m位のところも出た



小松島検潮記録



徳島沖洲町では大手堤防の決潰と沖洲川堤防の乗り越しで大きな被害になった。尚県庁玄関で地上75cmに達した（先の室戸台風では25cm）小松島検潮記録は図の通りに最高潮位は423cm（11時30分）天文潮位との偏差は190cmだった。（先の室戸台風では140cm）
県内各地の最高潮位は台風眼通過時と一致しそのあとすぐに減水した
被害　吉野川中流以下と日和佐町以北の４市21町村に災害救助法が出されたが被害が特に大きかったのは吉野町（総戸数に対する被害戸数は84%．右図参照）徳島市，松茂，市場(81)上板(72)鳴門(52)小松島(49)等であった。尚阿南市伊島では80%の家が損傷し又大波でかってない恐ろしい思いをしたと云う。
人死11　不明０　重傷20　軽233　家全潰569　半潰1777　流53　床上25313　床下39365　非7327　農28億　林６　水産８　土木25　学校1　商工19　家35　其他計122.49億円（９月30日現在）



浸水区域　数字は総戸数に対する被害戸数の%

	徳島	鳴門	小島松	阿南	勝名	那賀	海部	板野	阿麻波植	美馬	三好	計
死(人)	1人											
傷	17	15	14	9	12			3	3	1	2	11
全(家)	118戸	93	5	13	43	3	5	155	20	6	—	253
流埋	34	5				2	17	175	50	41	11	569
半	353	269	28	85	124	20	96	7		2	3	53
床上	13867	3284	2573	654	376	172	287	499	109	146	48	1777
床下	20864	13993	11274	2702	1734	158	621	2158	1548	344	50	25313
								4987	5662	614	334	39365

[注] 1　この台風で観測した名瀬の最低気圧は918.3mb(15日10時7分)室戸岬え上陸した時は930.9mbで伊勢湾台風時潮岬で観測したものと殆んど同値，日和佐では928.7mb。最大風速は室戸で80mを越したと云はれる尚大阪での高潮は421cmで偏差は241cmだった。

2　この台風は意外に被害が少なかったがその原因として台風が昼間に来たこと，本県では雨は多かったが一般には風台風だったこと，大阪での高潮対策が充分だったこと等が挙げられとくに報道機関の活動が大きな役目をはたしており，又一般には伊勢湾台風の教訓がしみ込んでいたこと等が考えられる。大阪で船舶被害，流材被害が皆無だったことは対策の重大性を教える。

3　今年の台風発生数は29ケ，内日本に上陸したものは第二室戸を含めて５ケ（11号志布志湾，15号宮崎，17号高知県，18号第２室戸，24号房総を掠める）あり18号以外で稲被害のあったものは東京に混乱をもたらした24号のみであった。尚４号は上海付近から日本海に入り５月29日東北地方に大火を起した。

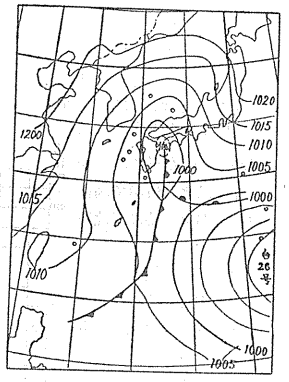
1961　昭和36　10　26～27　低気圧（大雨）

26日九州南方に発生した低気圧と東経140～150を北上した台風26号の影響によって25日夜九州から始まった大雨は26,7日中四国，近畿に移り関東では28日に高波被害を出した。この低気圧は27日朝には一たん瀬戸内に入ったが後南東に転進し東海沖に出ている。被害としては大分の電車埋没，宮崎及び小豆島の山津波，四国近畿の水害等がある　死者計50名位

風雨状況　26日昼頃から強い雨が始まり27日早朝まで続いた。そのため下図のように勝浦川上流で600ミリ近くになり其他広範囲の大雨で第二室戸台風の災害復旧のないあと，より一層被害を増し，中には前回を上廻るところも出た（吉野川下流域で刈取った稲束の流失，宮川内谷川及び勝浦浜橋付近の国道決壊）尚この間南よりの風が強く最大はS!20.5m（27日0時30分），15m以上は23～5時の７時間に及んだ。

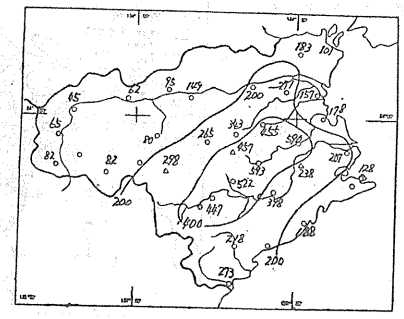
被害　徳島，小松島と上板町に災害救助法が出された。

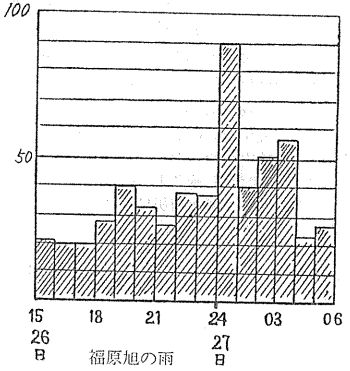
死２　傷２　不明２　家全壊３　半５　床上1422　床下7080　水田流７　冠水3432　畑３及び440　道79　橋７　堤26　山崩19　船沈５　木材4173m³



10.26　21時

［注］豊作を予想されていた水稲は第二室戸台風によって多少の被害を受けたあと又この雨によって害を受け量資共に低下した　反収2.13斗


10.26～27　１日雨量



福原旭の雨

1961　昭和36　9～10　ソ連核実験再開

９月１日に核実験を再開して以来10月23日25メガトン，30日50メガトンの実験をした。場所は北極圏内のノーバヤゼムリヤ島と考えられている　11月５日福岡では雨の中から1820MMC／cc（マイクロマイクロキューリー）の放射能が検出され８日大阪で280MMC其他日本の多くの地方で汚染が観測された　本格的の影響が起るのは62年４月頃ではないかと云はれている。［然しこの影響は日本では大きいもので無かった。一方米国は37年の４月末から南太平洋で一連の核実験を始め，ソ連も亦実験を予告して８月始めから再開し10月に至った。然しこれによる大気汚染度は従前のものに比べて著しく改善されたと云える］

［注］1954.3.1ビキニ環礁付近で操業中の第五福竜丸がアメリカの原子爆弾実験による死の灰を被り世界を衝動させたがその後ソ連，英，仏の実験となり最近一時中止されていた。

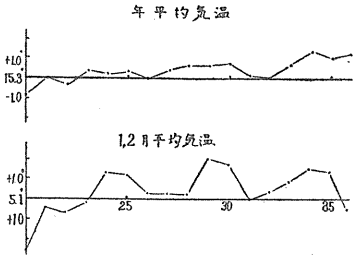
1961　昭和36　温暖

1,2月のみは平年気温に稍及ばなかったが其他の月は非常に高く中でも9，10月は２度以上，其他5，11月もかなり高温で夫々70年間第１位最高になった。従って年平均気温も大５と同温の第１位という珍らしい暖年だった。

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
平均気温	4.4	4.8	9.2	14.5	19.7	22.2	27.1	27.8	25.6	20.1	14.2	8.6	16.4
平年より	−0.5	−0.4	+1.1	+1.3	+1.0	+0.6	+1.4	+1.3	+2.4	+2.6	+1.6	+0.9	+1.1

［注］１　本年は異常の多い年で徳島の累年記録の中で10位内に入る値を拾うと50を越し，第１位のみを拾うと上記記録の外気圧最低935.2mb（９月16日）湿度６月の最少27％（６日）６月雨量507.4ミリ　10月最高気温31.8（６日）等

２　近年の温暖（暖冬）傾向は図の通りで暖候の原因が特に暖冬によるもの（例えば 24，25，29，30年）と冬期外の高温によるもの（27，28，36年）とに分かれる。尚この項の平年値とは1931～1960までの30年平均値をいう（凡例３の(2)参照）。



徳島最近の気温平年差

1962　昭和37　顕著事項

1.4　紀伊水道の地震　13時35分発　徳島震度４，西日本の殆んど全域有感一時は津波の虞れもあった程の大ゆれで海岸では混乱した。　1上　山の遭難多し

1下　日本海沿岸大雪本県西部に及ぶ　23，４日牟岐無線所属のマグロ漁船二隻30N付近で強風に遭難第二徳久丸は助かり第二協漁丸は消息を失う。

2中下　各地に火災発生，１３眉山燃える。

土讃線豊永で大崩壊（3.26開通41日ぶり）（この後3，4月時々崩れる）

3　時々強風と火災

4.3　海陸大荒れ，鳴門阿南両市では土俵を積んで大雨増水の堤防を守る

４日桜に雪　21日阿波板野地方に　ひょう

5.21　霧のため鳴門海峡で貨物船と油送船衝突（後者沈）　26，7　関東以西大雨

6中　10日から梅雨活ばつ　西日本大雨，県下被害多し　14日阿南市長生町明谷トンネル崩壊７名死

火山活動盛　6.17焼岳　29勝岳

7上　表日本豪雨［特に九州，（佐賀県太良町の山津波，長崎県江迎のボタ山崩）死56不明19］

11,2　瀬戸内海濃霧，鳴門で４隻座しょう　21，２又霧，鳴門で衝突，１隻沈

27　Ｃクラスの台風７号　田辺に上陸（９，10号は８月上旬北海道に被害）

8.25　三宅島噴火　8.26　台14号三重県より上陸

9　干害　徳島の月雨量49.5ミリは平年の⅕（10.5漸く雨）且つ高温（+1.1度）多照（+９％）

26日長崎県福江大火380戸　徳島安宅町７戸焼く

10.9　台22号マーカス島をおそう　室戸の漁船高大丸避難　10.15　県西に初雪

11下　Ａクラス台風28号圏内で漁船20隻（本県漁船は無事脱出）

12　高温　　［９，10月順調で空前の豊作　本文72頁参照］